

鳥山明

原作／脚本／  
キャラクターデザイン

小川 慧

著

ドラゴンボールスーパー

# DRAGON BALL SUPER

B R O L Y

## ブロリー

映画ノベライズ みらい文庫版



集英社eみらい文庫

# ドラゴンボール超 ゴロリー

映画ノバライズ みらい文庫版

原作／脚本／キャラクターデザイン 鳥山 明

著 小川 慧



この本は縦書きでレイアウトされています。  
また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。



ストーリー紹介

荒れ果てた  
星

宇宙の  
片隅にある



偶然発見された

サイヤ人がいた。

不気味な生物が巣くう

この惑星で、



ブロリ！



辺境の星で育った  
この男の名は、













## Contents

### もくじ

[いたつの願い](#)

[うねる惑星バンパ](#)

[うたいま](#)  
三と大佐

[バーダックの予感](#)

[じりめての友達](#)

[そこのサイヤ人あらわる](#)

[「ロリー」の異変](#)

[くせいの条件](#)

[しる空を超えた闘い](#)

[カロットの願い](#)

# 登場人物紹介



ブルマ

地球人。ベジータと結婚し、トランクスとブラの二人の子供がいる。



ベジータ

誇り高きサイヤ人の王子。悟空に強烈なライバル心を持つ。今は地球で暮らし、日々修業にはげんでいる。妻はブルマ。



孫悟空

地球育ちのサイヤ人。闘うことが好きで、相手が強ければ強いほどワクワクする。サイヤ人としての名前はカカロット。



ピッコロ

地球で暮らすナメック星人。いつも冷静沈着。



ウイス

ビルスの付き人の天使。おいしいものが大好き。



ビルス

第7宇宙の破壊神。おいしいものが大好き。

## キコソ

フリーザにつかえる  
科学者。スカウター  
や宇宙船を開発した。



## ベリブル

フリーザの世話役の  
老婆。フリーザにも  
遠慮なく発言する。



## パラガス

ブロリーの父。ベジータ  
王へ強い復讐心を持つ。



## フリーザ

宇宙でおそれられている  
悪の帝王。ナメック星で  
悟空に敗れてからは、復  
讐の機会をねらっている。



41年前  
ブロリー

生まれたときか  
ら異常な戦闘能  
力を持っていた。



41年前  
パラガス

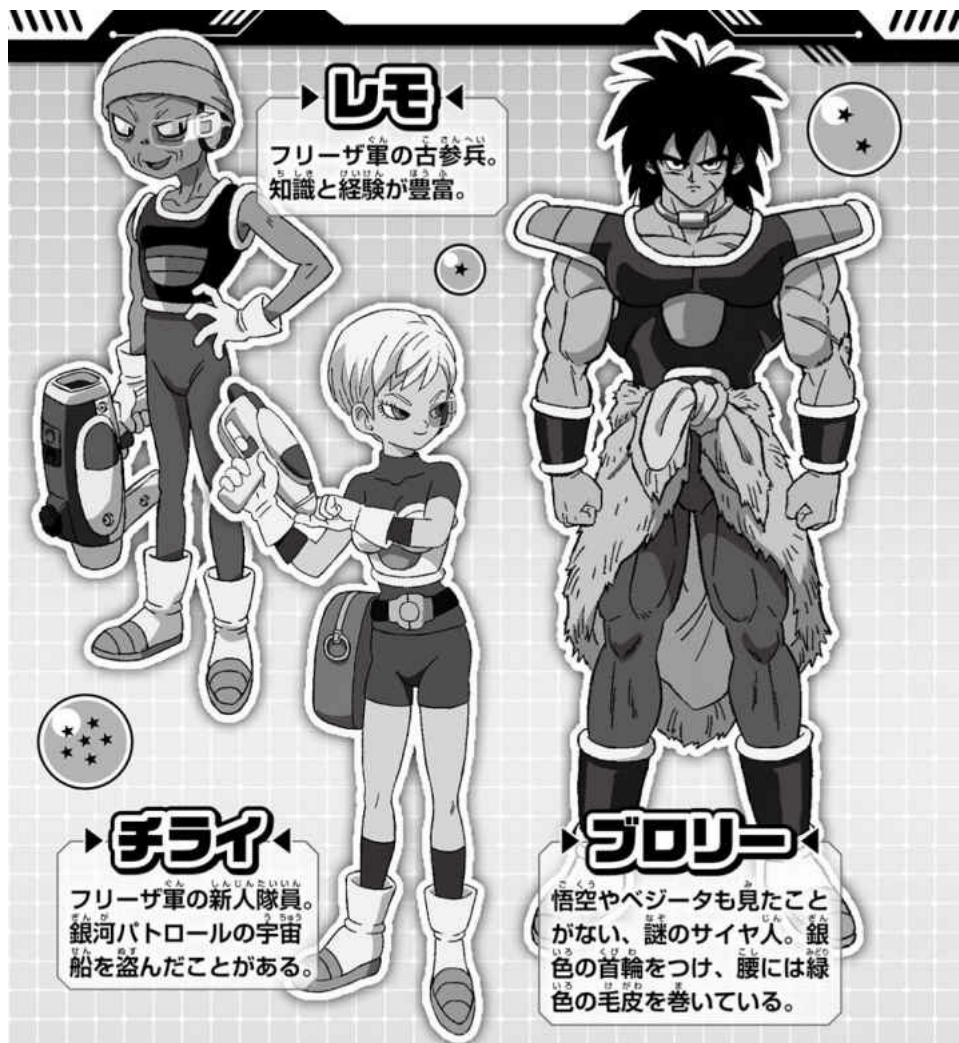
大佐としてベジ  
ータ王につかえる  
サイヤ人の戦士。



41年前  
フリーザ

父のコルド大王の  
地位を引き継いだ。







# 戦闘民族サイヤ人——

彼らは闘いを好み、  
ほかの星を侵略する宇宙のならず者だった。

しかし、いつしかサイヤ人は、  
圧倒的な力を持つコルド大王に支配されていた。

そして、コルド大王の息子で  
悪の帝王と呼ばれるフリーザは、  
千年に一度あらわれるという  
『超サイヤ人』のウワサを不快に思い、  
サイヤ人を、彼らが住む惑星ベジータごと、  
宇宙から消滅させてしまう——。

だが、偶然にも生きのこったサイヤ人たちがいた。  
広大な宇宙の片隅で、それぞれに生きのびた彼らは、  
運命にみちびかれるようにして、地球で出会うこととなる。

これは知られざる、  
そして新たなサイヤ人の物語である。







みなみ うみ くう き かぜ  
南の海に、あたたかい空気をふくんだ風が、おだやかにそよぐ。

うみ なか う みどり こう  
その海の中にぽっかり浮かんだ緑の孤島。

うみ ごう か た み  
海ぞいに、豪華なビルがいくつか建っているのが見える。

たてもの そら うみ み ひろ びろ  
建物のわきには、空と海がよく見える広々としたプール。

プールサイドには、パラソルの下にサマーベッドがならんでいる。

いっ けん  
一見すれば、まるでリゾートホテルのようだ。

けれど、にぎわう人々の姿はどこにもない。

かわりのようにサマーベッドに寝転がっているのは、破壊神ビルス。

その横のパラソルの下で優雅にモーニングティーとケーキを楽しんでいるのは、ビルスの付き人のウイスと、ブルマだ。

「んゝゝ、おいしゝゝゝい≡ 食べ物！ 空気！ ホント素敵すぎる別荘ですねえ、ブルマさん」

た まん ぞく ほお はな  
ケーキを食べて満足げに頬をおさえながら、ウイスがブルマに話しかける。

「いいでしょ〜」

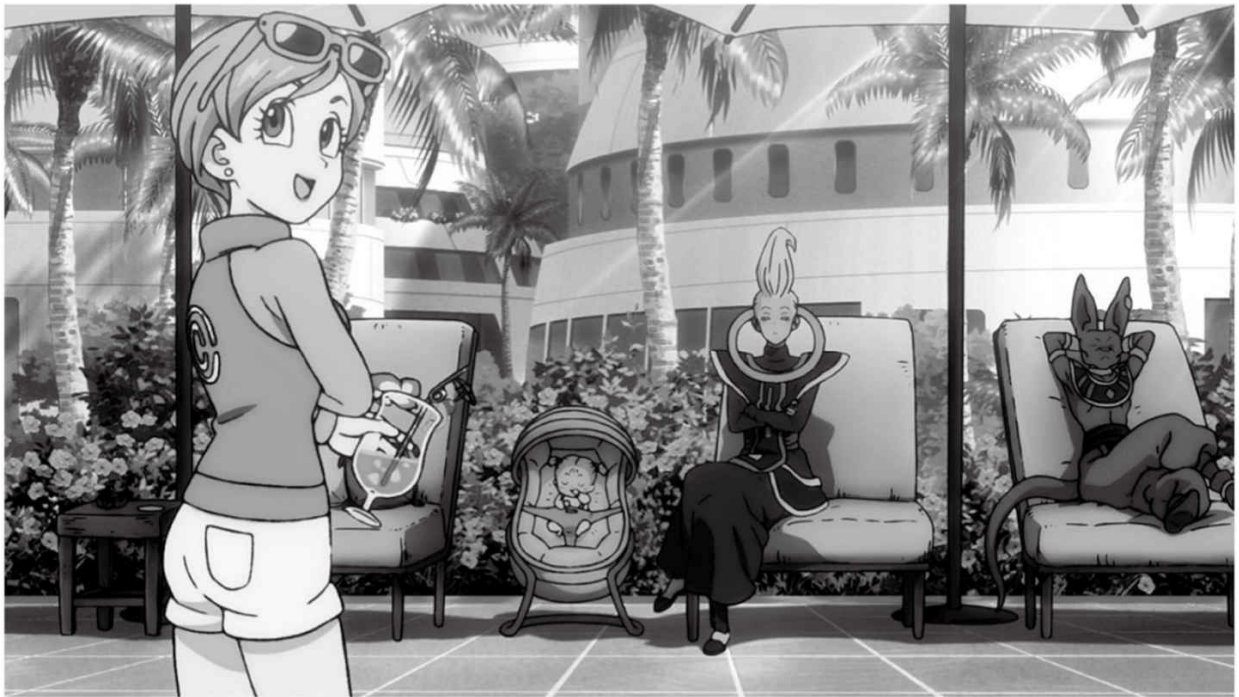
カクテルジュースを片手に、ふふん、と胸をはるブルマの横では、トランクスの妹のブラが、ベビーベッドの中ですやすやと眠っていた。

なん ねん まえ つく にし みやこ みなみ しま すこ あば  
「何年も前から造っていたのよ。西の都から南に1600キロ。このなんにもない島なら、少しくらい暴れてもだいじょうぶ！」

そら み わら  
空を見あげてブルマが笑う。

にし みやこ は かい  
「あいつら、そのうち西の都を破壊しかねないからね」

れいじょう む じん どう つく ベッ そう  
ここは、カプセルコーポレーション令嬢のブルマが、無人島に造らせた別荘なのだ。





ド——ンッ！ ドドドッ！

ガッ！ バキッ！ ドゴッ！

ブルマたちのいる場所からはなれた海の上空では、さっきから絶え間なくなにかの激しくぶつかる音が聞こえている。かと思うと、今度は海上に巨大な水柱が立った。

「がああ～！ うるせ！ ！ ！ ！ ！ ！ ぞ!!」

まったく気にしていない二人にかわって、怒鳴ったのは破壊神ビルスだった。

「もうちょっと静かに闘え！」

サマーベッドの上でくつろいでいたビルスは、長い耳を両手で折り曲げるようにふさいで、音の原因にむかって力のかぎりに叫ぶ。

ドガガガッ！

一度大きく空中で衝突音をひびかせて、音が止まる。

ビルスの怒鳴り声に気づいてこちらを見ているのは、対戦トレーニング中の悟空と、その相手のベジータだ。

いまにも飛びかかってきそうないきおいで怒鳴るビルスの姿を見た二人は、おとなしく休憩することにしたのだった。



「ところで悟空さん。あなたはなぜこれ以上の強さを求めるのですか？もしかして破壊神の座をねらっているのでは？」

プールサイドにもどり、山盛りのお菓子やケーキを口いっぱいにはおぼる悟空に、ウイスが身を乗りだして聞いた。

大きな大会があるわけでもないのに、悟空は毎日トレーニングを欠かさないからだ。

その質問に素早く反応したのはビルスだった。

「なんだと？ そいつは聞き捨てならんな」

「ちがうよ～。なりたかねえって、そんなの」

あわててケーキを飲みこんだ悟空は、両手を顔の前で振った。

「そんなので悪<sup>わる</sup>かったな」

悟空<sup>ご くらう</sup>の正直<sup>しやうじき</sup>な答<sup>こた</sup>えに、ビルス<sup>ほそ</sup>の目<sup>め</sup>がムツと細<sup>ほそ</sup>められる。

そんなビルス<sup>しり</sup>を尻<sup>め</sup>目に、悟空<sup>ご くらう</sup>はいかにもうれし<sup>うれ</sup>そうにニカツと笑<sup>わら</sup>った。

「この前<sup>まえ</sup>の全宇宙<sup>ぜん うちゅう</sup>の大会<sup>たい かい</sup>でさ、ほかの宇宙<sup>うちゅう</sup>にはまだ<sup>まだ</sup>とんでもねえヤツがいるってわかったから、オラ燃<sup>も</sup>えてん———だっ！」

一<sup>いっ</sup>氣<sup>き</sup>に氣<sup>き</sup>を解放<sup>かい ほう</sup>した悟空<sup>ご くらう</sup>の髪<sup>かみ</sup>が金<sup>きん</sup>色<sup>いろ</sup>にそまり、超<sup>スーパ</sup>サイヤ人<sup>じん</sup>になったのがわかる。

すこ<sup>すこ</sup>し<sup>し</sup>前<sup>まえ</sup>に、悟空<sup>ご くらう</sup>たちのいる第<sup>だい</sup>7宇宙<sup>うちゅう</sup>の存<sup>そん</sup>亡<sup>ぼう</sup>をかけた闘<sup>たたか</sup>いがあった。かろうじて闘<sup>たたか</sup>いには勝<sup>か</sup>ったが、その大会<sup>たい かい</sup>で、悟空<sup>ご くらう</sup>は何<sup>なん</sup>人<sup>にん</sup>もの強<sup>つよ</sup>い敵<sup>てき</sup>と出<sup>で</sup>会<sup>あ</sup>ったのだ。

かなわない相<sup>あい</sup>手<sup>て</sup>が宇宙<sup>うちゅう</sup>にはいる——その事<sup>じ</sup>実<sup>じつ</sup>に、悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>は本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にワクワクしている。

いつの日<sup>ひ</sup>か、彼<sup>かれ</sup>らとまた闘<sup>たたか</sup>ってみたい。

地<sup>ち</sup>球<sup>きゅう</sup>や宇<sup>う</sup>宙<sup>ちゅう</sup>をかけるのではなく、ただ純<sup>じゆん</sup>粋<sup>すい</sup>に闘<sup>たたか</sup>いを楽し<sup>たの</sup>みたいのが悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>とい<sup>にん</sup>人<sup>げん</sup>だ。戦<sup>せん</sup>闘<sup>とう</sup>を好<sup>この</sup>むのはサイヤ人<sup>じん</sup>の本<sup>ほん</sup>能<sup>のう</sup>でもある。

それ<sup>き</sup>を聞<sup>き</sup>いていたベジータ<sup>はな</sup>は、ハッ、と鼻<sup>な</sup>を鳴<sup>な</sup>らした。

「キサマの目<sup>め</sup>はすでにほかの宇宙<sup>うちゅう</sup>にむいているということか……あいかわらずおめでたいヤローだ」

悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>は超<sup>スーパ</sup>サイヤ人<sup>じん</sup>から元<sup>もと</sup>の姿<sup>すがた</sup>へともどる。

「あら。ではベジータ<sup>い</sup>さんはなぜ、これ以上<sup>じょう</sup>の強<sup>つよ</sup>さを求<sup>もと</sup>めるのですか？」

ウイスに矛<sup>ほこ</sup>先<sup>さき</sup>をむけられたベジータ<sup>ご くらう</sup>は、いらだたしげに悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>を押<sup>お</sup>しのけ<sup>い</sup>て言<sup>い</sup>った。

「フリーザだ！」

そして悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>の鼻<sup>はな</sup>先<sup>さき</sup>へ、思<sup>おも</sup>いきり人<sup>ひと</sup>差<sup>さ</sup>し指<sup>ゆび</sup>をつきつける。

「ここにいるバカヤローが、よりによってあんな悪<sup>あく</sup>魔<sup>ま</sup>を復<sup>ふっ</sup>活<sup>かつ</sup>させやがったからな!!」

「なんだよ。フリーザ<sup>だい</sup>がいなかったらオラたちの第<sup>だい</sup>7宇宙<sup>うちゅう</sup>はなくなっちまったかもしれねえだろ」

悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>はムツとした顔<sup>かお</sup>でその指<sup>ゆび</sup>をはらう。

そんな事<sup>じ</sup>実<sup>じつ</sup>を初<sup>はじ</sup>めて聞<sup>き</sup>いたブルマ<sup>おどろ</sup>は、驚<sup>め</sup>いて目<sup>まる</sup>を丸<sup>まる</sup>くした。

「あら、そうなの？」

「ああ。あいつ<sup>たす</sup>に助<sup>たす</sup>けられた」

「くっ、バカめ！ あれは自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のこ<sup>かん</sup>を考<sup>かん</sup>えてやっただけだ！」

フリーザ<sup>ご くらう</sup>に悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>たちへ<sup>なか</sup>の仲<sup>ま</sup>間<sup>い</sup>意<sup>しき</sup>識<sup>め</sup>がないことは、だれ<sup>だれ</sup>の目<sup>め</sup>にもあきらかだ。

いまい<sup>した</sup>ましげに舌<sup>う</sup>打<sup>う</sup>ちをして、ベジータ<sup>みぎ</sup>は右<sup>みぎ</sup>手<sup>て</sup>をにぎりしめる。

「この前<sup>まえ</sup>地<sup>ち</sup>球<sup>きゅう</sup>にや<sup>み</sup>ってき<sup>み</sup>たフリーザ<sup>たん</sup>を<sup>き</sup>見た<sup>かん</sup>だろ。ヤツは短<sup>たん</sup>期<sup>き</sup>間<sup>かん</sup>であそこま<sup>ま</sup>でしあ<sup>あ</sup>げてきた」

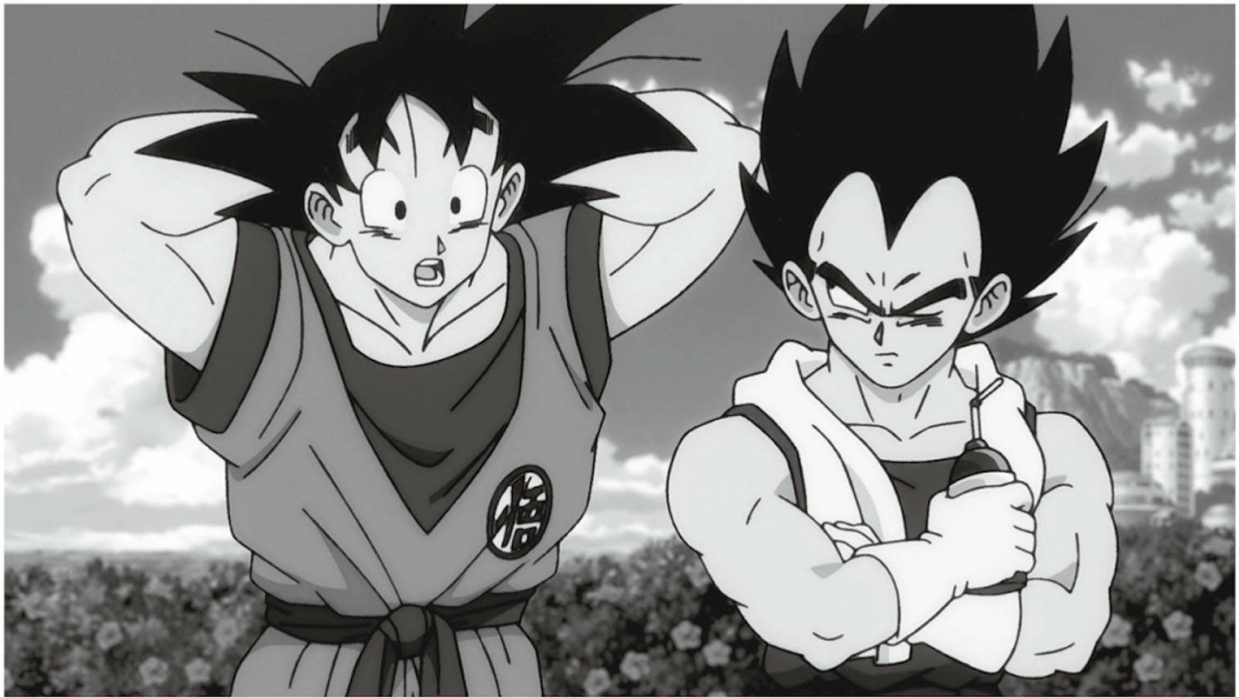
いまだ<sup>きん</sup>って、金<sup>きん</sup>色<sup>いろ</sup>にかがやくゴ<sup>つよ</sup>ル<sup>かん</sup>デ<sup>のう</sup>ンフ<sup>り</sup>リーザ<sup>り</sup>のおそ<sup>かん</sup>ろ<sup>たん</sup>しいま<sup>のう</sup>での強<sup>り</sup>さは、簡<sup>かん</sup>単<sup>たん</sup>に脳<sup>のう</sup>裏<sup>り</sup>によ<sup>り</sup>み<sup>り</sup>がえ<sup>え</sup>って<sup>く</sup>くる。

「さら<sup>ちから</sup>に力<sup>ちから</sup>をつ<sup>た</sup>けて、またオラ<sup>た</sup>ち<sup>お</sup>を倒<sup>た</sup>しに<sup>た</sup>くる<sup>た</sup>って<sup>た</sup>い<sup>た</sup>のか？」

「まちがいくな」

ベジータ<sup>おく</sup>は奥<sup>おく</sup>歯<sup>ば</sup>をぎり<sup>ご くらう</sup>りとかみ<sup>あた</sup>しめる。だ<sup>りょう</sup>が、悟<sup>ご</sup>空<sup>くらう</sup>はの<sup>りょう</sup>ん<sup>て</sup>きに頭<sup>く</sup>のうしろで両<sup>りょう</sup>手<sup>て</sup>を組<sup>く</sup>んだ。

「そうかなあ～？ 生<sup>い</sup>きかえ<sup>い</sup>らせてや<sup>い</sup>った<sup>い</sup>のに？」





「バカめ！ そんなことで、あいつが恩を感じるとでも思っているのか!!」

腹が立ってきたベジータは悟空につめよった。

「おめえ、何回バカって言うんだ～」

ふたたびつきつけられた指を悟空はあわててガードする。そして様子をうかがうように、両手のわきから顔を出した。

その態度が、さらにベジータの怒りに火をつける。

「何度でも言ってやる、バアアアアカアアアアアアツ!!」

まだ幼いトランクスが聞いたら、喜んでまねをしそうな言い方だ。

ブルマが、二人の言いあいのあいだに入ろうとした、ちょうどそのとき。

ピピピピピ！

ブルマの腕時計型の通信機が鳴りだした。

「あら、トランクスだ」

着信画面に表示された息子の名前を見て、通話ボタンをタップする。

『あ、ママ！』

時計の画面に映ったトランクスがうれしそうに笑う。

が、うしろの研究室は、なぜだかやけに荒れて見えた。

「なに？」

『ママ、研究室に泥棒が入ったみたいだよ』

「えっ？ なにを盗られたの？」

原因はまさかの泥棒だった。けれど、カプセルコーポレーション本部の施設内にある研究室に、盗まれていますぐ困るようなものはあったらうか。

そんなことを考えながら聞いたブルマに、トランクスが答える。

『監視カメラを見してみるね。えっと……』

トランクスは、通話をしながら、慣れた手つきで録画された犯行の様子を確認しはじめた。画像横にあるシークバーをもどして、被害前後の画面を見くらべる。

『——ママが集めてたドラゴンボールとドラゴンレーダーだね』

「なんですってえ——っ!!」

たいいていのものならまた作ればいいし、もっとすごい発明をすればいいと思っていたブルマだが、盗まれたものがドラゴンボールなら話は別だ。

すっとなきような声をあげたブルマのすぐ横で、いっしょに通話画面をのぞきこんでいたベジータが、そら見ろとでも言いたげな表情をした。

「だから言っただろ。おまえはセキュリティがあまいんだ」

前にも似たようなことがあったブルマは、痛いところをつかれてくちびるをとがらせる。

そんな両親を画面越しに見ながら、トランクスは首をひねった。

『あのね、ママ』

「ん？」

ブルマとベジータ、それに悟空も画面をのぞきこむ。

『映ってた犯人なんだけど、パパみたいな服を着てるよね』

「「あっ!？」」

転送された画像に映しだされているのは、たしかにそっくりな戦闘服だった。

ベジータと顔を見あわせうずきあったブルマは、悟空にも視線をやる。が、悟空はいまいちピンときていないようだ。ブルマはため息をつき、トランクスにむきなおる。

「サンキュー、トランクス！」

『へへ』

心配をかけないように、明るい調子でそう言ってブルマは通信を切った。

ベジータの眉間にしわがよる。

「……犯人はフリーザ軍だな。オレたちに気づかれないように、わざと戦闘力の低い連中を使っただ」

それしか答えはないだろう。

「フリーザのヤツ、しっこくドラゴンボールをねらってたんだ……」

最初の闘いも、フリーザがナメック星のドラゴンボールをねらったところから始まっている。

くやしそうなブルマとは反対に、悟空はのんきに首をひねった。

「あいつ、いまさらどんな願いがあるんだろ…… 神龍の力を超える願いはできねえから、宇宙一強くしてくれ、ってのは無理だし……」

ドラゴンボールを七つ集めれば神龍に願いをかなえてもらえる。

だが、フリーザの願いとは――？

ウンウン考えている悟空へ、ベジータがあきれたように言いはなつ。

「きまってるだろ。あいつの願いは死なないことだ」

「でもさあ～、死ななくても負けたら意味ねえだろう？」

「それでもあいつは、いつかオレたちを超える可能性がある！」

最初はまだ歯が立たなかった相手だ。

ベジータは、かつては抵抗をあきらめていたことすらある。

いまでも、超サイヤ人、超サイヤ人ゴッド、超サイヤ人ゴッド超サイヤ人の力を修業で身につけ、フリーザを上まわっている悟空とベジータだが、いつまでも同じとはかぎらないのだ。

フリーザが死なない体を手に入れてしまえば、可能性は無限にひろがってしまうではないか。

ブルマが二人を交互に見る。

「あ<sup>も</sup>たしが持<sup>も</sup>っていたドラゴンボールは六個よ。最<sup>ろっ</sup>後<sup>こ</sup>の一個<sup>さい</sup>を求<sup>いっ</sup>めてその場<sup>もと</sup>所<sup>ば</sup>に行<sup>しよ</sup>くは<sup>い</sup>ずだわ」

「どこだ」

「氷<sup>こおり</sup>の大<sup>たい</sup>陸<sup>りく</sup>よ。寒<sup>さむ</sup>いの苦<sup>にが</sup>手<sup>て</sup>だからあ<sup>て</sup>とまわ<sup>て</sup>しに<sup>て</sup>したの」

「氷<sup>こおり</sup>の大<sup>たい</sup>陸<sup>りく</sup>？」

場<sup>ば</sup>所<sup>しよ</sup>ま<sup>とく</sup>で特<sup>い</sup>定<sup>り</sup>して<sup>ゆう</sup>いたの<sup>に</sup>、そ<sup>り</sup>んな理<sup>り</sup>由<sup>ゆう</sup>であ<sup>て</sup>とまわ<sup>て</sup>しに<sup>て</sup>した<sup>とは</sup>、さ<sup>さ</sup>ずがブル<sup>ぶ</sup>マ<sup>ま</sup>だ。

驚<sup>おどろ</sup>く悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>を無<sup>む</sup>視<sup>し</sup>して、ブル<sup>ぶ</sup>マはピ<sup>こえ</sup>ルスとウ<sup>こえ</sup>イスに<sup>も</sup>声<sup>こえ</sup>を<sup>か</sup>け<sup>た</sup>た。

「あ<sup>い</sup>な<sup>い</sup>た<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>も<sup>い</sup>行<sup>い</sup>く？」

「ふ<sup>ひる</sup>ん。ポ<sup>ね</sup>クは<sup>ね</sup>昼<sup>ひる</sup>寝<sup>ね</sup>を<sup>す</sup>る」

ピ<sup>る</sup>ルスは<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>ら</sup>う<sup>に</sup>そ<sup>つ</sup>ぽ<sup>ぽ</sup>を<sup>む</sup>く。

け<sup>の</sup>れ<sup>き</sup>どウ<sup>の</sup>イスは<sup>き</sup>乗<sup>の</sup>り<sup>き</sup>な<sup>よう</sup>だ。

「あ<sup>ら</sup>、お<sup>も</sup>し<sup>ろ</sup>う<sup>そ</sup>う<sup>じ</sup>ゃあ<sup>り</sup>ま<sup>せ</sup>ん<sup>か</sup>」

「……う<sup>ま</sup>い<sup>も</sup>のあ<sup>る</sup>か？」

ウ<sup>い</sup>イスに<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>れる<sup>よう</sup>に、ピ<sup>る</sup>ルスが<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>と</sup>ブル<sup>ぶ</sup>マを<sup>み</sup>る。

「そ<sup>き</sup>れは<sup>たい</sup>期<sup>き</sup>待<sup>たい</sup>で<sup>き</sup>な<sup>い</sup>わ<sup>ね</sup>」

「じ<sup>ゃ</sup>あ<sup>や</sup>め<sup>と</sup>く」

「よ<sup>か</sup>っ<sup>た</sup>～！」

言<sup>い</sup>う<sup>は</sup>が早<sup>はや</sup>いか、ブル<sup>ぶ</sup>マは抱<sup>だ</sup>いて<sup>いた</sup>ブラ<sup>を</sup>、サ<sup>う</sup>マ<sup>え</sup>ー<sup>め</sup>ベ<sup>と</sup>ッド<sup>と</sup>の<sup>む</sup>上<sup>ね</sup>で<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>び<sup>お</sup>目<sup>め</sup>を<sup>し</sup>め<sup>じ</sup>か<sup>け</sup>た<sup>ピ</sup>ル<sup>る</sup>ス<sup>の</sup>胸<sup>むね</sup>に<sup>お</sup>押<sup>お</sup>し<sup>つ</sup>け<sup>た</sup>た。

「じ<sup>ゃ</sup>あ<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>の<sup>め</sup>ん<sup>ど</sup>う<sup>み</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>！」

「え？」

あ<sup>ご</sup>ま<sup>う</sup>り<sup>ん</sup>に<sup>ご</sup>う<sup>ど</sup>う<sup>に</sup>強<sup>ご</sup>引<sup>う</sup>な<sup>ご</sup>行<sup>こ</sup>動<sup>と</sup>に<sup>さ</sup>ず<sup>ば</sup>が<sup>つ</sup>の<sup>づ</sup>ピ<sup>づ</sup>ル<sup>づ</sup>ス<sup>も</sup>言<sup>こと</sup>葉<sup>ば</sup>が<sup>つ</sup>続<sup>づ</sup>か<sup>な</sup>い。

ブル<sup>ぶ</sup>マに<sup>い</sup>っ<sup>し</sup>ゅ<sup>ん</sup>な<sup>に</sup>か<sup>を</sup>言<sup>い</sup>いた<sup>げ</sup>に<sup>し</sup>た<sup>ベ</sup>ジ<sup>け</sup>ー<sup>き</sup>タ<sup>く</sup>も、結<sup>は</sup>局<sup>し</sup>は、走<sup>ご</sup>り<sup>く</sup>だ<sup>し</sup>た<sup>悟</sup>空<sup>くう</sup>とブル<sup>ぶ</sup>マの<sup>あ</sup>と<sup>を</sup>追<sup>お</sup>い<sup>か</sup>け<sup>る</sup>。

「よ<sup>っ</sup>ろ<sup>し</sup>く<sup>ね</sup>～！」

あ<sup>ふ</sup>っ<sup>こ</sup>う<sup>が</sup>い<sup>た</sup>ま<sup>に</sup>、そ<sup>な</sup>え<sup>つ</sup>け<sup>の</sup>ヘ<sup>り</sup>ポ<sup>う</sup>ー<sup>と</sup>から<sup>ゲ</sup>ィ<sup>ッ</sup>ェ<sup>ッ</sup>ト<sup>を</sup>吹<sup>ふ</sup>か<sup>し</sup>た<sup>小</sup>型<sup>こ</sup>飛<sup>が</sup>行<sup>た</sup>機<sup>ひ</sup>が<sup>こ</sup>離<sup>う</sup>陸<sup>き</sup>す<sup>る</sup>。

「ち<sup>よ</sup>っ<sup>つ</sup>、ま<sup>つ</sup>、——お<sup>い</sup>、こ<sup>ら</sup> } } } } } !!」

小<sup>ち</sup>さ<sup>い</sup>な<sup>あ</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ぼう</sup>坊<sup>ぼう</sup>の<sup>ブラ</sup>を<sup>か</sup>か<sup>え</sup>た<sup>ピ</sup>ル<sup>る</sup>ス<sup>は</sup>、あ<sup>つ</sup>け<sup>に</sup>取<sup>と</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>ま</sup>ま<sup>、</sup>飛<sup>と</sup>び<sup>た</sup>っ<sup>て</sup>し<sup>ま</sup>った<sup>彼</sup>ら<sup>の</sup>う<sup>し</sup>ろ<sup>姿</sup>を<sup>み</sup>送<sup>おく</sup>った<sup>の</sup>だ<sup>っ</sup>た<sup>。</sup>。



「氷<sup>こおり</sup>の大<sup>たい</sup>陸<sup>りく</sup>は<sup>さむ</sup>い<sup>わ</sup>よー！ 途<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>で<sup>ぼう</sup>防<sup>かん</sup>寒<sup>ぎ</sup>着<sup>か</sup>を<sup>か</sup>買<sup>か</sup>わ<sup>な</sup>き<sup>や</sup>」

ブル<sup>ぶ</sup>マは<sup>たの</sup>ど<sup>こ</sup>か<sup>も</sup>楽<sup>たの</sup>し<sup>そう</sup>だ。



ぼう かん ぎ か まち さが  
防寒着を買えそうな町を探すつもりらしい。

ご ぐう か もつ お ば すわ しつ もん ぐち  
悟空はうしろの貨物置き場にどっかと座りこみながら、いまさらながらの質問を口にした。

「なんでブルマはドラゴンボールを集めてたんだ？」

とみ めい せい かの じょ も  
富や名声なら、彼女はすでに持っている。

ご ぐう しつ もん うご と すこ ふ き げん  
悟空の質問に、ブルマはぴたりと動きを止めた。なんだか少し不機嫌だ。

「……うるさいわねえ……」

おし  
「教えよう」

こた き  
答えてくれないとよけいに聞きたくなる。

なおもせつくと、ブルマはいかにも言いにくそうに、小さな声でぼそりと言った。

「……わか さい  
若がえろうとしたのよ……5歳ぐらいね」

「そんなくだらねえことでドラゴンボールを!？」

「やかましい！ あんたたちサイヤ人にはわからないわよ！」

み の ど な しん けん  
身を乗りだして怒鳴るブルマは真剣だ。

ご ぐう  
悟空にはよくわからない。

だが、サイヤ人、とひとくくりになんか言われたベジータは、理由に思いあたるところでもあるようで、ふいっとブルマから顔をそらした。



ふた り と き  
二人のやり取りをだまって聞いていたウイスが、はてと首をかしげる。

「なんで5歳なんですか？ どうせならもっと……」

「……一氣に若がえったら不自然でしょ！ きつと言われるわ。あら～？ ブルマさん急にお若くなっただんじゃない？ もしかして整形かしら～、とかね」

だれかに言われたことがあるのでは、と思ってしまうほどなんだかみように現実味がある。

ということは、もしかして——

「さてはおめえ、ちよくちよくドラゴンボール使ってんな？」

「……」

ご くら すい り ひ こう き ぜん かい  
悟空のするどい推理に、ブルマは、飛行機のスロットルを全開にした。

「うわっ！ ……はははははっ！」

とつぜんの加速<sup>か そく</sup>によろけながら笑う悟空<sup>ご くら</sup>の横で、ベジータは、「ふんっ」と鼻<sup>はな</sup>を鳴らしたのだった。



ご くら めす さが こおり たい りく  
悟空たちが、盗まれたドラゴンボールを探して氷の大陸にむかっているころ。

の おお がた う ちゅうせん こう だい う ちゅうくう かん せい し  
フリーザの乗った大型宇宙船は、広大な宇宙空間で静止していた。

たん さく ち きゅう ふ か れん らく ま  
ドラゴンボール探索のため、地球にむかわせている部下からの連絡を待っているのだ。

おお まど ぎん が けい ほし ほし み  
大きな窓からは銀河系の星々がまたたいているのが見える。

し れい じつ ちゅう おう おお すわ ほし ほし  
指令室の中央で、フリーザは大きなイスに座ってその星々をながめていた。

い どう つか こ がた う  
となりには、移動のときに使う小型ポッドが浮かんでいる。





フリーザの座るイスとポッドのわきには、コロンと太った小さな人影がひとつ。

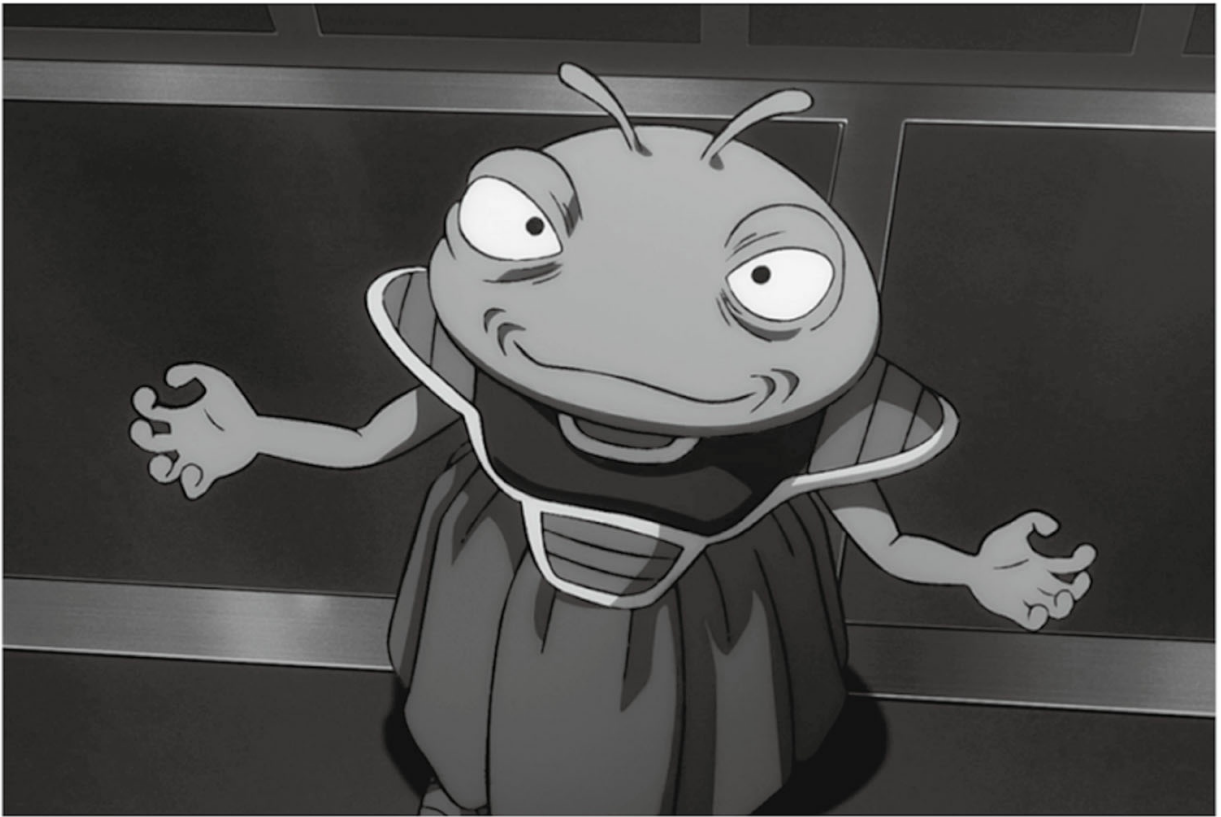
青い体に薄紫のボブカットの髪、フリーザの世話係のベリブルだ。

いつでもフリーザの命令で動けるように、宙に少し浮いている。

「フリーザ様」

部屋の自動ドアから入ってきたのは、黄色い体で頭に触角の生えた参謀長、キコノだった。

「幸運なことに、ベジータの妻がレーダーとともにすでに六個ものドラゴンボールを所有していたようで、それを入手し、最後の一個を求めて現在むかっているようです」





「ほう！ それはすばらしい報告ほうこくですね」

うれしそうに目を見開いたフリーザが、イスから身みを乗りだす。

「では地球ちきゅうにむけて船ふねを発進はっしんさせましょうか」

キコノの提案ていあんに、フリーザは余裕よゆうのほほえみを浮かべて、ふたたびイスへ深く腰ふかこしをしずめた。

「いえ、七個すべて見つかったからでいいでしょう。あせって早く到着たかするのは危険けんですよ。ヤツらはスカウターがなくても、高い戦闘力せんとうりきの接近せつしんがわかるようですから……」

地球ちきゅうにいるであろうサイヤ人じんたちは油断ゆだんならない。

「わかりました」

身みをもって学習がくしゅうしているフリーザの判断はんだんに、キコノはスッと一礼いちれいしてしたがった。

「願ねがいのかなえ方はメモしてありますね？」

「はい、抜ぬかりなく。……ところで……」

「なんですか？ キコノ」

言いよんだ部下ぶかをうながしてやれば、キコノがおずおずと口くちひらを開く。

「い、いえ。その……ドラゴンボールあつが集あつまったとして……フリーザ様さまは、どのような願ねがいをかなえられるおつもりなのかと……やはり以前いぜんから言いっておられた不死身ふじみの肉体にくたいですか？」

「ほ～っほほ。ちがいますよ」

「え？」

楽しそうに笑わらわれて、キコノは驚おどろいた。

願ねがいを変更へんこうすることになった理由りゆうを思おもい出し、フリーザの頬ほおがピクリと引きつる。

フリーザがこれまで不死身ふじみの肉体にくたいを願ねがっていたのは、不死身ふじみになれば、なんでもできると思おもっていたからだ。

「……地球ちきゅうの地獄じごくというところうごで動うごけなくされてわかりました……死しななくても動うごけないんじゃ苦痛くつうなだけだ」と

一面いちめんに咲さき誇る、黄色きいろい花はなのじゅうたん。ピンクの花はなが満開まんかいの木きにつるされたフリーザのまわりを、愛あいらしい妖精ようせいたちが陽気ようせいに歌うたいおどり続ける——あの苦痛くつう。

あんなものを見せつけられるくらいなら、死しんだほうがどれだけマシおもしろと思おもったことか。

「……では、たとえば、ダメージを受うけない、とか……？」

「それじゃあゲームがおもしろくありません」

「……うゝゝん……なんでしょう……？」

「ほほほ、あたりませんよ」

いままでの自分の願ねがいからは、おそろく見当けんとうもつかないだろう願ねがいごとだ。

あごに手てをあて、真剣しんけんになやみだしたキコノをフリーザが楽しそうに見みていると、

「身長しんちょうを、伸のばしたいのでございませよ？」

「え!？」

それまで、ななめうしろで静しずかにひかえていたベリブルが、とつぜんそんなこといを言いいだした。

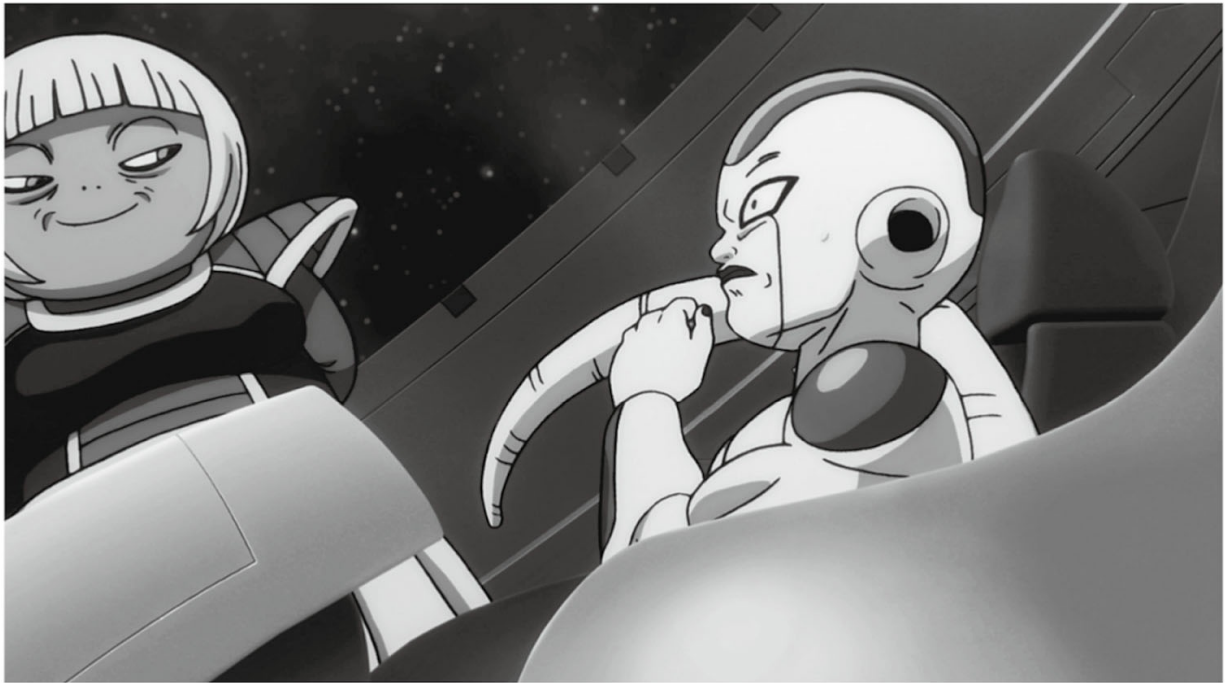
キコノの黄色い顔が、あわてて青ざめて見える。

「べ、ベリブルさん！　なんてことを……！」

「かげでフリーザ様をチビと言っていた兵士を何人も消されていますからねえ」

したり顔で続けるベリブルを、フリーザは口を真一文字に結んだままで見つめ、それから、フツと息をついた。

「……さすがですねベリブルさん。正解です」



「え！ 正解なんですか？」

驚いたのはキノノだ。

不死身の肉体を願っていたフリーザが、まさか身長を願うだなんて思わなかった。

「だれにも言わないと約束できますか？」

「も、もちろんです！」

背筋を伸ばしたキノノを手まねし、フリーザはナイショ話をするかのように声をひそめる。

「身長を、5センチ、伸ばしたいんです」

「え？」

一瞬、聞きまちがえたのかと思ったが、フリーザの顔は真剣だ。

「……で、でしたら第二形態あたりの変身のままであれば、じゅうぶんな身長が……」

「いいえ！ わたしは、普段や最終形態で大きくなりたいんです！」

「……………では、……なぜ、わずか5センチ……」

これは不敬にあたるだろうか。

ドキドキしながらも、思わず聞いてしまったキノノに、フリーザは「おバカさん」とでも言うかのように、ムツと口をとがらせる。

「一気に大きくなったんじゃ不自然でしょ！ まだ成長している感じにしたいんです」

「……な、なるほど……」

理にかなっているような、そうでもないような……。

けれど、そのために本気でドラゴンボールを集めているフリーザに、それ以上つつこんではいけない。長年の経験から察したキノノは、おとなしくうなずいたのだった。

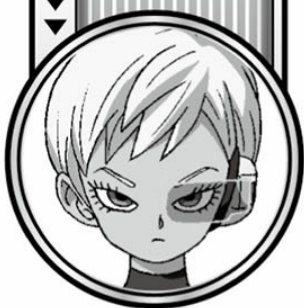




其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

二<sup>に</sup>

小惑星<sup>しょうわくせい</sup>バンパ



フリーザを乗せた大型宇宙船が静止している宇宙空間から、何光年も遠くはなれた宇宙――

そこに、一隻の小型宇宙船が飛行していた。

乗っているのは、フリーザ軍の非戦闘員のレモとチライ。

新しく戦力になりそうな人員をスカウトすべく、いろいろな惑星を探索するのが任務なのだが、そう簡単には見つからない。

「こんなところ、だれもいねえって……」

窓から外をながめつつ、まるで男の子のような口調で愚痴をこぼしたのはチライ。

きれいな緑の体にベリーショートの白い髪は、一見少年のようだが、れっきとした女の子だ。

「ましてや最低でも戦闘力1000のヤツなんて、なかなかいないぞ」

「しょうがないだろ。軍の再生のために、ひとりでも多くの戦闘員を探してこいって命令だ」

操縦席からチライをなだめるように言ったのは、相棒のレモだ。

黄色いニット帽の似あうオレンジ色の体のレモは、フリーザ軍にはもう何十年も属しているベテラン非戦闘員のひとりだ。

「でも、戦闘員、いっぱいいたんだろ？ どうしたんだ？」

フリーザ軍と言えば、とんでもなく強いことで有名だ。

その戦闘員が足りなくなるような闘いがあったなんて、チライは聞いたことがない。

レモはそっけなく「さあな」と言ってから、思い出したようにつけ足した。

「まあでもウウサじゃ、ふがない闘いをしたからフリーザ様に全員殺されたいぞ」

それが本当なら、自分で殺しておいてまた集めろだなんて、ムチャクチャな話だ。

「……ちっ」

舌打ちをしたチライに、レモが聞く。

「チライ。おまえはなんでフリーザ軍に？」

「……銀河パトロールの宇宙船を盗んだのがバレて追われちゃってさ」

それがどうして理由になるのかと首をひねるレモに、チライはニヤッと笑ってみせる。

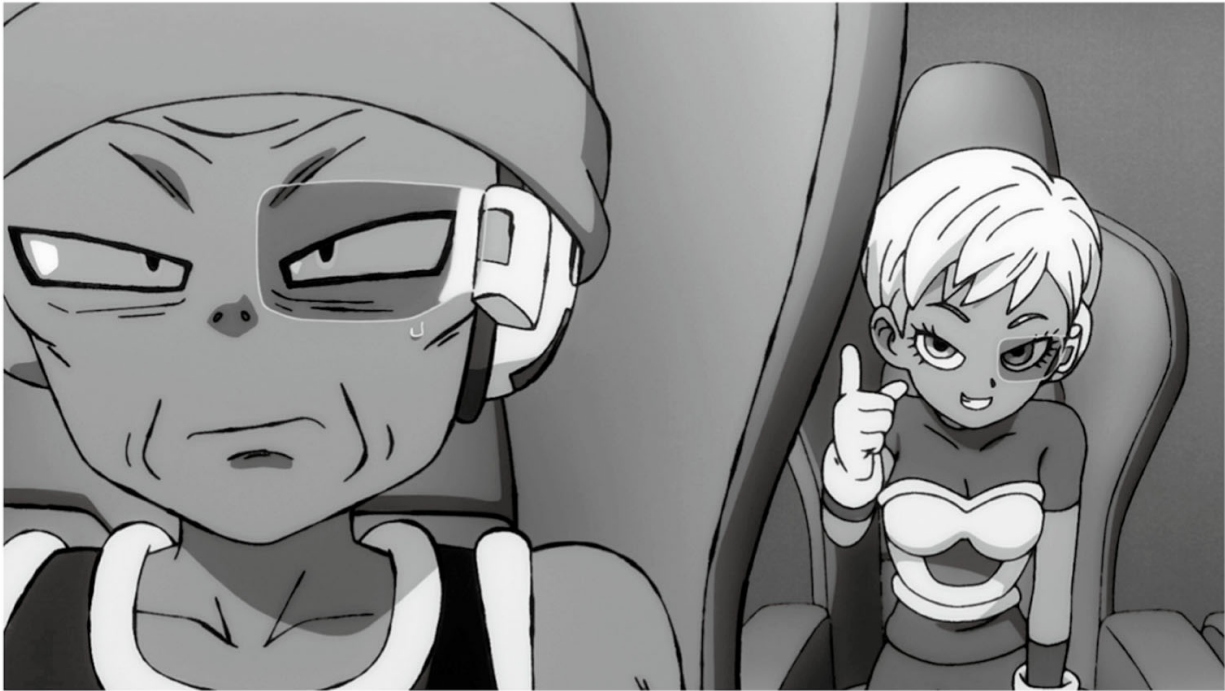
「フリーザ軍ならヤツらも手を出さないだろ？」

「……クズだな」

「まあね～」

得意気に笑いながら、チライはレモのうしろの席に移動した。

暗い宇宙を見ているのにもあきたのだ。



まえ　　そうじゅう　　つづ　　はな  
前をむいたまま操縦を続けるレモに話しかける。

「レモさんはずっとフリーザ軍だったんだろ？　会ったことあるのか？　フリーザ様に」

きょ　だい　　ぐん　　あ　　さま  
巨大なフリーザ軍のトップであるフリーザは、基本的に母船にいる。選りすぐられた戦闘員たちをしたがえて、自身も前線  
た　　し　　ま　　つ　　た　　ん　　み  
に立っているらしい——ということは知っているが、末端のチライは見たことがなかった。

おれ　　せん　　とう　　いん　　み  
「俺は戦闘員じゃない。ステーションで見かけたことがあるだけだ」

なが　ねん　は　たら　　おも　　せき　　み　　の  
長年働いているレモでもそうなのか、と思いながらチライはうしろの席から身を乗りだす。

「ちっちゃいらしいね」

「おい！　二度とそのことを口にするんじゃないぞ。生きていたいんならな」

「わ、わかったよ」

いき　　ころ  
「息がクサイってだけで殺されたヤツもいたんだぞ」

ごく　あく　ひ　　どう　　さま  
極悪非道のフリーザ様には、そういうウワサはごまんとある。

だが、たぶん一生会うことなどないだろう。

チライは「ふんっ」と鼻を鳴らして悪態をつく。

「しかし、じいさんと女を使うようじゃ、フリーザ軍もそろそろヤバいかもね」

たしなめるようにレモがうしろをふりむきかけた、ちょうどそのとき。

ビー！　ビー！　ビー！

せん　ない　　おと　　た　　てん　　めつ　　はじ  
船内のセンサーがいつせいにけたたましい音を立てて、点滅を始めた。

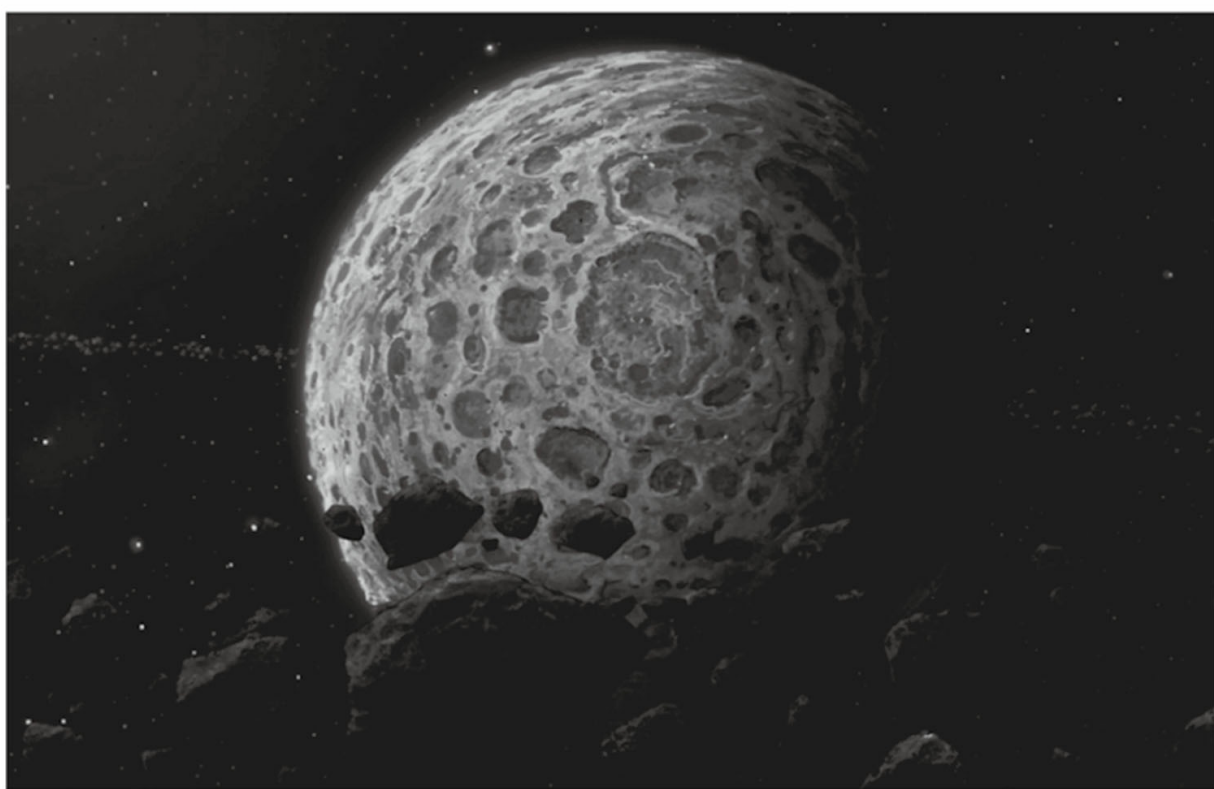
「え？　なんだ？」

きゅう　なん　しん　　ごう　　ふる　　ぐん　　しん　　ごう  
「救難信号だ！　しかも、ずいぶん古いタイプのフリーザ軍の信号だぞ」

きゅう　なん　しん　　ごう　　しめ　　しん　　ろ　　か  
レモは救難信号の示すほうへと針路を変えた。

それからほどなく。

う　　ちゅう　　き　　いろ　　ほし  
宇宙デブリのむこうにでこぼこの黄色い星があらわれた。





レモは、ニヤリと笑いながらチライを振りかえる。

「助ければ特別ボーナスがもらえるかもしれんぞ」

「おお～！」

特別ボーナス、ぜひともほしい。

「よし、さっそく行こう！」

センサーの点滅を追って、レモは宇宙船の着陸準備を始めたのだった。



救難信号が発信されている場所を探して降下したレモとチライは、古びた小型の宇宙船を見つけて、近くの岩場に着陸した。

銃をかまえたレモが慎重に中をのぞいてみる。が、やはり壊れているようだ。

いまは見ない旧式の宇宙船は、どこもかしこもボロボロで、中にはだれも乗っていない。

「いないな」

下に降りて外周を調べていたチライが言った。

「スカウターを使ってみる」

レモはいったん銃をおろして、スカウターのスイッチを入れた。

どこかに人の気配はないかとあたりを見まわしたちょうどそのとき。

少しはなれた場所から、ひとりの男がこちらに駆けよってきた。

「……お、お……おお——っ!! フリーザ軍か!?!」

「!?!」

雄叫びに近い声をあげて駆けよってきた男は、足がもつれたようにその場に倒れた。

レモは岩から飛び降りて、念のために銃をかまえながら男に近づく。

伸びたヒゲに深いシワのある男はずいぶん年老いているが、筋肉は盛り上がり、体はきたえられた戦士のようだった。

着ている服はボロボロだが、どこかで見たような気がする。

「あっ！」

起きあがろうとする男にシッポが生えているのを見て、レモはハッとした。

「あんた！ ま、まさかサイヤ人か!?!」

「サイヤ人……？」

不思議そうに聞かえしながら、チライはレモの少しうしろで立ち止まった。

まだ若いチライは、かつてフリーザ軍に多くいたサイヤ人の活躍を知らないらしい。

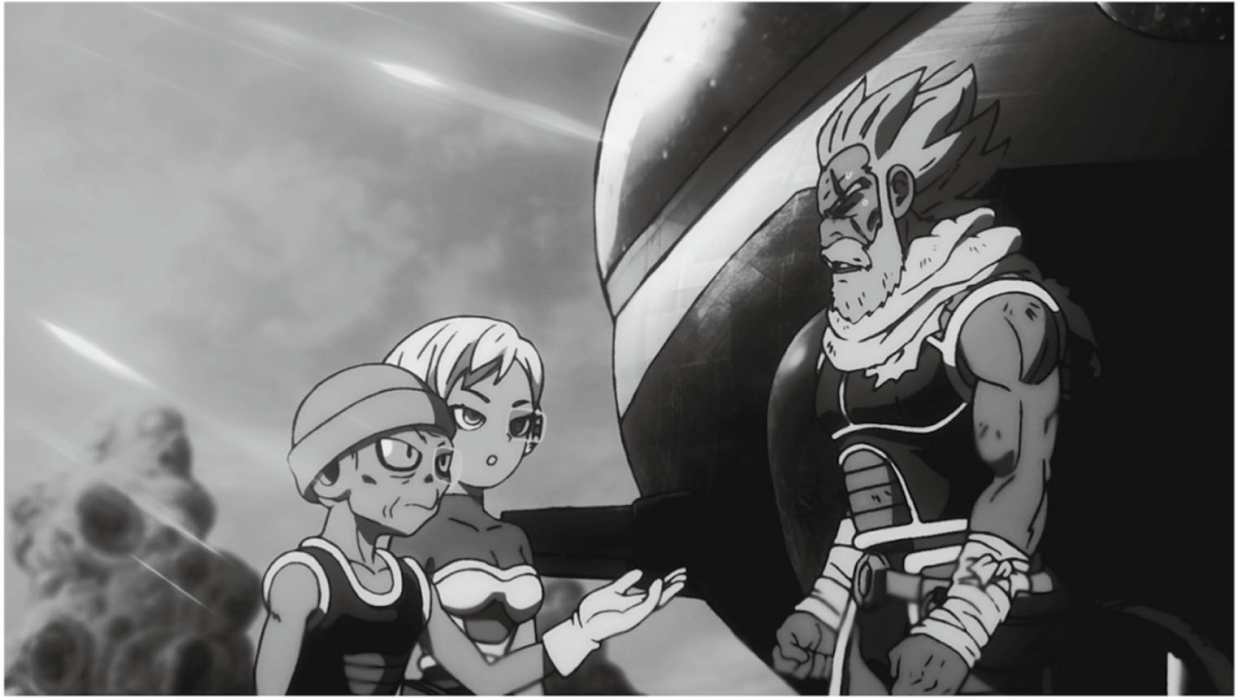
「ああ。俺はパラガス。フリーザ軍のサイヤ人だ！」

むくりと顔を起こした男が、立ちあがりながらうなずく。

「救難信号は……」

「俺だ。宇宙船が故障したんだ」

やはりあの小型宇宙船で男——パラガスはこの星で遭難したようだ。



「信じられないほど永く待ったぞ。やっと助かった……！」

かみしめるように言うパラガスを、チャイはそっと片目につけたスカウターのスイッチを入れて計測してみる。そのとたん、スコープに映るカウンターが、ぐんぐん上昇した。

「……戦闘力4200……！ いいぞ……」

はじきだされた高数値に、チャイは小さく喜んだ。これならフリーザも喜ぶはずだ。レモの言うとおり、特別ボーナスも夢じゃない。

「あんたひとりか？」

「いや、もうひとり……」

銃をおろしたチャイの質問に、パラガスが答えると同時に、地面をゆらすような音がした。三人が顔をむけると、宇宙船のむこうから、なにやら大量の怪物がこちらにむかってくるではないか。巨大なダニのような怪物だ！

「う、うわあ———つ!!」

思わず後ずさったレモとチャイを追うように、大きくジャンプした大ダニが宇宙船の上に飛び乗り、笑うようにガパリと口をあけた。舌の先に針のような管が見える。

「ブロリー！」

うろたえる二人の横で、パラガスが大きな声でそう叫ぶ。

怪物はレモとチャイにねらいをさだめ、舌を発射！

やられたっ！ ——と、思ったまさにそのとき。

三人の前に、とつぜん人影があらわれた。

「！」

そしていままさに針管を発射しようとしていた大ダニを、ものすごいスピードで蹴り飛ばす！

次の瞬間には、激しい風が巻き起こり、遠くに土ぼこりが立っていた。

大ダニがそこまで吹っ飛ばされたのだ。

理解したときには、チャイのつけたスカウターが、浅黒い肌の男の姿をとらえていた。はだかの上半身から、きたえあげられているのがよくわかる。

（ウソだろ……）

内心で思わずつぶやいてしまうほど、スカウターの計測する数値は、勝手にぐんぐんとあがり続けている。

「俺の息子、ブロリーだ」

パラガスが男をそう紹介した。

ゆっくりとこちらを振りむいたブロリーは、そこでようやく二人に気づいたようだ。げげんそうな目つきを、遠慮なく二人にむけてくる。

ぼさぼさに伸びた黒髪に、精悍な顔つき。

首に金属のチョーカー風のものをつけ、黒いタイトスーツをはいた腰には、緑色の毛皮のようなものを巻いている。

どこか野性的な雰囲気<sup>や せい てき ふん い き</sup>のわりに、二人<sup>ふた り み</sup>を見る表情<sup>ひょうじょう</sup>はおとなしく、さきほど大ダニ<sup>おお ふ と</sup>を吹っ飛ばした男<sup>おとこ</sup>とは思えないほど、おだやかでもある。





ピピピピ——！

「そ、そんな……！」

スカウターごしにブロリーを見ていたチライは、10万で止まったカウントに思わず声をあげてしまった。計測不能をあらわす赤い点滅が目に入るさい。

「なんだ？」

振りむいたレモに、チライはスカウターをつけながら、引きつったような笑顔を見せる。

「せ、戦闘力が計測できねえ……」

「バカな、そんなことはありえな——」

半信半疑で自分のスカウターをつけたレモも、途中で言葉を失った。

まったく同じ結果が出たのだ。

「うわあ!!」

こんな辺鄙な惑星で、目標を達成できてしまった。しかもいっぺんに二人も、だ。

「乗ってくれ！ フリーザ様がお喜びになるぞ！」

とびはねるように喜びながら、レモは興奮気味に、二人を自分たちの乗ってきた宇宙船に案内した。



パラガスとブロリーを乗せた宇宙船が、惑星を離陸してしばらく。

フリーザのいる母船にも、有力な戦闘員確保の知らせはすませた。あとはむかうだけの宇宙船内では、とくにすることもない。

操縦をレモにまかせているチライは、携帯食料として持ってきていたスナックバーを食べていた。宇宙ならどこにでも売っている個別包装のポピュラーなおやつだ。

「仕事終わったごほうびに、小腹を満たそうと思ったのだ。」

だけど、ひと口、ふた口、とかじりつくたびに、となりからの視線をやたらと感じる。

「……」

「え、と……なんて言ったっけ、あんた」

穴があきそうなほど見つめられて、チライはうんざりした目となりむけた。

「……ブロリー」

一応の返答はくれたが、ブロリーの視線はチライではなく、ずっとスナックバーにむけられている。

二人を見つけた惑星には、ほかに会話のできる生命体はいないようだったので、そのせいかブロリーはあまりおしゃべりでは

ないようだ。

「これ食<sup>く</sup>うかい？ ブロリー。うまいぜ、ほら」

不思議<sup>ふ し ぎ</sup>そうにスナックバーを見<sup>み</sup>続<sup>つづ</sup>けるブロリーに、チライは自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>のひざにのせていた新<sup>あたら</sup>しい包<sup>つつ</sup>みをさしだしてやった。

ブロリーが席<sup>せき</sup>から首<sup>くび</sup>を伸<sup>の</sup>ばす。そのままチライの持<sup>も</sup>つスナックバーにかじりつこうと、大<sup>おお</sup>きく口<sup>くち</sup>をあける。

「おわっ！ 包<sup>つつ</sup>みを破<sup>やぶ</sup>くんだよ！」

「……？」

あわてて手<sup>て</sup>を引<sup>ひ</sup>っこめて、チライはかわりに破<sup>やぶ</sup>いてやった。

それからもう一<sup>いち</sup>度<sup>ど</sup>さしだすと、ブロリーは眉<sup>まゆ</sup>をよせながらゆっくりとスナックバーのほうへと顔<sup>かお</sup>を近<sup>ちか</sup>づけ、フンフン、と鼻<sup>はな</sup>を鳴<sup>な</sup>らしてニオイをかいだ。

まるで、未<sup>み</sup>知<sup>ち</sup>のものを前<sup>まえ</sup>にした野<sup>や</sup>生<sup>せい</sup>動<sup>どう</sup>物<sup>ぶつ</sup>のようだ。

「いただけ、ブロリー」

「……」

横<sup>よこ</sup>の座<sup>ざ</sup>席<sup>せき</sup>からパ<sup>こえ</sup>ラガ<sup>かい</sup>スが声<sup>わ</sup>をかけてきた。会<sup>めい</sup>話<sup>れい</sup>というより命<sup>き</sup>令<sup>しゅ</sup>に聞<sup>めい</sup>こえる。だがブロリーは主<sup>しゅ</sup>人<sup>じん</sup>から命<sup>めい</sup>じ<sup>いぬ</sup>られた犬<sup>いぬ</sup>のように、素<sup>す</sup>直<sup>なお</sup>にスナックバーにかじりついた。

「！」

そうして飲<sup>の</sup>みこ<sup>め</sup>んだブロリーの目<sup>め</sup>が、驚<sup>おどろ</sup>きに大<sup>おお</sup>きく見<sup>み</sup>開<sup>ひら</sup>かれていく。

チライの手<sup>て</sup>からう<sup>と</sup>ばうようにスナックバーを取<sup>りよう</sup>て、両<sup>いっ</sup>手<sup>き</sup>でつかみ、ガツガツと一<sup>た</sup>氣<sup>こん</sup>に食<sup>ど</sup>べはじめた。今<sup>こん</sup>度は<sup>ど</sup>なんだか、おいしいものを前<sup>まえ</sup>にした子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>のようだ。



「ははっ。どうだ、うまいだろ？」

「……」

す なお こう どう おも え がお で  
素直なブロリーの行動に思わず笑顔が出てしまう。

けれどこちらにはちなりとも視線をむけないまま、ブロリーは無心にスナックバーを食べ続けている。

チライはひょいと肩をすくめた。

「なんだ。礼もなしかよ」

「お礼を言うんだ、ブロリー」

またパラガスが声をかける。

そうすると、ブロリーはすぐに食べるのをやめた。

うかがうようにチライを見て、大きな体に似あわない、小さな声でぼそぼそと言う。

「……ありがとう、ございます……」

「へっ。かたいな。サンキューでいいよ」

スナックバーくらい、そんなものだ。

かる い ひだり て おや ゆび ひと さ ゆび つく み  
軽く言いながら、チライは左手の親指と人差し指をつけて、オーケーサインを作ってみせる。

きょんとした顔でその動きを見ていたブロリーが、おぼつかない動きで、同じサインをまねしてみせた。

「……サ、サン、キュー」





「おう！」

あんな惑星にずっと住んでいたせいで、会話はうまくないけれど、ブローリーは純粋で素直なヤツだ。ニカッと笑顔で返しながら、チライはそう思った。



それからいくらか時間がすぎて。

レモたちは、銀河の真ただ中に停泊しているフリーザの宇宙艦隊の姿を見つけた。

たどり着いたレモたちの宇宙船は、するりと飲みこまれるようにフリーザの待つ大きな宇宙船の中に入っていく。

ハッチを開き、宇宙船のドックへ降りた四人は、フリーザの側近であるベリブルに出迎えられた。

側近がもどった非戦闘員を直々に迎えにくるのは異例だ。

ついてくるように言ったベリブルが、大きなドアの前で立ち止まる。

ノックもなく、シュン、と空気音をひびかせてドアが開いた。

「お連れしましたよ、フリーザ様」

中はひろく、円形になっていた。

その中央には、しつらえられた玉座のようなイスがある。

窓から宇宙を見つめていたらしいフリーザは、ベリブルの声に振りむき、ブローリーへと目をとめる。

「ほおおお……」

フリーザの口から感嘆の声がもれた。

値踏みするようにブローリーを見つめるひとみは、うれしげに見開かれている。

（へええ。これがフリーザ様かあ……！）

レモもチライも、こんなに近くでフリーザを見るのは初めてだ。

緊張して直立している二人とは裏腹に、ブローリーはフリーザではなく部屋の中をキョロキョロ見まわしていた。見慣れない光景に遠慮がない。

「……あなた、本当にサイヤ人ですか？ シッポがないようですが」

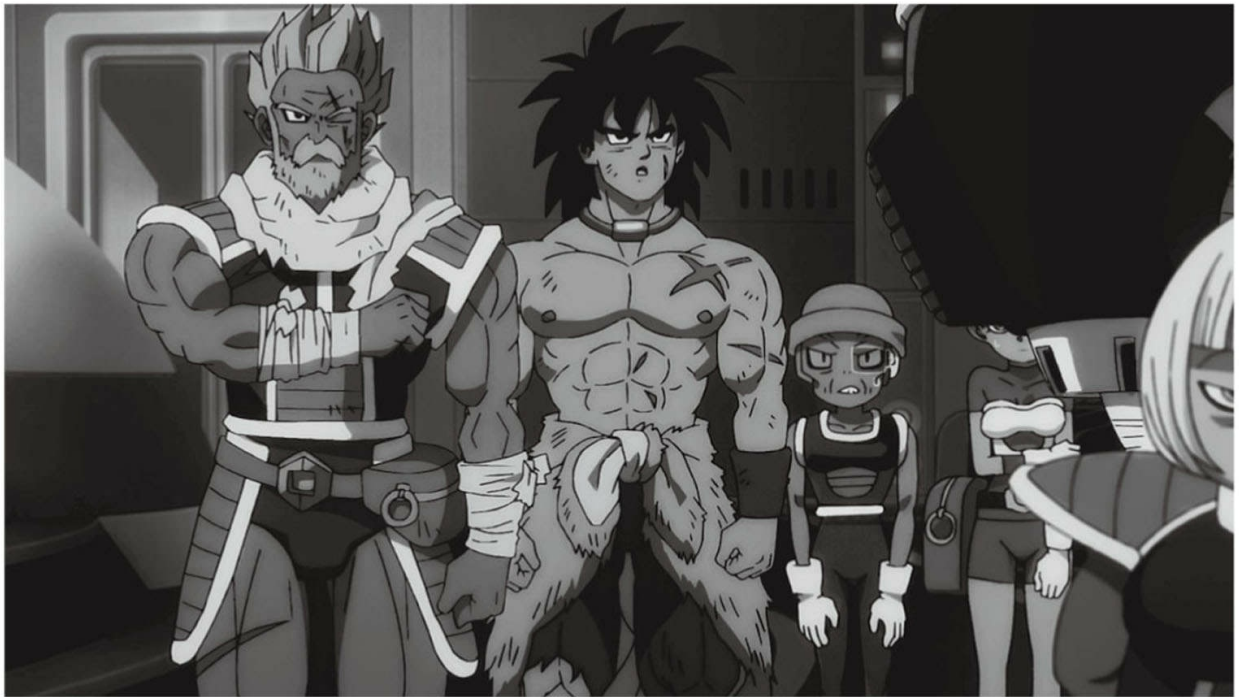
「はい」

ブローリーにかわり答えたのは、パラガスだ。

右手を胸にあて、フリーザにかしづくように頭をさげる。

「サイヤ人の特徴である大猿に変身する影響で、我を失ったことがありまして……それで私がシッポを……」

二人の会話に興味を示さず、ブローリーは浮かんでいるフリーザのポッドを見ている。



そんな様子を見ながら、フリーザはパラガスに聞いた。

「以後はなくなりましたか？ 我を失うことは」

「……はい……めったには」

どこか歯切れの悪いパラガスに、フリーザがするどく目を細める。

「ということは、たまにあるのですね？」

「ご、ご安心ください。その場合は——」

あわてて腰のポシェットを探ったパラガスは、小さな装置を取り出した。

なんだ？ とのぞきこもうとしたチライの横で、ブロリーがビクツとして、後ずさる。

「このリモコンで、首につけている装置に電流が流れます。強い電流ではありませんが、抑制はできます」

ブロリーの首輪の理由を知って、レモとチライは思わず顔を見あわせてしまった。

安全性を説いているつもりなのだろうが、やっていることはかなりおかしい。息子に電流を流してしつけをするなんて、ふつつではない。

リモコンにおびえ、首輪に手をかけはらずそうともがくブロリーを見れば、異常さはあきらかだ。

フリーザは「なるほど」と納得したようだ。

レモたちのところへとさがっていたブロリーに視線をうつす。

「あなた、お名前は？」

「……」

けれどブロリーは答えない。

首輪に手をかけたまま、フリーザの声など聞こえないようにまたまわりを見まわしはじめる。

あわてたように前に出てかわりに答えたのは、やはりパラガスだ。

「ブロリーでございます」

「まだとてつもない戦闘力を秘めていますね……」

「はっ。かならずやフリーザ様のお役に立てると確信しております」

フリーザは自由に船内を見まわすブロリーを、穴があくほどじっと見つめ、それからくると背をむけた。

答えたパラガスには興味がないとでもいうかのようだ。

「ほほほ。これは思いがけない収穫ですね。ベリブルさん、見つけたお二人に報奨金をさしあげてください」

楽しげな笑い声をあげたフリーザにうなずいて、ベリブルは用意していた銀の棒を二人にさした。宇宙共通通貨だ。うまくいけば特別ボーナスが——などとは思っていたが、これは破格の金額だ。

「こ、こんなに……！」

受け取ったレモの横で、チライも目をキラキラさせて銀の棒を見つめる。

これだけあれば、しばらく豪遊できそうだ。

いっしょにのぞきこもうとしたブロリーに見せてやろうと顔をあげた二人は、ふとフリーザの視線に気がついた。だまっではいるが、まだブロリーたちに話があるらしい。

「「ありがとうございました!!」」

くち あたま ば たいしゅつ  
口をそろえ、頭をさげて、レモとチライはさっさとその場から退出した。



そのドアが閉まるのと同時に、フリーザが窓の外にひろがる宇宙を見つめながら話しかけた。

なが ほし だっしゅつ  
「永いあいだ、なにもないような星から脱出できずにいたそうですね」

「はい……」

こた  
やはり答えるのはパラガスだけだ。

かえ わく せい ぞん  
「帰るべき惑星ベジータは、すでにもうないことはご存じですか？」

じ ぶん ほろ わく せい な まえ くち ぐち もと ざん こく え う  
かつて自分が滅ぼした惑星の名前を口にしながら、フリーザの口元はニヤニヤと残酷な笑みを浮かべている。

み き しず  
けれど、見えないパラガスはそれに気づかず、「はい」と静かにうなずいた。

と ちゅう き  
「ここにくる途中に聞きました。しかし、そんなことはどうでもいいんです。ただ……」

おく ぼ かた い  
ギリッと奥歯をかみしめながら語るパラガスに、フリーザはおもしろそうに言った。

ふく しゅう  
「復讐、ですね？」

「……っ」

よう す にく め こぶし かく しん み え う  
ちらりと様子をうかがったフリーザは、憎しみのこもった目で拳をにぎるパラガスに、にやりと確信に満ちた笑みを浮かべた。

なるほど。

み た つよ ひ  
フリーザの見立てでも、ブロリーはかなりの強さを秘めている。

じん せん どう りよく かいきゅう  
サイヤ人は戦闘力で階級をきめていたはずだ。

おう ゆうりよく せん どう いん と ご り ゆう かれ も つよ しつ と きょう  
あのベジータ王が、有力な戦闘員になるはずのブロリーを飛ばし子にした理由は、彼の持つ強さへの嫉妬か、はたまた恐怖心か――。

あか ぼう ころ ふ し ぎ むかし でん せつ スーパー じん しゅつげん きら わく せい  
どちらにせよ、赤ん坊のうちに殺さなかったのが不思議なほどだ。その昔、伝説だった超サイヤ人の出現を嫌い、惑星ごと消したフリーザなら、まちがいなく殺していただろう。

けれどそうはならなかったおかげで、これからおもしろいことができそうだ。

「……パラガスさん。ベジータ王の息子、ベジータ四世はまだ生きていることをご存じですか？」

「なっ、なんですと！ ベジータ王子が……!? お、おのれ……ベジータめ……！」

おう むす こ てん いか こぶし  
かつての王の息子へと転じはじめた怒りで、パラガスは拳をわなわなとふるわせている。

たお にく おう そうしつ ふく しゅうしん ぞん ぶん り よう  
倒すべき憎い王の喪失でくすぶっていた復讐心を、存分に利用させていただこう。

ふく しゅう ちから か  
「あなたの復讐に力を貸してさしあげましょう」

フリーザは<sup>じゃ あく え</sup>邪悪な笑みで<sup>ぐち もと</sup>口元をゆがめながら、<sup>よこ</sup>横のベリブルに<sup>こえ</sup>声をかけた。

「ベリブルさん。お二人に<sup>ふた り</sup>シャワーを<sup>あ</sup>浴びていただいたら、<sup>せん どう ふく よう い</sup>戦闘服を用意してあげてください」

「はい」

<sup>なが ねん</sup>長年つかえているベリブルには、フリーザの<sup>かんが</sup>考えがきつとわかったはずだ。

なにも聞かずに二人を<sup>き ふた り つ</sup>連れだっていったベリブルの<sup>すがた</sup>姿がドアの外に<sup>そと き</sup>消えてから、フリーザは<sup>たの</sup>楽しそうに<sup>め</sup>目をつむった。

「<sup>こん かい</sup>今回は、<sup>たたか</sup>闘うつもりはなかったんですがねえ……」

それから、<sup>め</sup>ふたたび目をあける。

「これはおもしろくなってきましたよ」

かがやく<sup>う ちゅう</sup>宇宙の<sup>ほし ほし</sup>星々を<sup>み</sup>見つめるそのひとみは、<sup>たの</sup>楽しくてしかたがないとでもいうかのように、あやしげな<sup>ひかり</sup>光をはなっていた。





其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

三<sup>さん</sup>

王<sup>おう</sup>と大<sup>たい</sup>佐<sup>さ</sup>



それはいまから四十一<sup>よんじゅういち</sup>年も前<sup>まえ</sup>のことである。

まだ惑星<sup>わくせい</sup>ベジータがこの宇宙<sup>うちゅう</sup>に存在<sup>そんざい</sup>し、ベジータ王<sup>おう</sup>をはじめとする多くのサイヤ人<sup>おお</sup>たちが生存<sup>じん</sup>していたころの話<sup>せいぞん</sup>だ。

ベジータの父<sup>ちち</sup>、ベジータ王<sup>おう</sup>三世<sup>せい</sup>はある決断<sup>けつだん</sup>をくだした。

大佐<sup>たいさ</sup>であるパラガスの息子<sup>むすこ</sup>、ブロリー<sup>へんきょう</sup>を、辺境<sup>わくせい</sup>の惑星<sup>と</sup>へとポッドで飛ばし子<sup>こ</sup>にすることを。

その日<sup>ひ</sup>、惑星<sup>わくせい</sup>ベジータを実質<sup>じつしつ</sup>支配<sup>し</sup>していたコルド大王<sup>はい</sup>が、なんの連絡<sup>だいろ</sup>もなしに来訪<sup>れんらく</sup>した。そしてあっさり<sup>らいほう</sup>と引退<sup>いんたい</sup>を宣言<sup>せんげん</sup>し、息子<sup>むすこ</sup>のフリーザ<sup>おうい</sup>へ王位<sup>ひ</sup>を引き継ぐ<sup>つし</sup>と知らせてきた。

サイヤ人<sup>じん</sup>のプライド<sup>どくりつ</sup>にかけ独立<sup>かのう</sup>の可能性<sup>せい</sup>を模索<sup>もさく</sup>する中<sup>なか</sup>、邪悪<sup>じゃあく</sup>のかたまりのようなフリーザ<sup>おう</sup>に、ベジータ王<sup>け</sup>は気おされて、頭<sup>あたま</sup>をあげる<sup>あ</sup>ことすらできなかった。

まるで小さなバケモノ<sup>ちい</sup>だった。

「わたしの就任<sup>しゅうにん</sup>を記念<sup>きねん</sup>して、新しい戦闘<sup>あたら</sup>アイテム<sup>せんとう</sup>を持ってきてあげましたよ」

コルド大王<sup>だいろ</sup>をそのままコンパクトにしたような体<sup>からだ</sup>のくせに、バカ<sup>さく</sup>てい<sup>く</sup>いな口調<sup>くちょう</sup>が鼻<sup>はな</sup>につく。

「新開発<sup>しんかい</sup>のスカウター<sup>はつ</sup>というもので、これまで使<sup>つか</sup>っていたスカウトスコープ<sup>そう</sup>をコンパクトに装着<sup>ちやく</sup>できるようにしたもので、通話<sup>つうわ</sup>も同時<sup>どう</sup>に可能<sup>じ</sup>です。相手<sup>かのう</sup>の位置<sup>あいて</sup>と戦闘<sup>い</sup>力<sup>ちから</sup>——」

新開発<sup>しんかい</sup>のスカウター<sup>はつ</sup>をケースから取りだし、装着<sup>と</sup>したフリーザ<sup>そう</sup>は、その性能<sup>ちやく</sup>を説明<sup>せい</sup>するためにスイッチ<sup>せつめい</sup>を入れた<sup>い</sup>。

「おや……？ 何人<sup>なんにん</sup>かのサイヤ人<sup>じん</sup>が、我々<sup>われわれ</sup>を武器<sup>ぶ</sup>でねらっているようですが……あそこにかくれているサイヤ人<sup>じん</sup>の戦闘<sup>せんとう</sup>力<sup>りき</sup>は……2000……」

もしもの場合<sup>ばあい</sup>にそなえて配備<sup>はいび</sup>していた部下<sup>ぶ</sup>たちを見つけると、

「なかなか優秀<sup>ゆうしゅう</sup>です、ね？」

そう言う<sup>い</sup>と同時に指先<sup>どうじ</sup>からはなつたデスビーム<sup>ゆびさき</sup>で、あっというまに全員<sup>ぜんいん</sup>を殺<sup>ころ</sup>してしまったのだ。



き げん うご か ほこ かお あたま  
ご機嫌にシッポを動かすフリーザの勝ち誇ったような顔が頭にこびりついてはなれない。

ぐん さ かお いく じ しつ おう いく じ いち ばん おく かい だん  
フリーザ軍が去ったあと、けわしい顔で育児室にむかったベジータ王は、たくさんの育児カプセルの一番奥にある階段をのぼり、特別カプセルの中で眠る我が子の姿に、ようやく胸に野心を取りもどした。

「ほう……もうこんなに大きくなったのか」

ねむ むす こ せん どう りよく じん し じょう み たか  
すやすやと眠る息子、ベジータの戦闘力は、サイヤ人史上まれに見る高さなのだ。

じ まん むす こ せん ざい のう りよく てん さい てき う ちゅう おう ば もの  
「自慢の息子よ！ おまえの潜在能力は天才的だ。宇宙の王になるのは、あんなフリーザなどという化け物ではなく、おまえだ！ 成長を楽しみにしているぞ」

なか つよ かた わら  
カプセルの中に強く語りかけ、ニヤリと笑う。

いく じ しつ たいしゆつ おう かい か せつ ち とく べつ き  
そうして育児室を退出しようとしたベジータ王は、ふと、階下に設置された特別カプセルに気がついた。

「!? こいつはだれだ！ なぜ特別カプセルに入っている!!」

じん いく じ しつ せん ざい のう りよく みと ゆうしゅう あか ぼう はい ゆる とく べつ なか じ まん  
サイヤ人の育児室は、潜在能力を認められた優秀な赤ん坊だけが入ることを許された特別なものだ。その中でも、自慢の息子ベジータのようにさらに優秀な赤ん坊だけが入ることを許されたカプセルに、なぜ、知らない赤ん坊が入っているのか。



「はっ、はい！ この子はブローリー。パラガス大佐のお子様です」

「パラガスの？」

育児スタッフが、ベジータ王の怒声におびえながら説明する。

「はいっ、そ、その……ブローリーの潜在能力が特別でして……それで……」

「天才的な我が子の数値に匹敵すると言うのか！」

「は、はいっ……！」

言いにくそうに目を泳がせたスタッフのかわりに、別のスタッフがスキャナーの数値を見ながら口を開く。

「計測時にもよるのですが、王子様の数値をも超えるレベルでして……」

「そんなことはありえない……王子の数値でさえ過去最高なんだ!! 貸せ！」

声を荒らげ、ベジータ王はスタッフからスキャナーをひったくった。

息子よりも高い数値などありえない。計器の故障だ。

特別カプセルで眠るブローリーにスキャナーをむけると、数値は静かに上昇を始め、——外の動きになにかを感じ取ったのか、ブローリーが急にむずかりだした。

「ふ、ふえ……ふええ～」

すると、その泣き声に呼応するかのよう数値はぐんぐんはねあがり、やがてスキャナーはポウンッ！ と音を立てて、爆発した。

「うおっ」

「も、もうしわけありません！ やはり故障していたようです。早く新しい計器を！」

あわてたスタッフたちが、バタバタと新しい計器を用意しはじめる。

大人たちの動揺をよそに、ブローリーはふたたびスヤスヤと眠りについた。そこへスタッフがスキャナーをむける。と、今度は一般的な戦士としてのデータがはじきだされたではないか。

「再測定の結果、数値が半分以下になりました。過去に異常な数値が出たことがあったのですが、やはり計器の故障でしょう……」

どこかホッとしたように数値を見せられ、ベジータ王の眉間にしわがよった。

けれどすぐに、別のスタッフが誇らしげにカルテから顔をあげる。

「しかしそのような異常なデータを排除しても、ブローリーの潜在能力はそうとうなものです！ このまま訓練をつめば、すばらしい戦士に育ち、わが軍の強力な戦力に……！」

スタッフは、ブローリーの可能性にひとみがかがやかせている。

ベジータ王は、眉間のしわをよりいっそう深くした。

同じサイヤ人として、惑星ベジータを担う者として、高い戦闘力は必要だ。

サイヤ人は少数ながらもそれぞれに強大な力を持ち、ほかの惑星を支配して生きていく種族なのだから。

だがそこに目をつけられ、宇宙一の強さを誇るフリーザの支配下に置かれてもいる。

いつか独立を勝ち取るためにも、強いサイヤ人は重要な存在になるだろう。しかし……



「それこそ、伝説の超サイヤ人にさえ——」

興奮気味に話すスタッフの言葉で、ベジータ王はブロリーの処遇を決定した。

それが、辺境の惑星へ飛ばし子にすることだった。

ブロリーの父パラガス大佐は、その話を聞くやいなや、すぐにベジータ王のもとにやってきた。

「ご無礼をお許してください。わ、我が息子ブロリーをポッドで辺境の星に飛ばすおつもりだとか……」

許可も得ず飛びこんできたパラガスは、左右に多くの将軍を配した謁見の間で、ベジータ王の前にうやうやしくひざをつく。



「そうだ」

「そ、それは下級戦士の役割……」

戦闘能力が低いと判断されたサイヤ人の赤ん坊は、自宅の育児カプセルで育つ。

そして辺境の惑星へとポッドで飛ばされることが多い。

その星で強く成長できたものは、その星を制圧する。それがサイヤ人の宿命でもある。

だが上級戦士は別だ。惑星ベジータで戦闘の英才教育を受けることができる。

ブロリーにはその資格があるはずだ。

言いつのるパラガスに、ベジータ王は小さく息をついた。

「星を制圧できるほどに成長できれば、さらに強力な戦士になれるかもしれندろ。星を支配して高く売る。それが我々、戦闘民族サイヤ人だ」

ベジータ王の言い分は、まったく理にかなっていない。

「……目的地である、小惑星バンパは、人間さえいない過酷なだけの星です……高く売れるとは思われませんが……」

恐怖にふるえながらもグッと顔をあげたパラガスに、ベジータ王は告げた。

「おまえの息子の潜在能力は、異常なまでに高すぎる。突然変異と言ってもいいだろう」

強い戦闘力は必要だ。

けれど、強すぎる潜在能力は、問題がある。

「あれでは、いずれ正常な精神状態はたもてなくなり、我がベジータ軍はおろか、宇宙そのものを危機にさらすことになる。……命を絶たずに、星に飛ばしてやるだけでもありがたく思え」

「そ、そんな……」

手を振り、さがれと指示を出したベジータ王に、パラガスはふらつきながら立ちあがる。

「あ、あなたは……！ 王子より高い潜在能力を持ったブロリーに嫉妬し！ 亡き者にしようと——」

けれど、その先をパラガスは言えなかった。

なぜなら、ベジータ王がすさまじい気をはなち、パラガスをにらみつけたからだ。

「それ以上口を開いてみる。貴様は死ぬことになるぞ」

「……ぐっ！」

「それにもうおそい。ポッドはいま発射した」

それで、この話は終わり——の、はずだった。

しかしパラガスは、謁見の間のステンドグラスからポッドの射出された空を見あげると、一目散に駆けだした。そのままステンドグラスを割って、空へと飛び出す。

さすがにいまからポッドに直接むかっても間にあわない。

猛然と宇宙船発着場へと飛行したパラガスは、制止するスタッフをはねのけて、宇宙船へと乗りこんだ。

『ただちに帰投せよ。繰りかえす、ただちに帰投せよ……』

あっというまに加速した宇宙船の中に、基地からの無線が繰りかえされる。

それを無視して、パラガスは惑星バンパにむけてナビゲートを設定した。

「王の目的は、我が息子プロリーの抹殺だ……」

王子の天才的な能力を、おりにふれて自慢していたベジータ王のこた。その能力を超えてしまったプロリーの存在は、たいそう気に入らなかったにちがいない。

「俺はプロリーを最強の戦士に育て、いずれベジータ王に復讐してやる……！」

憎しみのほのおをたぎらせて、パラガスはそう誓った。

この思いを成就させるためにも、プロリーはかならず救ってやらなければ。



それから眠れない数日をすごし、ようやく見えてきた惑星バンパは、薄暗い夜の闇に包まれているかのようにだった。嵐のように吹き荒れる風に巻きこまれ、ほとんど墜落するように着陸したのは、ゴツゴツとした岩山のふもとだ。

「生きていろよ、プロリー。すぐに助けてやる……！」

念のためマスクを装着して、パラガスは宇宙船の外に出る。

計算では、プロリーを乗せたポッドのほうが、二日ほど前にバンパに到着しているはずだ。

荒れて、黄色くむきだしの土地に、乾いた風。

空を見あげればすぐ近くに衛星が見えた。あまり見ていると月と錯覚しそうな気がする。

手持ちタイプのスカウトスコープを生命反応探知モードに切り替えて歩いていると、どこからともなく足音のようなノイズをスコープが拾った。

「……なんだ？」

立ち止まり、スコープが示す点滅に目をこらす。

生命反応を知らせる大量の光が、間近に密集してせまっているようだ。

望遠モードに切り替えれば、パラガスの目に大ダニの群れが見えた。

「な、なんだあれは!？」

地鳴りのような足音をひびかせ、いっせいにむかってくる。

パラガスはとっさに光線銃をかまえた。

目前にせまる大ダニが、ガパリと口をあける。中から飛びだしてきた針管を横によけ、光線銃をはなつ！ が、頑丈なカラにおおわれた体には傷ひとつついていないようだった。手持ちの武器はこれだけだ。それに、闘うには数も多すぎる。

パラガスは地面の亀裂に身をひそめ、大ダニの群れが行きすぎるのを待つしかなかった。

それからおそらく数時間だ。

ひ　で　むか  
日の出を迎えるころになって、ようやく大ダニの群れは姿を消した。

き　れ　つ　な　か　ふ　じ　やう　そ　ら　ち　じ　やう　み  
亀裂の中から浮上して、パラガスは空から地上を見おろしてみる。

そ　ら　と　い　も　の  
空を飛ぶような生き物はどうやらないらしい。

よ　る　ふ　あ　あ　ら　し　よ　る　あ　ら　し  
夜のうちにあれほど吹き荒れていた嵐はおさまっている。夜と嵐はセットのようだ。

ひ　で　あ　つ  
かわりに日の出たいまは、やたらと暑い。

か　こ　く　と　ち　た　か　ね　う　や　う　そ  
こんな過酷な土地のどこに高値で売れる要素があるというのか。

お　う　お　も　だ　い　か　む　ね　さ　が  
ベジータ王を思い出し、ふつつつとわいてくる怒りを胸に、パラガスはプロリーを探した。

と　ち　やう　み　お  
途中、クレーターのようなくぼみをいくつも見かけ、降りてみることにする。

そ　こ　ま　る　き　と　そ　う　げ　ん　じ　め　ん  
底は丸く切り取られた草原のようで、地面はやけにやわらかく、あたたかい。

「な、なんだ……？」

じ　め　ん　く　さ  
地面にそつとふれてみるが、草ではないようだ。

お　お　む  
と、くぼみのふちに大ダニの群れがあらわれた。

「!？」

お　そ　み　が　ま  
ふたたび襲いにきたのかと身構える。

お　お　や　わ　じ　め　ん　し　ん　か　ん  
だが、大ダニたちはパラガスではなくその柔らかない地面へと針管をさしこみはじめた。

の  
「なにかを飲んでいる……？」

じ　め　ん　じ　め　ん　お　お  
この地面になにかあるのか、としゃがみかけたとき、とつぜん地面が大きくゆれた。

「うおおっ！」

と　じ　ぶ　ん　た　ば　し　よ　も　や　う　す　め　み　ひ　ら　み　ど　り　じ　め　ん  
なんとか飛びたったパラガスは、自分の立っていた場所が盛りあがる様子に目を見開いた。緑の地面からなにかがぐんぐん  
の  
伸びあがっていき、巨大な獣の顔になる。



その獣は、後<sup>け</sup>ずさる大ダニをふちの地面<sup>じめん</sup>ごと、バクリバクリといきおいよくかじりついて飲<sup>の</sup>みこんでいく。よく見れば、あちこちらのクレーターで、同じことが起<sup>お</sup>こっていた。

「そうか……怪物<sup>かいぶつ</sup>たちは獣<sup>けもの</sup>の血<sup>ち</sup>を吸<sup>す</sup>って生<sup>い</sup>きている。獣<sup>けもの</sup>はその怪物<sup>かいぶつ</sup>を食<sup>く</sup>って生<sup>い</sup>きている……」

おそろくそれが、この惑星<sup>わくせい</sup>の生命<sup>せいめい</sup>のすべてだ。

こんな気味の悪いところから、一刻<sup>いっこく</sup>も早<sup>はや</sup>く息子<sup>むすこ</sup>を助<sup>たす</sup>けだしてやらなければ。

ブローリーを<sup>さが</sup>探<sup>ひ</sup>して飛<sup>こう</sup>行<sup>こう</sup>して、どれくらいたつたころだろう。

やっと見<sup>み</sup>つけたポッドは、すでにもぬけの<sup>み</sup>カラだった。

まさかおそかったか、と一抹<sup>いちまつ</sup>の不安<sup>ふあん</sup>がよぎりながらも、パラガスはスカウトスコープであたりの気配<sup>けはい</sup>をくまなく探<sup>さが</sup>す。すると、近<sup>ちか</sup>くの洞窟<sup>どうくつ</sup>にわずかだが、生命<sup>せいめい</sup>反<sup>はん</sup>応<sup>おう</sup>があつた。

「あつちだ！」

洞窟<sup>どうくつ</sup>の中<sup>なか</sup>は、どうやら大ダニの巢<sup>おほす</sup>のようだった。

急<sup>きゅう</sup>に襲<sup>おそ</sup>いかかれることを懸念<sup>けんねん</sup>して、慎重<sup>しんちよう</sup>な速度<sup>そくど</sup>で空<sup>そら</sup>を飛<sup>と</sup>ぶ。

周囲<sup>しゅうい</sup>を見<sup>み</sup>まわしながら進<sup>すす</sup>んだパラガスは、大ダニの気配<sup>おおけはい</sup>がないことに気<sup>き</sup>がついた。

卵<sup>たまご</sup>のようなものがたくさんある。だが親<sup>おや</sup>はいないようだ。

「いや……」

足<sup>あし</sup>の残骸<sup>ざんがい</sup>を見<sup>み</sup>つけ、パラガスは地面<sup>じめん</sup>に降<sup>お</sup>りた。すぐそばには本体<sup>ほんたい</sup>の死<sup>し</sup>体<sup>たい</sup>もある。

と、大ダニの切<sup>おおき</sup>りはなされた足<sup>あし</sup>がうごめきだした。

「……！」

まさかと注<sup>ちゅう</sup>目<sup>もく</sup>するパラガスの目<sup>め</sup>に、足<sup>あし</sup>の内側<sup>うちがわ</sup>から小<sup>ちい</sup>さな手<sup>て</sup>が伸<sup>の</sup>びたのが見<sup>み</sup>えた。

空洞<sup>くどう</sup>になった足<sup>あし</sup>の先<sup>さき</sup>から出<sup>で</sup>てきたのは、大ダニの体液<sup>たいえき</sup>で汚<sup>よご</sup>れた口元<sup>くちもと</sup>を不器用<sup>ぶきよう</sup>にぬぐう息子<sup>むすこ</sup>、ブローリーの姿<sup>すがた</sup>だった。





「ブローリー!!」

かい ぶつ おそ あし た すう じつ い め  
怪物を襲い、足を食べ、この数日を生き抜いていたいらしい。

「さすがだぞ！」

よろこ と つか あば じん こども き しょう あら けん ざい じゃくてん  
喜び飛びだしたパラガスに捕まえられ、ブローリーが暴れる。サイヤ人の子供らしい気性の荒さは健在だ。弱点のシッポをつかまれたブローリーは、ビクリと体をゆらして失神した。

むす こ かん さつ  
パラガスはそのあいだに息子をよく観察した。

しめ せん とう りよく こども は かく あたい てい ど すう ち おお たお  
スカウトスコープの示す戦闘力は、子供にしては破格の920という値。けれどもこの程度の数値で、あの大ダニは倒せない。

(と、いうことは……)

き ぜん たい てき すこ の き  
着せていたスーツが全体的に少し伸び、ぶかぶかになっていることに気がついた。

まん げつ み おお ざる  
「あの満月を見て、大猿になったんだろう」

てき ころ た い  
そして、敵を殺し、食べ、生きのこっていた。

わ むす こ ほこ たか じん  
それでこそ、我が息子。それでこそ、誇り高きサイヤ人だ。

まん ぞく わら つ う ちゅう せん  
満足げに笑いながら、パラガスはブローリーを連れて宇宙船へともどった。

だっ かん わく せい よう  
ブローリーを奪還できたらこんな惑星に用はない。

てき とう ほし だっ しゅつ  
適当な星に脱出する——

「なんだと……！」

かん じん どう りよく こわ  
けれども、肝心の動力であるフローターが壊れてビクともしなくなっていた。

あらし ま ちゃく りく さい わる  
嵐に巻きこまれた着陸の際、あたりどころが悪かったのか。

だっ しゅつ  
なんということだ。ここまできて、脱出できなくなるだなんて。

おれ  
「あきらめん……俺はあきらめんぞ……！」

おく ば にく にく こころ ちか  
ギリギリと奥歯をかみしめて、パラガスは憎々しげに心にかたく誓ったのだった。



其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

四<sup>よん</sup>

バーダックの予感<sup>よかん</sup>



パラガスがブロリーとともに惑星バンパに取りのこされてから五年後。

同じ宇宙の遠い場所にある惑星ベジータでは、歴史的な事件が起ころうとしていた。

「……バーダックさん、バーダックさん……」

「なんだ？」

母星からの帰還命令を受け、征服した小惑星から惑星ベジータへとむかう宇宙船の中。

サイヤ人戦闘員であるバーダックは、となりから呼びかける仲間の声で目が覚めた。

今回の遠征に同行していたリークだ。彼は操縦桿をにぎりながら、なつかしうに言う。

「そろそろ惑星ベジータですよ。ひさしぶりですね」

「……ああ……」

船内の大きな窓に映る惑星ベジータは、旅立った日からなにも変わっていないように見える。

「どうのことですかね、サイヤ人はいそいで惑星ベジータに集まれだなんて。フリーザの野郎の命令らしいけど」

「スカウターを取れ。聞かれるぞ」

「あっ、そうか」

バーダックの指摘にあわててスカウターをはずす。

これを支給したフリーザの真の目的は、こちらの会話をいつでも盗聴できるようにする、ということなのでは、とバーダックは思っていた。

「見てくださいよ。みんなも続々帰ってきてます」

スカウターをしまったリークが、窓の外に浮かぶ仲間の宇宙船を見て、うれしそうな声を出す。

同じように外をながめていたバーダックは、ふと、フリーザの巨大な船が、惑星ベジータを値踏みするように宇宙空間に停泊していることに気がついた。

「あそこを見ろ。フリーザの船だ」

「まだ時間があるのに、もう待機しているのか」

フリーザの宇宙船の下を歩きながら、バーダックは真上の船の中にいるだろうフリーザの姿を思い浮かべる。

「……おかしいと思わんか。話があるなら、わざわざ星に帰さなくても無線ですむ。新兵器をわたしたいなら、いそいで集める意味もない……」

この帰還命令がくだったときから、バーダックはみような違和感を覚えていたのだ。

「こいつはやっぱり、なにか裏がありそうだ……」

「えっ！ なんですか、裏って……」

考えこむバーダックに、リークが不安そうな顔をむけた。



惑星ベジータはもうすぐそこだ。

高度をさげ、大気圏に突入した宇宙船の機体が、赤く熱を帯び、減速を始める。

「もともと星を征服して売るのは、オレたち戦闘民族サイヤ人のなりわい……。それを、フリーザの父親コルドは、強引に力でねじふせ、配下にしやがった……」

「昔のことじゃないですか」

「いまはうまくいってと思うか？」

「そりゃあ、フリーザが好きなサイヤ人なんていないけど……」

リークはわけがわからないとばかりに眉をよせる。

地上が近づき、船の下層からランディングギアが出現した。

宇宙港の誘導にしたがい、帰還した多くの船のあいだをぬって停止してから、バーダックはゆっくりと座席から立ちあがる。

「フリーザも、サイヤ人をそう思っているはずだ」

「え？」

最初は単純にサイヤ人の力がほしかったのだろう。

けれどもいまやフリーザ軍の軍事力拡大には目をみはるものがある。

「フリーザ軍は大きくなった。うっとうしいサイヤ人がいなくても、なんとかなるだろう」

「ま、まさか……」

天井のハッチをあけ、飛んで出るバーダックのうしろを追いかけながら、リークもようやくその可能性に行きついたらしい。おびえたように声をふるわせる。

「俺たちを全滅させるつもりだって言うんですか!？」

バーダックは持っていたバッグをいきおいをつけ振りあげて、肩にかけた。

それは懸念だ。

まだ、なんの確証もない。

「もしかしたら、な」

だから、バーダックはわざとニヤリと笑いながら、振りかえった。

リークは一瞬きょとんとまばたきをし、からかわれたのだと思ったのだろう。

「いっ、いやだなあ、バーダックさん！」

あせったように小走りでバーダックの背中を追ってくる。

「よう、バーダック！ 生きて帰ってきたか」

宇宙港を歩いていると、なつかしい仲間のひとりがバーダックに声をかけてきた。

立ち止まり、リークにしたのと同じ質問を投げてみる。

「おい、この招集命令の理由を知っているか？」

「さあな。よほど大物の星でも見つけたんじゃないか？ 俺たち全員じゃないと征服できないようなさ」

ニヤリと笑った仲間は、やはりなんの疑問も抱いていない。



せん とう みん ぞく      ほん のう      た しや      せい ふく      よろこ      かん  
戦闘民族としての本能で、他者を征服できる喜びを感じているだけのようだ。

けれど、やはりそれだけのことで全員を集める必要があるだろうか.....

「そういえば、フリーザ直属の連中が超サイヤ人について聞きまわってたな」

スーパー      じん      でん せつ  
「超サイヤ人？ 伝説のか？」

かんが      とお           こと      ば      あし      と  
考えながらも通りすぎかけたバーダックは、その言葉に足を止めた。

スーパー      じん           じん      こ      じん           ばなし  
超サイヤ人とはサイヤ人を超えるサイヤ人。いわばおとぎ話のようなものだ。

けれど、バーダックの中で、パズルのピースがカチリとはまった。

「それだ.....！」

つよ      ちから      もと           う ちゅう      し      はい  
フリーザは強い力を求めている。この宇宙を支配するためだ。

どう じ      じ      ぶん      こ      か      のう せい      てっ てい てき      はい じよ  
だが同時に、自分を超える可能性は徹底的に排除しようとするヤツだ。

スーパー      じん      そんな           き           き  
超サイヤ人の存在など、ウワサだけでも気になって気になってしかたないはずだ。

り      ゆう           とお      み      らい           じん      ぜつ めつ  
それを理由に、そう遠くない未来で、フリーザはサイヤ人を絶滅させるつもりなのだ。

かく しん      おも      むね           し      たく      つま      こ      ども  
バーダックは確信めいた思いを胸に、自宅にいる妻と子供のもとへといそいだ。

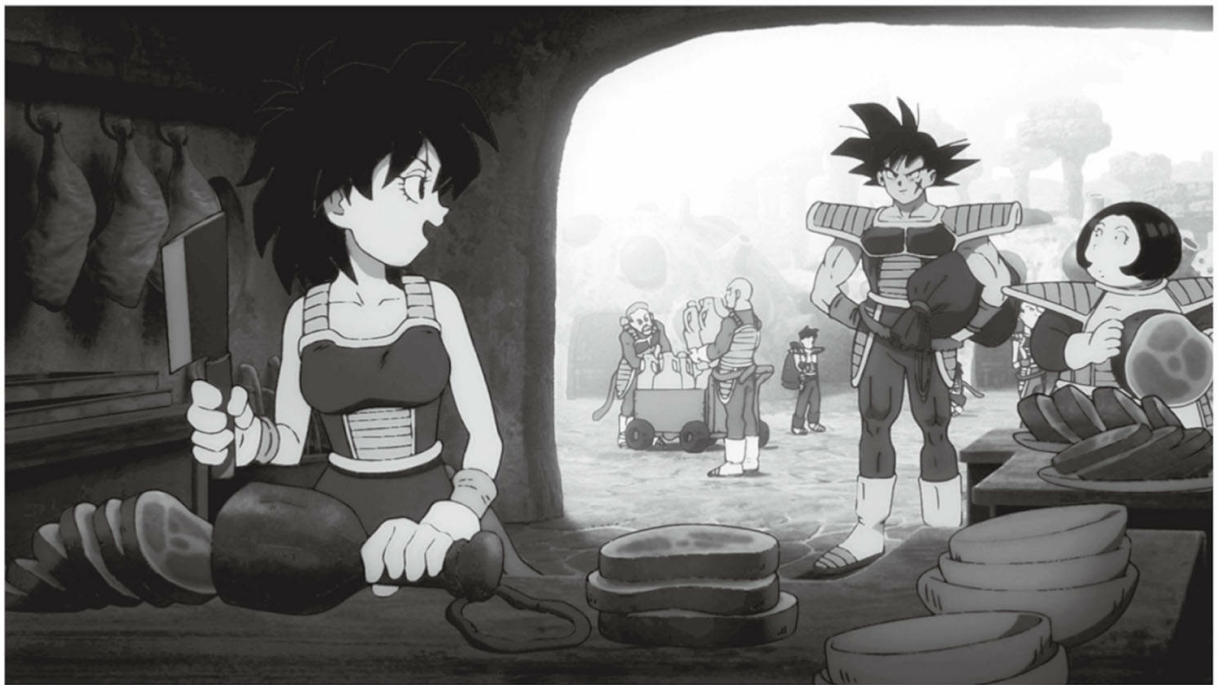
「よう、帰ったぞ、ギネ」

「バーダック！」

い      ぐち      ちよっ けつ      だいどころ           にく      き           こえ  
入り口から直結の台所で、肉を切りわけていたギネに声をかける。

き           ふ                か  
と、気づいたギネが振りかえり、バーダックのほうへと駆けよってきた。

ふう      ふ           さい      かい  
ひさしぶりの夫婦の再会だ。



あい こい じゅうよう し じん こと ま し ぜん きんちょう  
愛だ恋だというものを重要視はしないサイヤ人だが、ハグをすれば腰に巻きつけていたシッポが自然とほぐれるくらいに緊張  
と  
は取れる。

「ラディッツは？」

せん どう いん おう じ く ほし い かえ  
「もう戦闘員だよ。ベジータ王子と組んで星に行ってる。まだ帰ってきてないけどね」

すがた み ちょうなん こた すこ かの  
姿の見えない長男のゆくえを答えたギネに、バーダックは少しだけけわしい顔になった。

おう じ い てん さい てき せん とう りよく ひ れい たか ゆうめい  
ベジータ王子と言えば天才的な戦闘力に比例して、プライドも高いと有名だ。

おう じ く じつ りよく わ こ ほこ す なお よろこ い すこ もん だい  
王子と組める実力は我が子として誇るべきところだが、素直に喜ぶかと言われると少し問題がある。

く ほ いく なか  
「やっかいなヤツと組まされたな……。カカロットは？ まだ保育カプセルの中か？」

だ み  
「ああ、もうそろそろ出すけどね。見るかい？」

ちょうなん はん たい じ なん そく てい けつ か せん ざい のう りよく ひく か てい よう いく じ そだ  
長男のラディッツとは反対に、次男のカカロットは測定の結果、潜在能力が低かったので、家庭用の育児カプセルで育て  
ている。

あし ど かる おく へ や あん ない おも  
足取り軽く奥の部屋にバーダックを案内するギネは、そんなことはとくになんとも思っていないようだ。

ちい  
「小さいな……」

なか ねむ ほん とう ぜい じゃく こども  
カプセルの中でずやすやと眠るカカロットは、本当に脆弱な子供そのものだ。

せい ちよう どく とく かみ がた  
「成長がおそいタイプみたいだ。でも、あんたにそっくりだろ。とくに独特な髪形がさ」

なか わ こ え がお  
けれどギネはうれしそうに、カプセルの中の我が子に笑顔をむけている。

い ほん とう じ ふん に  
言われれば本当にそうだ。カカロットは、自分とよく似ていた。

あに せん とう いん わ こ み  
兄とはちがい、たいした戦闘員にもなれないだろう我が子を、バーダックはじっと見つめる。

こ と ご わく せい おく  
この子はそのうち飛ばし子として、どこかの惑星に送られるはずだ。

まえ  
しかし、このままではその前に——……

よる めす ほし と  
「夜になったら、ポッドを盗んでくる。こいつを星に飛ばしてやるんだ」

かの けつ だん おどろ ふ  
けわしい顔をしたバーダックの決断に、ギネが驚いたように振りかえった。

「えっ？ じょうだんだろ」

ほん き  
「いや。本気だ」

こと ば おし  
「なんでいま、わざわざそんなことするんだよ！ まだ言葉も教えてないのに！」

せん ざい のう りよく と うん めい すこ ほし と  
「どうせカカロットの潜在能力じゃ飛ばされる運命だ。だったら、少しでもマシな星に飛ばしてやる」

はや  
「でも、まだ早すぎるよ！」

こう ぎ まえ で  
ギネは抗議をするように、バーダックの前に出る。

ははおや しん こう い き も  
母親としては信じられない行為だからだ。その気持ちは、バーダックにもわからないでもない。

いつ こく ゆう よ ほん のう つ  
それでも一刻の猶予もないのだと、バーダックの本能が告げている。

じ かん  
「時間がないかもしれないんだ……」

じ かん  
「時間が？」

カプセルの中の我が子を見つめながら、バーダックは感じている懸念をギネに伝えた。

フリーザが伝説の超サイヤ人を探していたこと。

ウササにすぎない存在を、過剰なほどにおそれていること。

今回の招集命令が、なにかよからぬたくらみにちがいないと思っている、ということ。

「オレには、死の予感がするんだ……」

そんなことを、じょうだんで言うような男でないことは、ギネが一番よく知っている。

だからギネは、それ以上強く止めることができなかった。

それでも、実際あたりが闇に静まりかえり、宣言どおりポッドを盗みだしてきたバーダックにならんで荒野をジャンプしていると、そこまですなくてもいいんじゃないかという思いが込みあげてくる。

「やっぱり、よそうよ、こんなこと……」

「心配するな。オレのかんちがいだったら、すぐに助けにいったる」

バーダックにかつがれたポッドの中から、カカロットが暴れている音がする。

それがまるで、はなれたくないと言っている気がしてくるのは、母親だからだろうか。

「だったらさあ、三人でどこかに逃げようよ」

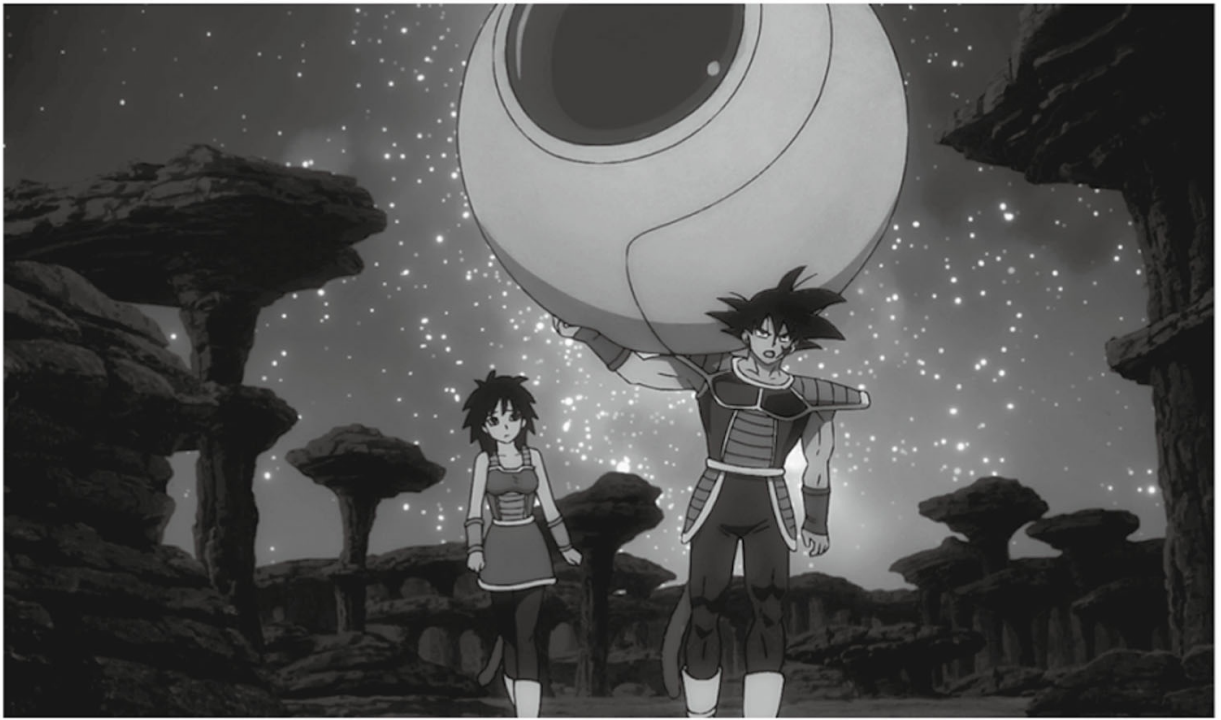
ポッドを盗みだした場所から遠くはなれ、ようやく少しだけ落ち着いて歩きながら、ギネは言った。

「だめだ。オレたちはスカウターですぐ見つかってしまう」

正論だ。

二人の戦闘能力はサイヤ人の中でも高いほうだ。かくれて逃げるには不向きすぎる。

カカロットが力強くポッドをたたき音を聞きながら、ギネは夜道をしょんぼりとした顔でついていく。



「でも……なんでそこまでして？」

歩<sup>あゆ</sup>みを止<sup>と</sup>めないバーダックは、どこまでも本<sup>ほん</sup>気<sup>き</sup>だ。

ギネは少しだけ気<sup>き</sup>分<sup>ぶん</sup>を変<sup>か</sup>えようと、明<sup>あか</sup>るい表<sup>ひょう</sup>情<sup>じょう</sup>を作<sup>つく</sup>り、バーダックの背<sup>せ</sup>中<sup>なか</sup>に話<sup>はな</sup>しかけた。

「男<sup>おとこ</sup>が子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の心<sup>しん</sup>配<sup>ぱい</sup>をするなんて、サイヤ人<sup>じん</sup>らしくないよ」

「いつも闘<sup>たたか</sup>いの中<sup>なか</sup>にいて、気<sup>き</sup>まぐれでなにかを救<sup>すく</sup>いたくなかったのかもな……とくに、下<sup>か</sup>級<sup>きゅう</sup>戦<sup>せん</sup>士<sup>し</sup>と判<sup>はん</sup>定<sup>てい</sup>された我<sup>わ</sup>が子<sup>こ</sup>を……」

どこか自<sup>じ</sup>嘲<sup>ちよう</sup>気<sup>き</sup>味<sup>み</sup>に答<sup>こた</sup>えたバーダックに、やはりギネはなにも言<sup>い</sup>えなかった。

「ふぎや、ふぎやあ、ふぎやあ！」

カカロットの大<sup>おお</sup>きな泣<sup>な</sup>き声<sup>こえ</sup>が、二<sup>ふた</sup>人<sup>り</sup>の沈<sup>ちん</sup>黙<sup>もく</sup>をまぎらわしているかのようだ。

父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>としての愛<sup>あい</sup>情<sup>じょう</sup>なのか、それとも種<sup>しゅ</sup>をのこすという動<sup>どう</sup>物<sup>ぶつ</sup>としての本<sup>ほん</sup>能<sup>のう</sup>なのか。

わからないが、バーダックはいま、本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>にカカロットを助<sup>たす</sup>けるために動<sup>うご</sup>いている。

月<sup>つき</sup>と星<sup>ほし</sup>の明<sup>あ</sup>かりだけが届<sup>とど</sup>く荒<sup>こう</sup>野<sup>や</sup>の一<sup>いっ</sup>角<sup>かく</sup>で、バーダックはポッドをおろした。

見<sup>み</sup>晴<sup>は</sup>らしもよく、飛<sup>と</sup>ばすのに邪<sup>じゃ</sup>魔<sup>ま</sup>になるようなものはなにもない。

「ふぎや……、う……？」

地<sup>じ</sup>面<sup>めん</sup>におろされた振<sup>しん</sup>動<sup>どう</sup>で、カカロットの泣<sup>な</sup>き声<sup>こえ</sup>が止<sup>や</sup>んだ。涙<sup>なみだ</sup>目<sup>め</sup>で不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>議<sup>ぎ</sup>そうに顔<sup>かお</sup>をあげたポッドの中<sup>なか</sup>のカカロットを、バーダックがまっすぐに見<sup>み</sup>つめる。

「地<sup>ち</sup>球<sup>きゅう</sup>という遠<sup>とお</sup>い星<sup>ほし</sup>をプログラムしておいた。技<sup>ぎ</sup>術<sup>じゆ</sup>力<sup>りき</sup>も戦<sup>せん</sup>闘<sup>とう</sup>レベ<sup>へい</sup>ルも低<sup>ひく</sup>い人<sup>にん</sup>間<sup>げん</sup>のい<sup>ほし</sup>る星<sup>せい</sup>だ。おまえでも生<sup>い</sup>きてい<sup>おも</sup>けると思<sup>おも</sup>う。そ  
れにたいした価<sup>か</sup>値<sup>ち</sup>がないので、フ<sup>ふ</sup>リ<sup>り</sup>ザ<sup>ざ</sup>軍<sup>ぐん</sup>にね<sup>か</sup>らわ<sup>かう</sup>れる可<sup>ひく</sup>能<sup>せい</sup>性<sup>せい</sup>も低<sup>ひく</sup>い」

言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>もまだ知<sup>し</sup>らな<sup>わ</sup>い我<sup>こ</sup>が子<sup>こ</sup>だ。

理<sup>り</sup>解<sup>かい</sup>できな<sup>い</sup>いとわ<sup>か</sup>か<sup>あ</sup>つてい<sup>お</sup>るだ<sup>ろ</sup>うに、真<sup>しん</sup>剣<sup>けん</sup>な顔<sup>かお</sup>でバーダックが説<sup>せつ</sup>明<sup>めい</sup>する。

カカロットは不<sup>ふ</sup>穩<sup>おん</sup>ななにかを察<sup>さつ</sup>したかのよう<sup>う</sup>に、ま<sup>う</sup>だお<sup>こ</sup>ぼ<sup>ま</sup>つか<sup>え</sup>ない動<sup>うご</sup>きで前<sup>まえ</sup>に出<sup>で</sup>た。

小<sup>ちい</sup>さな手<sup>て</sup>のひら<sup>まど</sup>を、窓<sup>まど</sup>につける。

「バーダックの考<sup>かん</sup>えすぎ<sup>が</sup>だ<sup>い</sup>ったら、す<sup>むか</sup>ぐに迎<sup>い</sup>えに行<sup>い</sup>くから<sup>い</sup>ね！」

た<sup>よこ</sup>まらずギネも、バーダックの横<sup>よこ</sup>からポッドをのぞ<sup>よこ</sup>きこむ。

「いいか、ぜ<sup>い</sup>った<sup>い</sup>い生<sup>い</sup>きのび<sup>い</sup>るん<sup>い</sup>だぞ！」

き<sup>え</sup>よ<sup>が</sup>と<sup>お</sup>ん<sup>み</sup>とした顔<sup>かお</sup>で二<sup>ふた</sup>人<sup>り</sup>を見<sup>み</sup>つめるカカロットをは<sup>え</sup>げ<sup>が</sup>ます<sup>お</sup>ように、バーダックが笑<sup>え</sup>顔<sup>が</sup>を見<sup>み</sup>せる。





ギネも、さびしさを押しこらして、ポッドの中へと笑顔をもけた。

「また会おうね」

きっと会える。だいじょうぶ。きっと。

窓についたカカロットの小さな手に、バーダックが大きな手をさしだした。

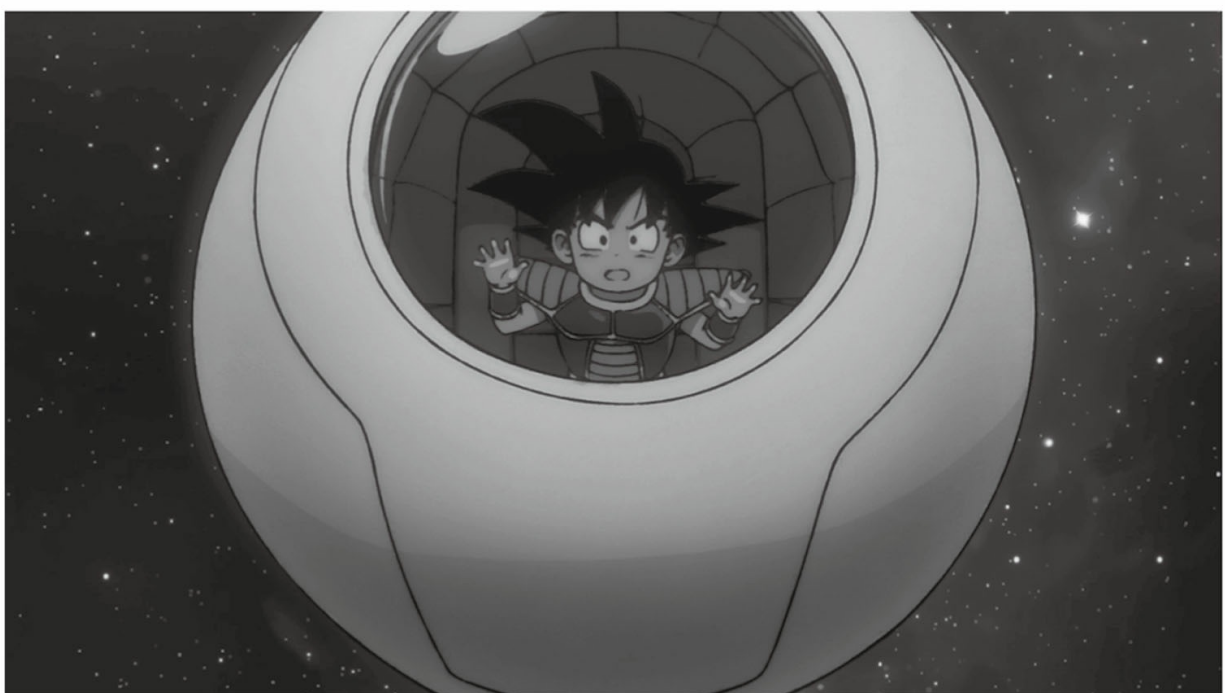
「じゃあな」

窓ごしにかさなった手のひらを、つかめないとわかっているバーダックの指先に力が入る——

と、同時に、ポッドがふわりと浮きあがった。二人の手のひらが、無情にもはなれていく。

「カカロットオオ—————！」

夜空へとぐんぐんあがっていくポッドを見あげていたギネが、たまらず走りだし全身で叫ぶ。その声をまとうように上昇して、カカロットを乗せたポッドは、二度ともどることのない惑星ベジータをあとにしたのだった。





それからのことは、まさにバーダックの懸念<sup>けねん</sup>したとおりになる。

戦闘民族サイヤ人の反骨精神<sup>はんこくせいしん</sup>と、超サイヤ人の伝説<sup>でんせつ</sup>をうとましく思っていたフリーザは、かねて思い描いていたとおりに、惑星<sup>わくせい</sup>ベジータを滅ぼしたのだ。

たくらみに気づいたバーダックが抗戦<sup>かうせん</sup>するも、フリーザの圧倒的な力の前には無力だった。

フリーザのはなった巨大な灼熱<sup>しゃくねつ</sup>のエネルギー弾<sup>だん</sup>は、バーダックも、ギネも、それになにも知らないほとんどすべてのサイヤ人<sup>じん</sup>をも飲みこみ、惑星<sup>わくせい</sup>ごと、宇宙<sup>うちゅう</sup>から消し去った。

たまたま母星<sup>ぼせい</sup>をはなれていたサイヤ人<sup>じん</sup>だけが、わずかに生きのこることとなった。

その中には、まだ子供のサイヤ人もいた。遠征<sup>えんせい</sup>に出ている惑星<sup>わくせい</sup>で、帰還命令<sup>きかんめいれい</sup>を無視<sup>むし</sup>していたベジータ王子<sup>おうじ</sup>。惑星<sup>わくせい</sup>パンパで父と暮らすブロリー。地球<sup>ちきゅう</sup>に飛ばし子<sup>とご</sup>にされたカカロット。

三人はまったくちがう環境<sup>かんきょう</sup>で、それぞれにたくましく育っていく。

そして、二十数年<sup>にじゅうすうねん</sup>後……フリーザの懸念<sup>けねん</sup>もまた、現実<sup>げんじつ</sup>のものとなる。

生きのこったサイヤ人<sup>じん</sup>たちのひとりが怖れていた超サイヤ人<sup>おそスーパーじん</sup>となり、フリーザはナメック星<sup>せい</sup>で屈辱<sup>くつじよく</sup>的な敗北<sup>はいぼく</sup>を味わわされることになったのだった。





其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

五<sup>ご</sup>

初<sup>は</sup>め<sup>じ</sup>ての友<sup>と</sup>達<sup>も</sup>



はなし　げん　だい  
話は現代にもどる。

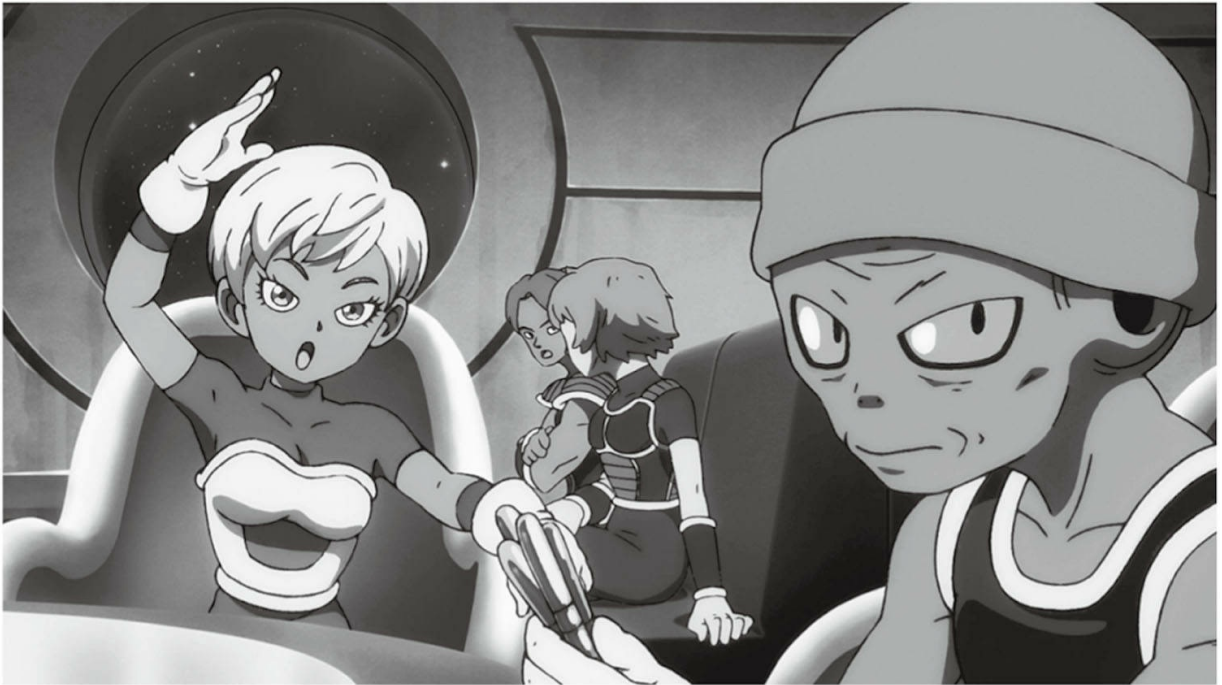
わく　せい　　せん　とう　いん　　じん　　すく　　う　　ちゅう　せん　　なか　　しよく　どう　　きゅう　けい　しつ　　だん　しょう  
惑星バンパから戦闘員のサイヤ人を救いだしたレモとチライは、宇宙船の中にある食堂をかねた休憩室で談笑していた。

ほう　しょう　きん　　き　　ぶん  
もらった報奨金はたんまりある。ひさしぶりに、ゆかいな気分だった。

じょう　き　げん　　はな　　はい  
上機嫌で話していると、プロリーとパラガスが入ってきた。

「よう！　さっぱりしたじゃないか！　こっちで食べよ！」

て　　ふた　　り　　き  
手をあげたチライに二人が気づく。





シャワーを浴びてきたようで、二人ともずいぶんこざっぱりして見える。

パラガスは、フリーザ軍の戦闘服に着替えていた。

が、ブローリーのほうは、インナースーツにブーツ、それに腰の毛皮はそのままだ。

「ブローリー、あんた戦闘服は？」

チライが聞くと、ブローリーはすぐそばにきて、立ったままムウッと顔をしかめた。

「あれは……動きにくい」

「着ちゃうとそうでもないんだぜ。まあ、好きにすりゃいいけどな」

チライは自分の戦闘服を引っぱって見せた。

ブローリーはあまり会話が得意ではないようなので、見せるのが一番手っ取り早いかなと思ったからだ。不思議そうに首をひねるブローリーに無理強いせず、チライはなんの気なしに腰の毛皮に手を伸ばした。

「でも腰の毛皮はもう捨てちゃえよ。汚れてるしクサイよ」

その瞬間だ。

「だめだ!!」

はじかれたように、ブローリーがいままで聞いたこともないような大声を出した。

その場にいた全員の注目を浴びるほどの大声だ。

チライもちろん驚いたが、それよりもなぜか急にしょんぼりしてしまったブローリーの態度が心配になった。

「そ、そうか。大事なもんだったんだな……」

捨てろだなんて、悪いことを言ってしまった。

毛皮にそっとふれたブローリーが、なにかをなつかしむような悲しい目になる。

「……これは、オレの……」

「ブローリー、食事にきたんだ。話をしにきたんじゃない」

それまでだまっていたパラガスが、言いかけたブローリーをぴしゃりと止める。

えっ、と驚くチライたちから顔をそむけ、ブローリーはうつむいてしまった。

いまの会話のいったいなにが悪いというのか。

反論もせず、おとなしくしたがるブローリーは、それでもどこか落ちこんで見える。

チライはなにも言わないブローリーにかわって、テーブルの上に少しでも身を乗りだした。

「あんたさあ。いいじゃないかこれぐらい」

「よけいな口だしはしないでくれ」

「ああン？」

なんだその言い方は。

「まあまあ——」

つい凄みをきかせたチライに、レモがあわててあいだに入る。

「おいっ。おまえ、新入りか？」

そのときだ。いままでのやりとりをまるで無視して、男がチライに声をかけてきた。

がっしりとしたガタイのよさを見せつけるように、悠々と歩く男は、自分に自信があるらしい。

「こんなシクた連中といても楽しくないだろ。今回の作戦で、この船に乗ってるまともな戦闘員は俺だけなんだぜ？」

男はレモだけでなく、パラガスとブロリーまで小バカにしたように鼻で笑い、チライヘニヤけた顔をむける。

「ちっ」

まともな戦闘員が、そんな態度をするものか。

見たところ酒も入っているようだし、こういう手あい相手にはないのが一番だ。

そう思い、聞こえないフリで顔をそむけたチライの肩を、男の手ががしとつかんだ。

「ほら、こいよ」

「はなせよ。イヤだって言ってるだろ！」

「まあまあ、ほら、今日のところは俺が一杯おごるから——」

見かねたレモが、あいだに入ろうとして、

「うるせえ、ジジイ！」

ののしりと同時につき飛ばされて、床に転がる。

「！」

「やめろ、ブロリー」

むっとした顔をかくそうともせずブロリーがその場に立ちあがり、パラガスが止める。その声で、ブロリーはピクリと動きを止めた。が、男はあおるようにブロリーの前に歩みよった。

「なんだ？ 文句でもあるのか？」

「ある」

「ん、だとお!!」

即答されてプチ切れた男が、いきなり殴りかかってきた！

重そうな拳がブロリーの胸板にぶちあたる。

だが、ブロリーはピクともしなかった。

「な……」

驚きに後ずさりかけた男が、それでも拳を振りあげる。

「クソ！ クソッ！」

連打を胸にいくら浴びても、ブロリーの表情は変わらない。

それどころか、パシッと男のパンチを受けると、反対の手で喉元をつかみ持ちあげた。

「があ……っ」

「ブロリー！」

立ちあがって名前を呼んだパラガスを無視して、ブロリーはさらに男を高く持ちあげる。

「うがああっ！」

床からはなれた男の足が苦しげにバタバタともがいても、ブロリーは手をゆるめなかった。感情が高ぶり、怒りに我を忘れて

いるようにすら見える。

いままでのおだやかさがウソのような態度に、レモとチライは、ただただ呆然としてしまった。

このままでは、男は死んでしまうかもしれない。

「ちっ」

パラガスは小さな舌打ちをすると、素早く腰のポシェットに手を伸ばした。中からリモコンを取りだし、スイッチを押す。すると、プロリーの首輪から、激しい電撃が走りだした。

「があああっ!!!」

衝撃で、プロリーの手が男からはなれる。

「うぐあっ！ ああああああああ!!!」

男が逃げてもなお電流は止まらず、プロリーの口から絶叫がほとばしった。

パラガスはスイッチを切らずに、苦しむプロリーを見おろしている。



ようやくスイッチが切<sup>き</sup>られたところには、ブローリーはゼエハアと激<sup>はげ</sup>しく肩<sup>かた</sup>で息<sup>いき</sup>をしながら、がくりと床<sup>ゆか</sup>にひざをつくほどだった。  
「だいじょうぶか？ あんた！ やりすぎだよ！ あんなことするなんてさ!!」

チライはパラガスに猛然<sup>もうぜん</sup>とつめよった。

こ<sup>こ</sup>がら<sup>がら</sup>せ<sup>せ</sup>いた<sup>いた</sup>小柄なチライに責められたところで痛くもかゆくもないのだろう。パラガスは、ふん、と鼻<sup>はな</sup>で笑<sup>わら</sup>う。  
「止めなければ、殺<sup>ころ</sup>していたかもしれんぞ」

そうかもしれない。でもブローリーは自分<sup>じぶん</sup>を助けようとしてくれただけだ。と<sup>と</sup>止めるにしたって、ほかの方法<sup>ほうほう</sup>があるだろう。

いた<sup>いた</sup>きょう<sup>きょう</sup>ふ<sup>ふ</sup>し<sup>し</sup>はい<sup>はい</sup>痛みと恐怖で支配しようだなんて、ろくでもない親<sup>おや</sup>だということがよくわかる。



「あんた、どんな育て方をしたんだい？」

「ふん。恩人ではあるが、話はあわないようだ」

人を小バカにするその態度もいけすかない。

こうなったら目にももの見せてやる。

「今後、息子には近づかないでくれ」

「……チッ」

チライはわざとくやしそうに舌打ちをして、うしろにさがる演技をした。

その動きにあわせて素早くポシエットに手をつっこみ、中のリモコンをサッとばう。

チライを小娘と見下しているパラガスは、まるで気づいていないようだ。

内心で笑いをこらえていると、音もなくベリブルが休憩室へと入ってきた。

「——パラガスさん、フリーザ様がお呼びですよ」

「フリーザ様が！ はい、すぐ行きます！ ブロリー！」

「パラガスさんだけでけっこう……」

「え？ そうですか？ ブロリー、すぐにくる。待っている」

薄ら笑いを浮かべていたパラガスは表情をあらため、すぐにブロリーへと偉そうな顔で命令した。上に媚びるのにもほどがある。

いっそ腰に巻いたシッポでも振るんじゃないかと憎々しげに見送ると、レモがあきれたように首を振った。

「俺の死んだクソオヤジだって、あいつよりましかな」

まったくだ。

けれどそんな最低オヤジに、チライは一矢報いてやったのだ。

「へへへ……」

「どうした？ チライ——……って、パクツたのか！」

手元にかくし持っていたリモコンを見せると、驚くレモの声もうれしそうだ。





レモのうしろからのぞきこんできたブローリーにもわかるようにリモコンを見せ、チライはそれを床に放り投げる。

「こんなの、こうしてやるよ」

そうして思いきり踏みこんだチライの足の下で、リモコンはぐしゃりと簡単に壊れたのだった。



うるさいオヤジの目が届かなくなったブローリーを、レモたちは自分たちの居室へと案内した。とは言っても、非戦闘員の部屋は個室ではない。蜂の巣のようなベッドルームは大人数用で、プライバシーなどあってないようなものだ。

が、めんどろな戦闘員を遠ざけるにはもってこいの場所でもある。

「ブローリー、さっきはサンキュー」

二人が買ってやった大量のスナックバーを、どっかりと床にあぐらをかいて食べているブローリーに、チライはオーケーサインを作って見せる。

スナックバーに夢中のブローリーはこたえず、今度は水の入った金属製の容器を手にした。

重さと中でゆれる様子から飲み物だと判断して、そのまま上に持ちあげる。が、ふたをつけたまま上むいた口元にむけて何度振っても、一滴たりとも出てこない。

「ううー！」

「なんだ。水が飲みたいのか？ 貸してみろ。ほれ」

察したレモが、容器のふたをあけてやる。わたされたブローリーは、少しだけ警戒しながら口にくみ、驚いたように目を見開いた。

「！ これはなんだ」

「え？ ただの水だよ。……あんた、水も飲んだことなかったのか」

本気で感動している様子で水を見つけたブローリーは、それからガブガブと一気に飲み干してしまった。まるで初めてのものに我慢がきかない子供のようだ。



「はあ……うまかった」

ただの水でここまでうれしそうにできるヤツは、見たこともない。

満足げにほほえんだブロリーは、ふと、腰に巻きつけていた緑の毛皮をやさしくなでた。

「……これは、バアの耳だ」

「「え？」」

いきなりの話題転換だが、毛皮のことだとはすぐにわかった。

話をするなと命じられても、きつとずっとだれかに話しかけたのだろう。

だまって続きをうながすと、ブロリーはとつとつと語りはじめた。

「オレはバアと仲がよかったんだ。バアは大きな大きな、この船より大きなケダモノだ。バアと鳴くから、オレはそう呼んだ」

惑星バンパで飼っていたペットかなにかだろうか。

腰のそれが耳だというのだから、そうとう大きな生き物にちがいない。

全身を緑色の毛でおおわれた、大きなクマのようなものを想像してみる。

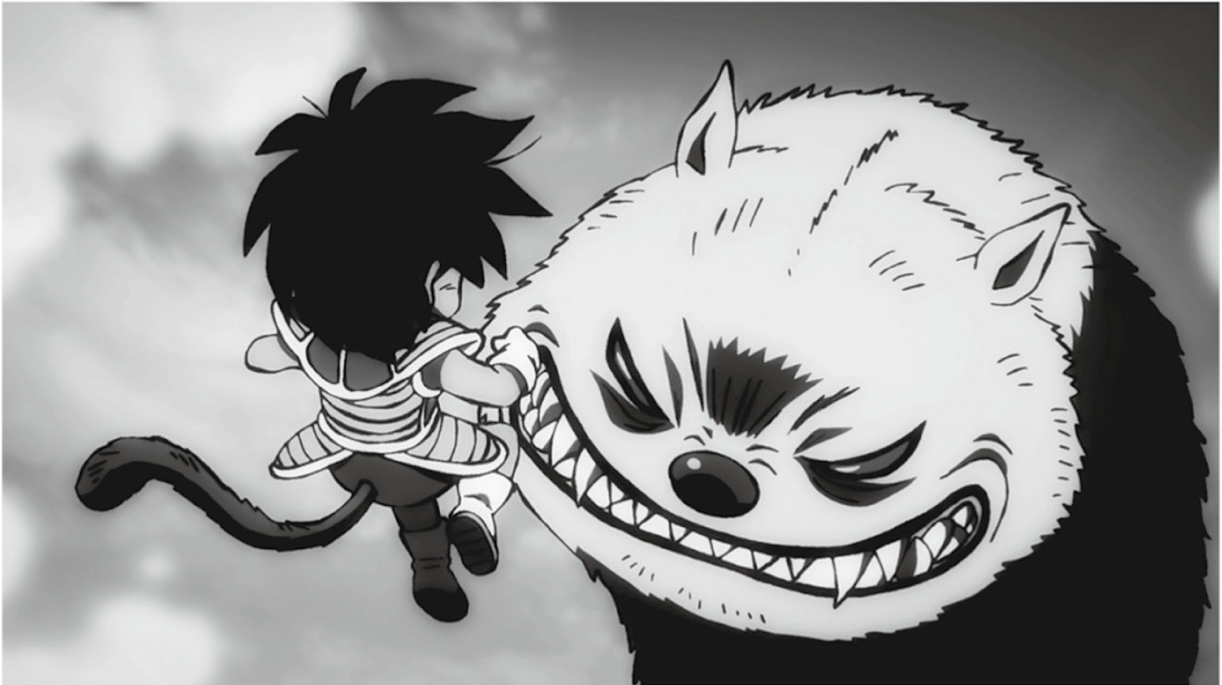
ブロリーはバアを思い出しているのか、間を置き、少しだけうつむいて話を続ける。

「バアはおそろしいが、毎日毎日、バアの攻撃をよけるトレーニングをしていたら、仲がよかった。……とても仲よかった」

「初めての友達ってことか……」

おだやかな表情で語るブロリーに、レモがつぶやく。

なつかしさの中に親しみを込めた話し方だ。



「……でも、お父<sup>とう</sup>さんは怒<sup>おこ</sup>った。バアと仲<sup>なか</sup>がよくなるとトレーニングじゃない。それで——」

おだやかだった表情<sup>ひょうじょう</sup>が、けわしくなる。

「お父<sup>とう</sup>さんは銃<sup>じゅう</sup>でバアの耳<sup>みみ</sup>を撃<sup>う</sup>って、バアを怒<sup>おこ</sup>らせた。二度<sup>に</sup>とバアは、オレと仲<sup>なか</sup>よくなってくれなかった」

「それで、耳<sup>みみ</sup>がちぎれたのか……」

とんでもないオヤジだとは思<sup>おも</sup>っていたが、そんな昔<sup>むかし</sup>から最低<sup>さいてい</sup>なことをやっていたようだ。

ブローリーは切<sup>せつ</sup>なそうな表情<sup>ひょうじょう</sup>で、バアの耳<sup>みみ</sup>をなでる。

「だからオレは……バアの耳<sup>みみ</sup>といっしょににいることにした」

思い出<sup>おもいで</sup>のたくさんつまった大切<sup>たいせつ</sup>なものだったのだ。

話し終<sup>はな</sup>えて、また少<sup>お</sup>しだけうつむいてしまったブローリーの横<sup>よこ</sup>に、チライはベッ<sup>うえ</sup>ドの上<sup>と</sup>からぴょんと飛<sup>お</sup>び降りてしゃがみこんだ。

「いっぱいしゃべったね、ブローリー」

「ここでそんなピュアな話<sup>はなし</sup>を聞<sup>き</sup>いたのは初<sup>はじ</sup>めてだ……おまえ、マジで純<sup>じゅん</sup>粋<sup>すい</sup>なんだな」

レモもやさしい口調<sup>くちよう</sup>で話<sup>はなし</sup>しかける。

いまの話<sup>はなし</sup>を聞<sup>き</sup>いて、チライは思<sup>おも</sup>ったことがあった。

ブローリーが不安<sup>ふあん</sup>にならないように、できるだけやさしい声<sup>こえ</sup>を心<sup>こころ</sup>がけながら、チライはうつむくブローリーをのぞきこむ。

「……もしかして、ホントは闘<sup>たたか</sup>うの好き<sup>す</sup>じゃないんだろ……？」

「なまじ闘<sup>たたか</sup>いの才能<sup>さいのう</sup>がすごかったから、オヤジさんに無理<sup>むり</sup>矢理<sup>や</sup>トレーニングされちまったんだな」

おな<sup>おな</sup>同じ<sup>かん</sup>ことを、レモも感<sup>かん</sup>じていたらしい。

「……」

ちらりと上<sup>うわ</sup>目<sup>め</sup>づかいで二人<sup>ふたり</sup>を見たブローリーは、答<sup>こた</sup>えに迷<sup>まよ</sup>っているように見える。

ここにパラガスはいないのに、それでも縛<sup>しば</sup>られているようなブローリーがかわいそうだ。

チライは、だんだん腹<sup>はら</sup>が立<sup>た</sup>ってきた。

ムカッとした気分<sup>きふん</sup>のまま立ちあがると、つられるようにブローリーも顔<sup>かお</sup>をあげる。

「あんたの父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>さあ、あんたをただの強<sup>きやう</sup>力<sup>りき</sup>な武器<sup>ぶき</sup>としか思<sup>おも</sup>ってないんじゃないか？ 復<sup>ふく</sup>讐<sup>しゆう</sup>と出<sup>しゅつ</sup>世<sup>せ</sup>のためのさ」

「だろうな。おまえさんのオヤジは最低<sup>さいてい</sup>だよ。あんなヤツの言<sup>い</sup>うこと、聞<sup>き</sup>く必要<sup>ひつよう</sup>ないぞ」

たたみかけるように同意<sup>どうい</sup>したレモに、チライも大<sup>おお</sup>きくうなずく。

けれどブローリーはむずかしい顔<sup>かお</sup>をして、なにやら考<sup>かんが</sup>えこんでいるようだ。

それから少<sup>すこ</sup>しして、上<sup>うえ</sup>をむいたブローリーは、二人<sup>ふたり</sup>にキリッとした表情<sup>ひょうじょう</sup>を見<sup>み</sup>せた。

「お父<sup>とう</sup>さんのことを悪<sup>わる</sup>く言<sup>い</sup>うのは、いけない」

「「……」」

そう言うように、ずっとしつけられてきたのだろう。

決<sup>き</sup>まり文<sup>もん</sup>句<sup>く</sup>を真<sup>ま</sup>顔<sup>が</sup>で告<sup>つ</sup>げるブローリーが、二人<sup>ふたり</sup>には気<sup>き</sup>の毒<sup>どく</sup>に思<sup>おも</sup>えたのだった。



ブロリーがレモやチライとバアの思い出話をしていたころ。

フリーザの居室に呼ばれたパラガスは、につつきベジータ王の忘れ形見、ベジータ王子への復讐計画について、説明を受けていた。

「これから行く地球という星に、ベジータと、もうひとりのサイヤ人がいます」

惑星バンパほどではないが、かなり辺境の星らしい。

そんな星に、誇り高きサイヤ人がまだ二人もいることに、パラガスは少し驚く。

「ブロリーさんのパワーを見せていただきますよ」

「ブロリーの強さは生まれながらの超天才。長年のうらみを晴らしてみせます……！」

フリーザから期待の言葉をかけられて、ビシッと頭をさげて決意を伝える。

だが、パラガスの復讐自体にはまるで興味のないフリーザは、一瞥もくれず、窓の外へと視線を動かした。

「ところで、ベジータはお好きにしてもかまいませんが、もうひとりの孫悟空というサイヤ人のトドメはわたしにまかせてくださいね？」

パラガスにとってのベジータは、フリーザにとっての孫悟空だ。

一見のきで下等な山ザルにしか見えない悟空に、フリーザは何度も敗れてきた。

思い出すだけで、腹立たしい。

「……孫悟空を殺すこと、それがわたしの永いあいだの夢ですから」

おさえられない殺気のこもった声で、静かに言ったフリーザに、パラガスはふるえあがった。

「し、承知いたしました……！」

そう言うだけで精いっぱいだ。

ごくりと息をのみ、うしろに一步さがりながら、深々と頭をさげる。

重々しい雰囲気が充滿する室内を変えたのは、あわてて入ってきたキコノの報告だ。

「フリーザ様！ ドラゴンボールが七個そろったようです！」

「おお、それはすばらしい！」

いままでの空気がまるでウソのように、フリーザは満面の笑みで明るい声を出した。

ドラゴンボールというものがなにかはよくわからないが、少しだけ息をつけたパラガスを、もうフリーザは見えていない。

「では、さっそく地球に」

「ははっ！」

うれしそうに命じたフリーザにキコノが答え、宇宙船は推進力を加速させた。

超光速でむかう先には、悟空とベジータたちのいる星、——地球がある。



「あそこ！ フリーザ<sup>ぐん</sup>軍よ！」

フリーザ<sup>ぐん</sup>軍からドラゴンボール<sup>と</sup>を取りかえすため、悟空<sup>ごくう</sup>たちが南<sup>みなみ</sup>の島<sup>しま</sup>を出発<sup>しゅっぱつ</sup>して数時間<sup>すうじかん</sup>。

上空<sup>じやうくう</sup>から氷<sup>こおり</sup>の大陸<sup>たいりく</sup>を見おろしていたブルマ<sup>み</sup>が、フリーザ<sup>ぐん</sup>軍の兵士<sup>へいし</sup>を見つけ、指<sup>ゆび</sup>をさす。

トランクス<sup>えいそう</sup>からもらった映像<sup>ふた</sup>どおりの、二人組<sup>りぐみ</sup>の男<sup>おとこ</sup>のようだ。

その手<sup>て</sup>にはドラゴンレーダー<sup>と</sup>と、ドラゴンボール<sup>み</sup>が見てとれる。

「ちっ。もう最後<sup>さいご</sup>の一個<sup>いっこ</sup>を見つけやがったか……」

操縦<sup>そうじゆう</sup>席<sup>せき</sup>に座<sup>すわ</sup>るブルマ<sup>よこ</sup>の横<sup>はんにん</sup>から犯人<sup>み</sup>を見て、ベジータ<sup>したう</sup>が舌打<sup>したう</sup>ちをした。

犯人<sup>はんにん</sup>たちも、ブルマ<sup>そうじゆう</sup>の操縦<sup>こがた</sup>する小型飛行機<sup>ひこうき</sup>を見つけ、たがい<sup>かお</sup>にわたわたと顔<sup>み</sup>を見あわせる。

「あの飛行機<sup>ひこうき</sup>、やばいんじゃないか？ キコノ様<sup>さま</sup>の言<sup>い</sup>っていたサイヤ人<sup>じん</sup>じゃないだろうな!？」

地球<sup>ちきゅう</sup>にはとんでもなく強いサイヤ人<sup>つよじん</sup>が二人<sup>ふたり</sup>いるから、ぜったい見<sup>み</sup>つからないように、とさんざん<sup>い</sup>言<sup>い</sup>われてここまできたのだ。彼<sup>かれ</sup>らがそうなら勝ち目<sup>かめ</sup>はない。

雪<sup>ゆき</sup>でおおわれた氷<sup>こおり</sup>の大地<sup>たいち</sup>に着陸<sup>ちゃくりく</sup>する様子<sup>ようす</sup>を見守<sup>みまも</sup>ることしかできない二人<sup>ふたり</sup>の前<sup>まえ</sup>で、小型飛行機<sup>こがたひこうき</sup>が動きを止<sup>と</sup>めた。

ゆっくりととびらが開<sup>ひら</sup>き、中<sup>なか</sup>から数人<sup>すうにん</sup>降<sup>お</sup>りてくる。

出てきたのは防寒着<sup>ぼうかんぎ</sup>をしっかりと着<sup>き</sup>こんだ男<sup>おとこ</sup>が二人<sup>ふたり</sup>と女<sup>おんな</sup>がひとり。

それにみように薄着<sup>うすぎ</sup>の背<sup>せ</sup>の高い男<sup>たかおとこ</sup>の合計<sup>ごうけい</sup>四人<sup>よにん</sup>だ。

「うひゃー！ こりやさみい！」

つめ<sup>つめ</sup>かぜ<sup>かぜ</sup>ふ<sup>ふ</sup>冷たい風<sup>ごくう</sup>に吹かれて、ぴょんぴょんと悟空<sup>ごくう</sup>がとびはねる。

むっつりとした顔<sup>かお</sup>で出てきたベジータ<sup>で</sup>も、色ちがいの防寒着<sup>ぼうかんぎ</sup>を身<sup>み</sup>に着<sup>つ</sup>けている。

「ウイスさんはよく平気<sup>へいき</sup>ね」

「ほほほ。宇宙空間<sup>うちゅうくうかん</sup>はもっと寒<sup>さむ</sup>いですからね」

フード<sup>じやうげ</sup>つきの上下セット<sup>ぜんしん</sup>のウェアで全身<sup>み</sup>をしっかりとガード<sup>ゆいいつ</sup>しているブルマ<sup>か</sup>に、唯一<sup>ふくそう</sup>いつもと変わらない服装<sup>わら</sup>のウイス<sup>い</sup>が笑<sup>わら</sup>って言<sup>い</sup>った。

ドラゴンボール<sup>と</sup>を取りかえしにきたにしてはのんきな会話<sup>かいわ</sup>だ。





フリーザ軍の二人は、ためにスカウターをむけてみる。

ピピピピピッ！

ヒッ、と男たちが悲鳴をあげて尻餅をついた。

「や、ヤバい……スカウターの数値が振り切れたぞ！ サイヤ人だ！」

「逃げるぞ！」

こちらにむかってこないうちに早くしないと！

二人は一目散に駆けだす。

停泊していた宇宙船に飛び乗って、エンジンペダルを思いきり踏む。

見るまに急上昇した宇宙船が、逃げ切れなかった直後。

「はっ！」

気づいたベジータが空にむかって気弾をはなち——それは機体に直撃した！

「ひい——つ!!」

宇宙船はもくもくと黒煙をあげて、あっというまに地上におちる。

雪にうもれた機体を、一足飛びに近づいたベジータが持ちあげる。悟空はコックピットのガラス窓に頭をつけるようにして、中の二人をのぞきこんだ。

「おいこら、出てきてドラゴンボールを返せ！」

「ひいっ！」

フツツ、と鼻息荒く凄まれて、二人は首をすくめ、たがいに顔を見あわせる。

「ど、ど、どうする？」

「ど……どうするって……、返さないとこいつに殺される……でも、返すとフリーザ様に殺される……」

どちらに転んでも最悪だ。

泣きそうな顔でふるえる男たちに、もう一度せまろうとした悟空だったが、

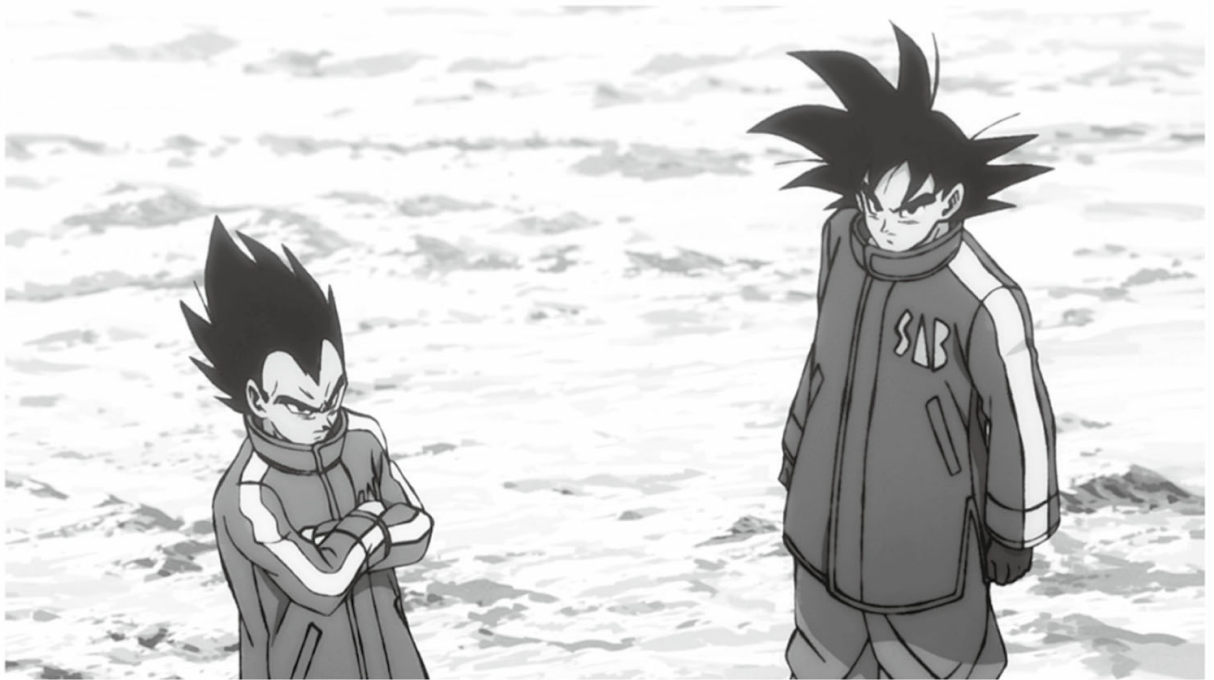
「!!」

とつぜん感じた強い気配に、ハッとして空を見あげた。

押し問答をしているあいだに、どうやらフリーザも到着してしまったようだ。

ぶあつくたれこめていた雲が、急に吹き飛ぶ。

その中からフリーザを乗せた巨大な宇宙船が姿をあらわした。



「やれやれ……フリーザの登場だ」

ぎょうぎょう　しょうげき　は　ふ　　う　ちゅうせん　　ちゃく　りく　　しん　けん　　ひょうじょう　　み　　ご　くう　　い  
仰々しい衝撃波を吹きちらしながら宇宙船が着陸する。真剣な表情で見つめながら、悟空が言った。ゆっくりとハッチが  
ひら  
開こうとした、まさにそのとき。

「！」

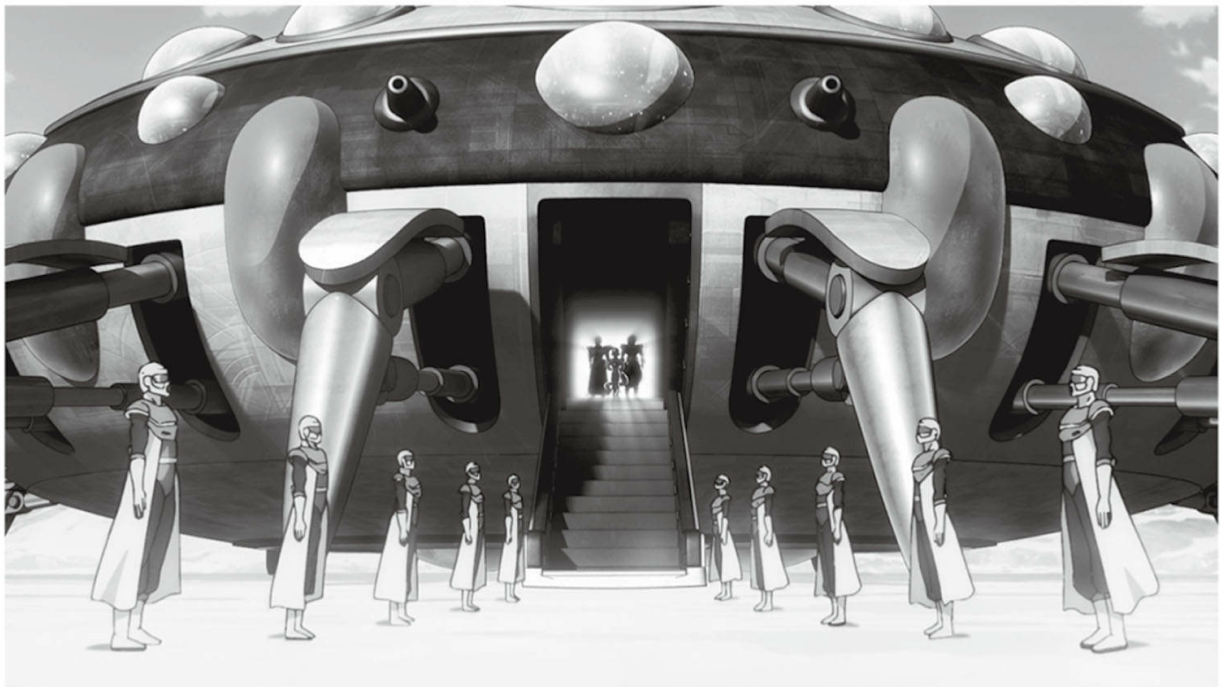
「フリーザだけじゃねえぞ……なにか、とんでもねえヤツが……」

かん　　つよ　　にん　げん　　け　　はい  
感じたことのない、ものすごく強い人間の気配がする。

おな　　かん　　ひょうじょう  
同じように感じただろうベジータの表情も、かなりけわしくなっている。

み　　さき　　う　ちゅうせん  
にらむように見つめる先で、宇宙船のタラップからおりてきたのはフリーザ。

ぐん　せん　とう　ふく　　み　　つつ　　み　　ふた　り　　おとこ  
それにフリーザ軍の戦闘服に身を包んだ、見たことのない二人の男だ。





其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

六<sup>ろく</sup>

謎<sup>なぞ</sup>

のサイヤ人<sup>じん</sup>

あらわる



ご ぐう  
悟空とベジータは、フリーザのそばにいる二人の男から、目がはなせないでいた。

ねん ばい  
年配のほうはそれほどでもない。だが、もうひとりの男には、なにかとてつもない気を感じる。

おとこ つよ  
その男がキッと強いまなざしをこちらにむけると、ものすごい衝撃が悟空たちに届いた。

「……」

「あいつら、サイヤ人じゃないか」

ふと、パラガスのシッポに気づいたベジータにそう言われ、悟空も二人をあらためて見る。

なるほど。たしかにそうらしい。

たい  
対して、パラガスもベジータの姿にハッと目を見開いた。

「……ベジータ！ まちがない、王にソックリだ……」

ほん にん し き  
本人は死んだと聞かされても、まるで生き写しの息子を見れば、怒りがふつふつとわいてくる。そもそもベジータ王子がブローリーと同時期に生まれていたせいで、自分たちは何十年も惑星バンパに閉じこめられる羽目になったのだ。

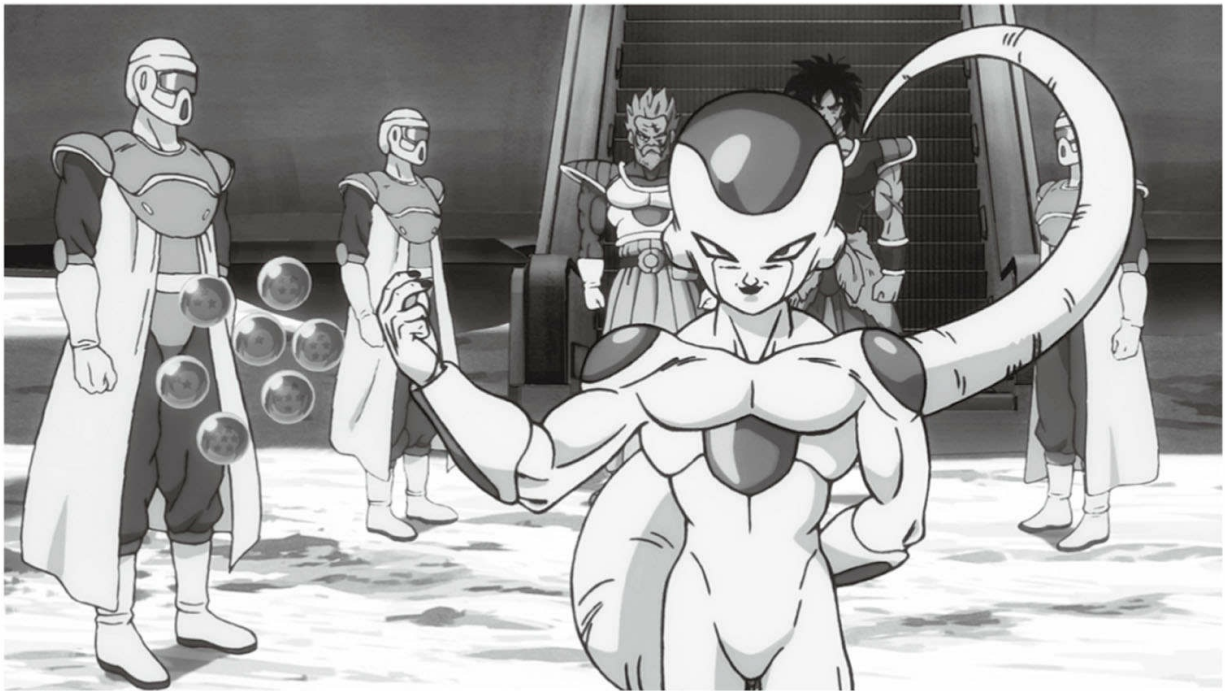
げん いん げん いん どう ざい  
原因の原因も、同罪だ。パラガスの復讐心が燃えあがる。

「なにしにきたんだ、フリーザ！」

さけ ご ぐう  
叫ぶ悟空にフリーザは、おかしそうに口元をゆがめた。

「もうご存じなんですよ？ ドラゴンボールで願いをかなえるためですよ」

て うご  
ちよいちよいと手を動かすと、コソコソと宇宙船のほうへと移動していたフリーザ軍の兵士たちの手から、七つのドラゴンボールが、ふわりと宙を舞ってフリーザの手におさまった。







そと よう す う ちゅうせん まど み  
外の様子を宇宙船の窓から見つめながら、チライはとなりのレモに声をかけた。

「なあ、あの玉みたいなやつはなんだ？」

「さあな……だれかに聞いてみるよ」

たま  
玉のために、これからブローリーは闘うことになるのだろうか。

ふた り おとこ  
むかいあっている二人の男にしろ、よくわからないことだらけだ。

ひ せん どう いん  
どちらにしろ非戦闘員のレモとチライには、なにもできない。

ブローリーの様子を気にしつつも、二人はことのなりゆきを見守るしかないのだった。

「ちょっと！ ドラゴンボール取りかえてよー！」

チライたちとは反対に、様子を見ていたブルマはもう我慢できないというように、はなれた場所から悟空たちにむかって叫んでいた。

「それどころじゃないですよ」

「？」

ひ なん  
いっしょに避難しているウイスがにこやかに言う。

せん どう みん ぞく さが い  
「戦闘民族の性と言うべきでしょうか——」

「！」

こと ば  
その言葉にハッとして、ブルマは悟空とベジータを見なおした。

（あああ、もうっ！）

ほん どう ふた り たたか かんが かお  
本当だ。二人とも、闘うことしか考えていない顔をしている。

きつとドラゴンボールのことも、頭の片隅にもものこっていないにちがいない。

おもしろそうにことのなりゆきを見つめるウイスのとなりで、ブルマは歯がゆい思いをするはめになったのだった。



「フリーザ！ その二人は？」

外野の思惑など知らない悟空がフリーザに聞くと、いつものていねいな口調でフリーザは二人の紹介を始めた。

「こちらは新しくフリーザ軍に加わった、ブロリーさんとそのお父様の——？」

「パラガスだ！」

フリーザのうしろにひかえていたパラガスが、名乗りをあげる。

「だ、そうです。お気づきのように、あなたたちと同じサイヤ人ですよ」

「そんなヤツは知らん」

すかさずベジータが答える。

まだ幼いころに母星が消滅したとはいえ、これほどまでに強い戦闘力を持っているサイヤ人なら、王子だったベジータが知らないのはおかしい話だ。

だがフリーザは「でしうね」と楽しげにほほえんだ。

「あなたが幼いころに、このブロリーさんとパラガスさんは、あなたの父親であるベジータ王からひどい仕打ちを受けて、いままで見知らぬ過酷な星から脱出できずにいたそうですよ」

落ち着いた口調ながら、暗にベジータを挑発するような言い方だ。

全員のあいだを、氷の大地が運ぶ冷たい風が吹き抜けていく。

「フリーザ」

真剣な顔で悟空が言う。

「なんですか？」

一触即発か、と思われるほど緊迫した無言がおとずれ——

「カコクってなんだ？」

まさかの質問だった。悟空らしいと言えば悟空らしい。

全員が「そこか！」とつっこみたい気持ちをかかえる中、フリーザはどうかいていねいに言葉を返してやる。

「……厳しすぎる……ってことですよ」

「へへへ、あんがとな！」

「このバカめ！」

やっと事情が見えてきたとばかりに礼を言う悟空の横で、ベジータが恥ずかしそうに舌打ちをした。

そんなやり取りも、当事者であるパラガスにはすべてがすべておもしろくない。

「くっ！ おまえだけはぜったいに許さんぞ、ベジータ！ 俺たちはその復讐にきたんだ！」

怒りを目にたぎらせて、ベジータに指をつきつける。

「ふざけるな！ オレの知ったことか！」

負けずに言いかえたベジータに、悟空も「そうだ」とあいづちを打つ。

「そんなの関係ねえだろ。おんなじサイヤ人同士なんだ。仲よくやろうぜ」

あっけらかんと言って、手を頭のうしろで組んだ悟空に、パラガスがギリッと奥歯を噛んだ。

「……ぐっ」

四人のやり取りをだまって見ていたブロリーが、うめき声のような声を出す。

そんな息子をちらりと見やり、パラガスはフリーザへと進言する。

「フリーザ様、いいですか？」

「ぐうう……ッ」

「我慢できないようですね」

怒りの表情をたたえながら、ブロリーの長い黒髪がざわめいている。

フリーザは楽しそうに快諾した。

「いいでしょう。どれほどの実力か見せてください」

「承知しました。よし！ ブロリー、やれ!!」

パラガスが命じる。

と、同時に、ブロリーは一直線にベジータのもとへと駆けだした！



「うおおおお！」

き あ お たけ いっ き ま あ  
気合いの雄叫びとともに、ブロリーは一気に間合いをつめ、ベジータにパンチを打ちこむ。

うで わら  
腕をクロスしてふせいだベジータはニヤリと笑った。

あい て じ ぶん えら  
相手が自分を選んだのだ。

おも ぞん ぶん  
これで思う存分ぶちのめしてやれるというものだ。

こぶし きょ り と  
ブロリーの拳をはじいたベジータはうしろにとんで距離を取ろうとする。

「おおおお！」

か そく く  
けれどブロリーはさらに加速して、いくつもパンチを繰りだしてきた。

け  
それをよけ、ベジータはすかさずブロリーを蹴りあげる。

とお ふ と よ こおり きゅうてい し  
遠くまで吹っ飛ばされたブロリーが、四つんばいになり、氷をけずりながら急停止した。

「はあっ！」

はん どう り よう と  
反動を利用して、ゴムのようにふたたびベジータへと飛びかかる。

こう げき かる ぼう かん ぎ ぬ す  
しかしその攻撃も軽くないで、ベジータは防寒着を脱ぎ捨てた。

「やるじゃないか。ようやく体があたたまってきたぜ！」

おそ  
ベジータのカウンターパンチがブロリーを襲う。

こぶし はん げき こころ ちから うで ふ  
拳をくらいつつ反撃を試みたブロリーは、力まかせに腕を振るった。

かん たん こん ど あし はら  
だがベジータは簡単によけ、今度はベジータの足がブロリーの腹にきまった！

「ぐわっ！」

た あし もと かいてん よこ ばら あし  
のけぞりながらも耐えたブロリーの足元を、ベジータがはらい、そのまま回転して横腹に足をめりこませる。

「うおおおおお!!!」

ふ と お  
すさまじいいきおいで吹っ飛んだブロリーを、ベジータが追う！

め み ひら ぎゃく と  
だが、ブロリーはカッと目を見開くと、逆にベジータにむかって飛んできた。

「オラララ！」

「ぐうああああっ！」

はげ なぐ こう げき はげ ま  
激しい殴りあいになる。ブロリーの攻撃はどんどん激しさを増していた。

じゅうりょう ひょうてき うしな こぶし こおり  
重量のあるパンチをよければ、標的を失ったブロリーの拳は、氷にビシッとつきささるほどだ。

こおり くら ちゅう いっしゆん ま あ ゆ て  
くだけた氷をよけて空中にとんだベジータだったが、ブロリーは一瞬でその間合いをつめ、ベジータの行く手をさえぎった。

「速い！」

うご め  
その動きに、ベジータは目をみはる。

べつ じん へん か  
さっきのブロリーとは、まるで別人のようなスピードの変化だ。

きゅうせいちよう みと  
さすがのベジータも、ブロリーの急成長を認めないわけにはいかなかった。

「はあっ！」

「ぐっ」

はなたれたパンチを腕でガードしつつ、ベジータの口から思わず声が出る。

スピードも体重もじゅうぶんに乗った、いいパンチだ。

「力の使い方を学習しているのか！」

ブロリーは、もしかしたら自分の力をここまで出しきって闘ったことがないのかもしれない。

闘いに慣れてきたいまだからこそ、ベジータの動きを把握して、的確な攻撃ができるようになったようだ。

「はあっ！」

ブロリーの攻撃がするどさを増す！

パンチをふせいだと思ったら、ひざ蹴りでかまえた両腕のすきまをねらわれるのだ。

それをよけ、ふせぎ、ベジータも負けじと攻めに転じる。

まだ少しだけ動きにおくれを取るブロリーが、ふせぎきれない場面は多い。いまがチャンスだ。

「ベジータのヤツも、そうとうきたえたようだな……！」

二人の闘いを見つめているパラガスの額に、あせりの汗が流れる。

「彼らはいろいろな修羅場をくぐっていますからね。それに、まだ慣れていないようですから」

二人の空中戦を見すえながら、フリーザは意味深に口角をあげた。

「ブロリーさんは人間とは闘ったことがないんでしょ」

「私とシミュレーションは……」

「あなた程度の戦闘力じゃ、ほとんど意味がありません」

「……」

さらりと言われたのは、屈辱的な台詞だ。

だが、ブロリーやフリーザとの圧倒的な実力差がわからないほど弱くもない。

うなだれてしまったパラガスに、フリーザは「ご心配なく」と言って、一歩前に出た。

「徐々に慣れてきていますよ」

二人の視線の先では、フリーザの言うとおり、ベジータとブロリーの攻守がほとんど互角になりつつあった。

「はあああっ!!!」

気合いとともにベジータが右パンチを繰り出す！

拳で受けたブロリーの空いた顔面に、ベジータは次の左パンチを打ちこんだ。

が、ブロリーが腕でガード。そしてそのままつきあげるように拳を繰り出す。

下からの攻撃を両手で受け止めたベジータは、そこを支点に、バネのように距離を取る。

そのまま両手を組んでブロリーへと振りおろした！

とっさに腕をクロスさせて防御したブロリーだが、いきおいに押され地面のほうへと吹っ飛んでいく。

「ぐうっ！」

ちゃく ち しゅん かん  
着地した瞬間、ぶわっ！ とすごいオーラがブロリーからはなれた。

かん はつ じ めん け くう ちゅう  
間髪をいれずに地面を蹴って、空中のベジータへとつっこんでいく。

ま う すん ぜん か そく はい ご ふ がん めん きょうりょく うら けん  
待ち受けるベジータの寸前で加速すると、背後にまわり、ハッと振りむいたベジータの顔面に強力な裏拳をくらわせる。





「いいぞ！ ブロリー！」

それを見て興奮したパラガスの声は、ブロリーの耳には届いていない。

「はあああっ！」

「ぐうおおおおっ！」

ベジータとブロリーはたがいに一歩も引かず、空中でガシッと手を組んでにらみあった。

拮抗する力にいらだちはじめたベジータは、よりいっそうの力を込めて、ブロリーを押し。

「！」

次第に金色の光を帯びはじめたベジータの変化に、ブロリーが気づいた。

おそらく本能で危険を察し、ベジータからはなれようとする。

ベジータはつかんだ手をはなさず、ぐっと引きよせた。

「うっとうしいヤツだ……!!」

「ぐわっ！」

ガツッ！ と頭突きをくらわせると同時に、ベジータはブロリーの手をはなす。

返す動きで、ブロリーの顔面に重いパンチをお見舞いすれば、ブロリーの体はゴムまりのように吹っ飛んだ。

背後に見える氷山に激突し、つき抜け、氷をけずりながらようやく止まる。

ブロリーはくやしそうに奥歯をかみしめた。

近くの氷山に降りたつたベジータが冷たく見おろす。

「はあああ!!!」

気合いとともに、金色のオーラがベジータの全身を包みこみ——

発生した衝撃波がブロリーを襲う！

ベジータが超サイヤ人になったのだ。

その衝撃でベジータの足元の氷山がぐだけ散る。

変化に驚いたブロリーだが、すぐににらむような視線をベジータに送り、

「はっ！」

それからいきおいよく地面を蹴って加速した！

さきほどと同じ戦法でベジータの目前までせまり、高速移動で背後を取る。

「ふん」

が、ベジータはうしろの様子を見もせずに、的確な裏拳をブロリーの顔面にお見舞いした。

ブロリーがいきおいよく吹っ飛んでいく。



「なっ……なんだ、あれは！」

その様子<sup>よう す み</sup>を見つめていたパラガスは、驚き<sup>おどろ</sup>に目を見開いた。

あんな強さ<sup>つよ み</sup>は見たことがない。

ベジータは強<sup>つよ</sup>くなった。それは認<sup>みと</sup>める。

だが、まさかこれほどまでとは――

おも<sup>おも</sup>あと<sup>あと</sup>ずさったパラガスを、フリーザはひどく不思議<sup>ふ し ぎ</sup>そうな顔<sup>かお</sup>で振りかえった。

「おや。ブロリーさんはなれないんですか？ 超サイヤ人<sup>スーパー じん</sup>に」

「ス、超……サイヤ人……!? まさか、伝説<sup>でん せつ</sup>の!？」

そんなバカな。あれは単なるおとき話<sup>たん ばなし</sup>のような存在<sup>そん ざい</sup>ではなかったのか。

さも当然<sup>どう ぜん</sup>とばかりに言われた単語<sup>い たん ごと</sup>に、パラガスは言葉<sup>こと ば</sup>を失<sup>うしな</sup>ったのだった。

「ぐうっ！」

フリーザたちが見つめる先で、吹き飛ば<sup>み</sup>されていたブロリーがうなるような叫<sup>さけ</sup>び声<sup>こえ</sup>をあげ、空中<sup>くう ちゅう</sup>で急停止<sup>きゅうてい し</sup>する。

「があああつ!!」

あふれ出る闘志<sup>で とう し</sup>をオーラのように身<sup>み</sup>にまとい、ベジータへとつっこんでいく。

「ふんっ！」

あっさりとよけたベジータが、ブロリーの顔面<sup>がん めん</sup>に蹴<sup>け</sup>りをくらわせる！

もう<sup>もう</sup>じめん<sup>じ めん</sup>げきとつ<sup>げき とつ</sup>と、いきおいのついたブロリーの体<sup>からだ</sup>がバウンドした。

そこへふたたびベジータがせまる！

け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>  
蹴り飛ばし、追いかけてはまた蹴り飛ばす。

め<sup>め</sup>はや<sup>はや</sup>つぎ<sup>つぎ</sup>つぎ<sup>つぎ</sup>こう<sup>こう</sup>げき<sup>げき</sup>  
目にもとまらぬ速さで、次々攻撃をしかけるベジータに、しかしブロリーはあきらめていなかった。

なん<sup>なん</sup>ど<sup>ど</sup>か<sup>か</sup>かん<sup>かん</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>  
何度くらわされても果敢にいどみ、吹っ飛ばされてもくらいつく。

「ちっ！」

しつこいブロリーに舌打<sup>した う</sup>ちをして、ベジータが手<sup>て</sup>のひらをむけた。

ダウン！

きん きょ り<sup>きん きょ り</sup> き だん<sup>き だん</sup> めいちゅう<sup>めいちゅう</sup>  
近距離からはなたれた気弾が命中する！

だが、爆炎<sup>ばく えん</sup>の中からまっすぐ飛びだしてきたブロリーは、すかさずベジータにパンチ<sup>く</sup>を繰りだした。

よけたベジータが、カウンターのパンチをブロリーの顔面<sup>がん めん</sup>へ！

しかしブロリーは、決して視線<sup>けつ し せん</sup>をそらさない。

「な、なんだこいつは！」

ベジータの顔に、わずかなあせりの色が見えはじめた。

適応能力があるとでも言うのか、闘いのセンスがずば抜けている。

この短時間の応戦で、超サイヤ人との闘いにも慣れてきているのがいい証拠だ。

「がああっ！」

ブロリーのパンチが腹にきまり、ベジータを吹っ飛ばす！

「ぐうっ！」

まるでさきほどのブロリーと、立場が逆になったようだ。

氷山に激突したベジータへ、ブロリーの拳がさらにせまる。



「成長のスピードが速い！」

憎々しげにベジータは吐き捨てた。

「はあああ!!」

「ぐおおおおっ！」

氷山の中を、二人は猛スピードで激突しながらくさくさ進んだ。

そうしてとうとう氷山のとっぺんから飛びだすと、フィールドを空中にうつし、目にもとまらぬ速さでたがいの攻防は激化していく。

ドガッ

ズガガガガッ！

バシッ！ ドウン！ ズザアアッ！

「すげえヤツだ！ 素のままで互角に闘いはじめたぞ！」

地上から二人の闘いを見あげる悟空は、思わず両手をにぎりしめながらそう言った。

闘ってみたい、と思う気持ちがふくれあがってきてしまう。

スーパー 超サイヤ人になったベジータは強い。

いままでいっしょに闘ってきた悟空は知っている。

だがいま、ブロリーはそんなベジータを押しているようにすら見えるのだ。

劣勢を察したベジータは、気合い一発、肉薄したブロリーの腹に直接気弾を押しつけた！

爆発させ、そのいきおいで距離を取る。

一瞬ひるんだブロリーだが、ダメージはあまりないようだ。超高速であとを追う。

それをうしろに感じながら、ベジータは精神を集中した。

内面で静かに高まる闘争心と気をあわせ、超サイヤ人のオーラを内に吸収し――

「――ふんっ」

赤く変化した気が、ベジータの全身をおおいだした。

竜巻のようないきおいで、圧縮された気が足元から一気にベジータの全身を駆け抜け、金色だった髪の毛が赤くそまりだす。

スーパー 超サイヤ人ゴッドへの進化だ。

「はあっ！」

「!？」

あつ うず ま あか ふんしゅつ どう き おも うご と  
熱く渦巻く赤いオーを噴出したベジータの闘気に、思わずブロリーは動きを止めた。

「ああ、あ……」

じん かみ ほん のう け  
サイヤ人の『神』としてそこにいるベジータに、本能为気おされたのだ。

くう ちゅう た ど しず て  
おびえたように空中で立ち止まっているブロリーへ、ベジータが静かに手をかざす。

ドンッ

「ぐっ！」

ドンッ、ドンッ、ドンッ！

つづ き だん しゅう げき は ひ  
続けざまにはなたれる気弾の衝撃波は、さきほどの比ではない。

が ん めん かた はら こう げき  
ブロリーは顔面に、肩に、腹に、と攻撃をくらい、どんどんうしろへとさげられる。

ドンッ!!

「ぐうっ！」

さい ご いっ ぱつ きょく げん たか しゅう ちゅう りょく とお しゅう げき は ひょう ざん か ん た ん は  
最後の一発を、極限まで高めた集中力でかろうじてよければ、ブロリーを通りこした衝撃波は、うしろの氷山を簡単に破  
かい  
壊した。

「うおおおっ！」

ちから さ れき ぜん  
力の差は歴然だ。

ほん のう きょう ふ しん いっ き たか ひっ し ぎょう そう  
ブロリーの本能为恐怖心を一気に高め、必死の形相でベジータにせまる！

「ぐっ！ はっ！ はあっ！」

や み くも く こぶし ひょうじょう か  
闇雲に繰りだされるブロリーの拳を、ベジータは表情ひとつ変えずによける。

かん きょう ふ おそ  
そのたびにブロリーは感じたことのない恐怖に襲われた。

ひっ し こう げき  
どれだけ必死に攻撃しても、ゴッドになったベジータにはかすりもしないのだ。

「ぐわああああっ！」

ごえ ちから こ こん しん いち げき く  
おびえたようなり声をあげて、ブロリーはすべての力を込めた渾身の一撃をベジータへと繰りだした！

こぶし が ん めん  
すさまじいきおいの拳がベジータの顔面にせまり——

——パシッ

「ッ!？」

ひょうじょう か かる おと た こぶし う と  
表情をぴくりとも変えないベジータは、軽い音を立ててブロリーの拳を受け止めた。





おびえの色を濃くしたブロリーに、もうなす術はない。

そんなブロリーを、ベジータは冷酷な目でじっと見つめ、右の拳に気を集中させる。

そうしてためた気を、ゆっくりとブロリーにつきだした。

——ダウンッ！

「あぐっ!!!」

まるでスローモーションのような動きの拳がブロリーにあたる。

と、同時に、ブロリーの体は超高速で吹っ飛んだ！

ぶつかった氷山をそのままつらぬき、それでも動きは止まらない。

さらにうしろへ、また氷の山をぶち抜いて、その体は海上へ飛ぶ。

ズシャアアアッ!!

つきでた流氷に激突するブロリー！

その衝撃のすさまじさで、氷の表面には巨大なクレーターがひろがった。

遠目にも劣勢があきらかな勝負のゆくえに、パラガスはその場でくずれるようにひざをついた。

「べ、ベジータが、ここまで腕をあげているとは……」

もう無理だ。勝ち目などない。

スーパーサイヤ人だっとなんでもないのに、ベジータはさらに強いなにかに進化している。

「おや、もう限界ですか？」

「は、はい……」

フリーザに横目でチラリと見おろされても、パラガスはがくりとうつぶしたままだ。

力なく答えるパラガスを真顔で見つめ、フリーザはつまらなそうに踵を返す。

「まあ、いいでしょう。今日のところは引きあげるとしますか」

「はい……」

下をむいたまま、フリーザのあとに続いたパラガスは、ふと、ベジータにやられたままの息子の異様な気配を察して振りむいた。

「うぐぐぐ……」

クレーターの中のブロリーは、なにかをこらえるように激しくふるえだしている。

「ぐぐ、ぐぐぐ……」

「なんだ？」

ゴッドの赤いオーラをまとったベジータも、その異変に気づく。

そら　うえ　み　かお  
空の上からブロリーを見おろし、顔をしかめる。

「ぐぐぐ……」

パラガスはいやな予感<sup>よ　かん</sup>がした。

「い、いかん……！　ブロリー!!　今日<sup>きょう</sup>はここまでだ！　やめろ！　もどってこい!!」

パラガスの必死<sup>ひっ　し</sup>の叫び<sup>さけ</sup>は、激しくふるえるブロリーには届<sup>はげ</sup>かない。

なにが起<sup>お</sup>きているのかわからないフリーザが首<sup>くび</sup>をかしげた。

「ぐ、ぐぐぐうっ！」

苦し<sup>くる</sup>そうにうなるブロリーの全身<sup>ぜん　しん</sup>から、異常<sup>い　じょう</sup>なまでの気<sup>き</sup>が放出<sup>ほう　しゅつ</sup>されはじめた。

まるで、いままで眠<sup>ねむ</sup>っていた力<sup>ちから</sup>がおさえられないかのようだ。

放出<sup>ほう　しゅつ</sup>された気<sup>き</sup>で、ブロリーの周辺<sup>しゅう　へん</sup>の流氷<sup>りゅう　ひょう</sup>は破壊<sup>は　かい</sup>され、あっというまに蒸発<sup>じょう　はつ</sup>する。

「くっ！」

ブロリーの暴走<sup>ぼう　そう</sup>が始<sup>はじ</sup>まったのが、パラガスにはわかった。

だがいまならまだ間<sup>ま</sup>にあうはずだ。

パラガスは、あせりながら腰<sup>こし</sup>のポシェット<sup>て　い</sup>に手<sup>て</sup>を入れて――

「なっ、ない！　リモコンがない！　そんな！」

ずっとここに入れていたはずのリモコンがなくなっているではないか。

そんなバカな。どこかに落<sup>お</sup>としたとでもいうのか。

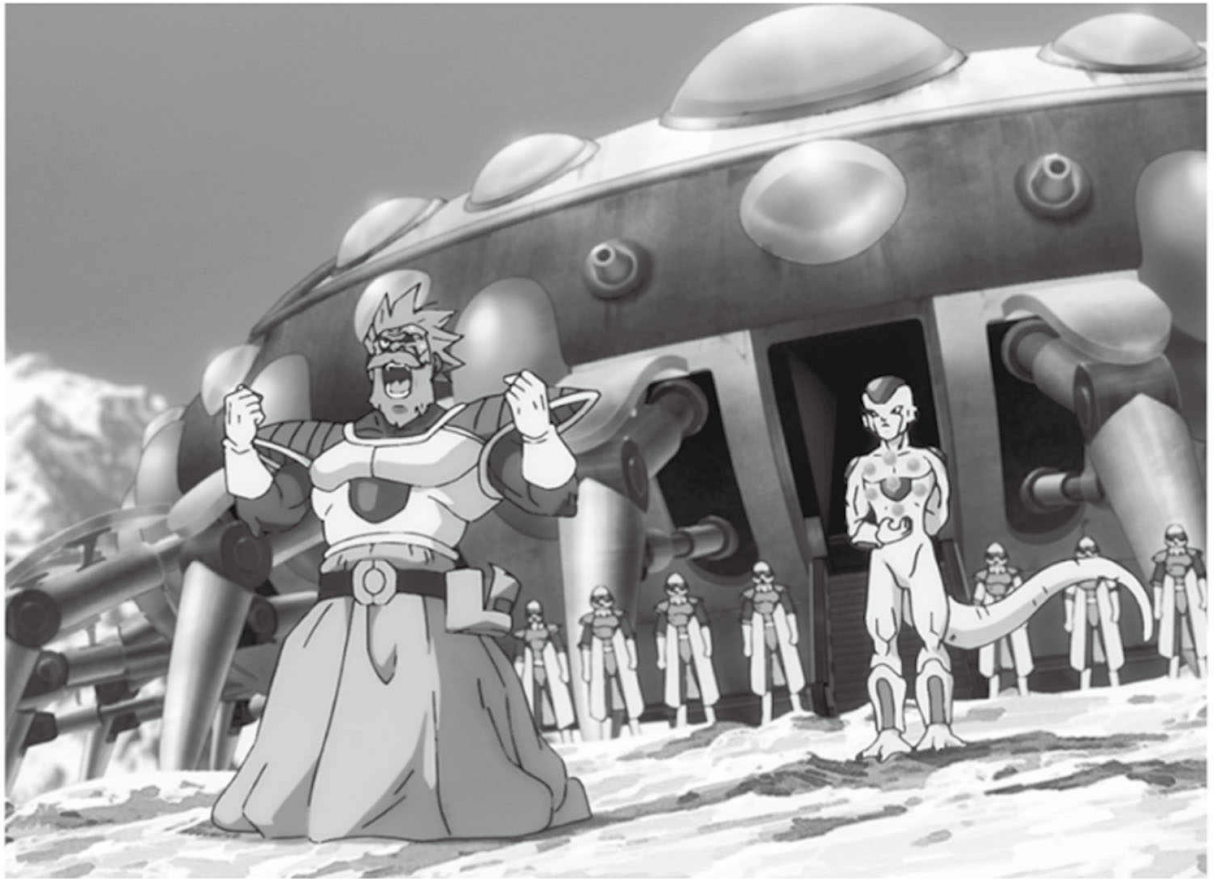
チライにスられたなどとは夢<sup>ゆめ</sup>にも思<sup>おも</sup>っていないパラガスは、絶望<sup>ぜつ　ぼう</sup>に足元<sup>あし　もと</sup>からくずれ落<sup>お</sup>ちた。

あれがなければ、ブロリーを止<sup>と</sup>めることはもう……

「ブロリー！　やめろと言<sup>い</sup>っているんだ！」

「ぐぐぐ……！」

「俺<sup>おれ</sup>の言<sup>い</sup>うことが聞<sup>き</sup>けないのか――つ!!」



「！」

死にものぐるいで<sup>さけ</sup>叫ぶ<sup>こえ</sup>パラガスの<sup>いっしゅん</sup>声が、一瞬<sup>みみ</sup>プロリーの<sup>とど</sup>耳に届く。

ハッとしたように<sup>かお</sup>顔をあげたそのひとみは、<sup>ふ</sup>不安定<sup>あんてい</sup>にふるえている。



その瞬間。

「くだらん」

ベジータの手が、無情にもブロリーにむけてかまえられる。



「！ や、やめろ、ベジータ——!!」

ふた り よう す み ご ぐう さけ ま  
二人の様子を見つめていた悟空があわてて叫ぶが、間にあわない。

ドンッ!!!

はなたれた気弾が、まっすぐブロリーに直撃した。

あ なみ あし ば りゅうひょう  
荒れる波も、足場になっていた流氷もなにもかもが、  
いっしゆん ま しろ ひかり なか つつ  
一瞬にして真っ白な光の中に包まれる。







しょうげき  
衝撃とともにブロリーが海中に消えた。

「……」

と  
とっさに飛びだしてきた悟空は、じっと海面を見つめる。

「！」

かいめん した あば  
すると海面が、下からうねるように暴れだした！

かいめん み へん か き  
ブロリーのしずんだ海面を見おろしていたベジータも、その変化に気づいた。

あば なみ うず かいじょう りゅうひょう ま  
暴れる波が渦になり、海上の流水を巻きこんでいく。

お  
いったいなにが起こっているのか。

うず ちゅうしん おと た きゅう ひか  
渦の中心がボコリと音を立てて急にしずみ、カッとまばゆく光った。

き うず ちゅうしん た  
気づけばブロリーが渦の中心に立っている。

「うおおおお———!!」

さけ ごえ はっせい しょうげき は くう ちゅう ご くう おそ  
叫び声とともにブロリーから発生した衝撃波が、空中にいる悟空たちを襲う。

すがた ご くう ひたい あせ なが  
その姿に、悟空の額から汗が流れた。

「ウソだろ……」

「……な……」

き お おどろ ひょうじょう み  
ベジータもブロリーのはなつ気に押されながら、驚いた表情で見つめている。

「おおおお!!!」

さけ せん とうりょく き  
叫ぶブロリーの戦闘力は、おそろしいほどにあがっていて、まがまがしい気がはなたれている。



「……見たことあるか、あんなサイヤ人」

呆然としている悟空に、ベジータが振りむく。

「おい、仙豆持ってきているか、カカロット！」

「持ってきてねえ！」

「これは遊んでいる場合じゃないな……！」

いつも余裕を見せたがるベジータがそう言ってしまうほど、ブロリーの変化はすさまじい。

「ううう……！」

うめきながら悟空たちの高さまで浮上してきたブロリーが、ぴたりと止まる。

「うおおおお!!!」

急に顔をあげたブロリーは、雄叫びと同時に口から巨大なエネルギー波をはなってきた！

「わわっ！」

「なっ！」

とつぜんむかってきたエネルギー波を、悟空はなんとかギリギリでよけた。

うしろの氷山をいくつもつらぬき、空にむかってそれていったかと思うと、空中で大爆発が起こる。

「げげっ！ あんなのが地面にあたったら……」

ここいら一帯、地形が変わっていたことはまちがいない。

それを見たベジータは、ギリッと奥歯をかんた。

「はあ！」

ゴッドのオーラをみなぎらせると、ブロリーにむかい一直線に飛んでいく。

ボグッ！

ブンツとすさまじい音を立てた拳がブロリーの顔面にクリーンヒット！

けれどブロリーは微動だにしなかった。

まさかの反応に一瞬遅れたベジータへ、ギリと視線をやったブロリーのパンチが襲う。

寸前で腕を前に出し、防御するベジータ！

「くっ、——がああっ！」

だが、まるでゴム風船のようにベジータは遠くまで吹っ飛ばされてしまった。

「ベジータ！」

二人のあとを悟空が追う。

ブンツ！ ズガガッ！

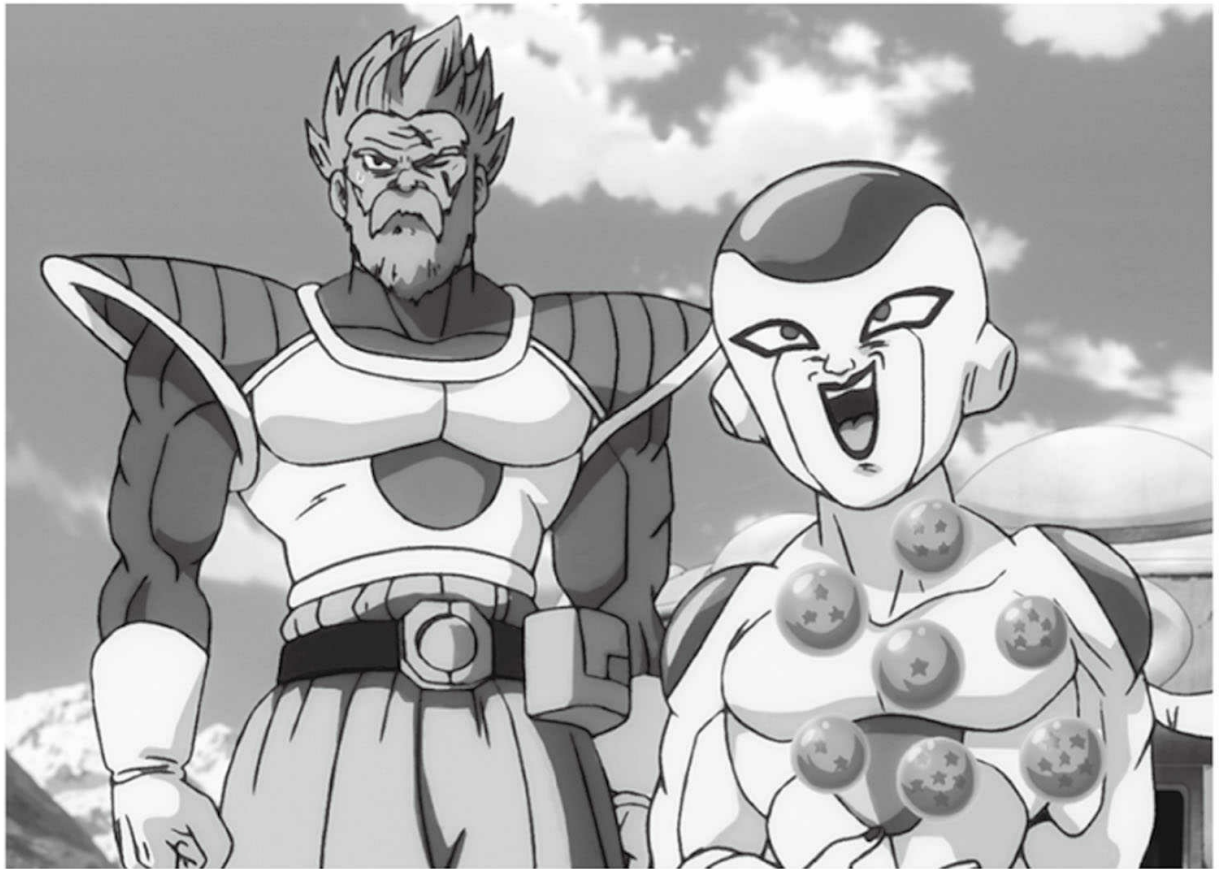
ゴス、バキ、ドカッ！

ブロリーの攻撃はかろうじてベジータにはまだ届いていない。けれど、あたっているはずのベジータの攻撃は、まるで効果がな  
いようだった。

それどころか、素早く繰り返されるブロリーの攻撃は、どんどん速くなっていた。

「なんですかあれは！」

ベジータにせまろうとするブロリーの変化に、フリーザは興奮しながら叫んだ。



「あ、あれは……サイヤ人<sup>じん おお ざる</sup>が大猿<sup>うご</sup>になったときのパワーを、動きのにぶい大猿<sup>おお ざる</sup>になることなく、人間<sup>にん げん</sup>のままだせるようにしたらしいのですが……」

サイヤ人<sup>じん</sup>らしい野蛮<sup>や ばん</sup>で豪快<sup>ごう かい</sup>ですばらしいパワーだ。

だが、パラガスはフリーザの視線<sup>し せん</sup>から逃げる<sup>に</sup>ように目<sup>め</sup>をそらした。

「なにか問題<sup>もん だい</sup>でも？」

「そ、それが……自分<sup>じ ぶん</sup>でも……コントロールがきかないようで……」

我<sup>われ</sup>をわす<sup>わす</sup>れて暴<sup>あば</sup>れるブロリーに、フリーザは「ほう」と目<sup>め</sup>を細<sup>ほそ</sup>めた。

「ぐわっ！」

おも<sup>おも</sup>ふ<sup>ふ</sup>かぶ<sup>かぶ</sup>ったブロリー<sup>こぶし</sup>の拳<sup>こぶし</sup>が、とうとうベジータをとらえた。

ガード<sup>う え</sup>の上<sup>う え</sup>から激<sup>はげ</sup>しく吹<sup>ふ</sup>き飛<sup>と</sup>ばされたベジータは、なんとか受<sup>う</sup>け身<sup>み</sup>を取<sup>と</sup>って着<sup>ちやく</sup>地<sup>ち</sup>した。

ブロリーがふたたびねらいをさだめる。

そのとき。

「おい！ おまえ！」

「！」

いままさに飛<sup>と</sup>びかからんとしていたブロリーは、自分<sup>じ ぶん</sup>にむけられる気配<sup>け はい</sup>に振<sup>ふ</sup>りかえった。

ご<sup>ご</sup>う<sup>う</sup> ぼう<sup>ぼう</sup> かん<sup>かん</sup> よう<sup>よう</sup>のコート<sup>ぬ す</sup>を脱<sup>ぬ</sup>ぎ捨<sup>す</sup>て、その場<sup>ば</sup>で軽<sup>かる</sup>く跳<sup>ちよう</sup>躍<sup>やく</sup>をしている。

「そろそろオラとやろうぜ」





「ぐうう……」

かまえる悟空は楽しそうに、集中力を高めていく。それをにらむブロリーも、完全にベジータから悟空へと意識を変えた。

うめき声とともに、ぐっと力を入れた筋肉が盛り上がり、腰の毛皮がふわりとなびく。

「ぐおおおおっ！」

叫ぶブロリーの体から緑色のオーラが噴出する！

その拍子に、首についていた金属の輪が、盛りあがった筋肉によって破壊された。

「ふううん……」

そんなブロリーに、悟空は不敵な表情を浮かべると、左腕を前にかまえ、軸足に体重を移動させた。反応したブロリーも、真逆の動きで前のめりに体勢をかまえ――

「ぬううううう！」

「はあああああつ！」

ドン！ と二人同時に地面を蹴る。

繰りだされた拳は空中で激突し、わずかに悟空がうしろに押された。

けれどもすぐに立てなおす。

「はあああ!!!」

「があああ!!」

たがいにまわりこみながら、蹴りとパンチで反撃しあい、受けては返すを繰り返す。

激しい攻防の一瞬のすきをついて、ブロリーの蹴りが悟空を襲う！

「ぐわああ！」

両腕で受けた悟空は、それでもうしろへ吹っ飛ばされた。

空中で体勢を立てなおし、悟空は両手首をぐっとあわせる。

「かあめえはあめえ……」

そのままググッと腰に引き、気を一点に集中させて――

「波あああああつ!!」

凝縮したエネルギーを一気にはなつ！

「！」

ブロリーはギリギリでかめはめ波をよけ、悟空の背後へ超高速でまわりこむ！

悟空も気づき、振りかえる。そしてすかさずエネルギー弾を連続ではなつた。

「おりや、おりや、おりや、おりやああつ！」

「がああつ！」

それもギリギリでかわしたブロリーが、最後の玉を腕ではじいた！

返す動きで、今度はブロリーがエネルギー弾を悟空にはなつた。

はじく悟空のすきをつき、ブロリーは急速に接近する。

気づいたときには、ブロリーのぶあつい拳が悟空の顔面に食いこんでいた。

「ぐあああああつ!!」

吹<sup>ふ</sup>っ飛<sup>と</sup>ばされた体<sup>からだ</sup>は氷<sup>ひょう</sup>壁<sup>へき</sup>に激<sup>げき</sup>突<sup>とつ</sup>し、奥<sup>おく</sup>へ奥<sup>おく</sup>へとめりこんでいく。

ブロリーは追<sup>つい</sup>撃<sup>げき</sup>の手<sup>て</sup>を休<sup>やす</sup>めず、悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>にさらなるパンチ<sup>く</sup>を繰<sup>く</sup>りだした！

「ふんっ！」

「——ぐああっ！」

顔<sup>がん</sup>面<sup>めん</sup>をガードした悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>のボティ<sup>てい</sup>へ、ブロリーのアッパ<sup>あ</sup>ーがきまる！

いきおいに押<sup>お</sup>され悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>は上<sup>じょう</sup>空<sup>くう</sup>へと押<sup>お</sup>しあげられた。

そのうしろでブロリーのオーラ<sup>ばく</sup>が爆<sup>はく</sup>発<sup>はつ</sup>する。

まとうオーラ<sup>ふん</sup>は、まるで噴<sup>ふん</sup>火<sup>か</sup>のようだ。

「ありやああっ！」



それをながめる<sup>ご ぐう</sup>悟空は、ふっと<sup>わら</sup>笑った。相手は、めちゃめちゃ<sup>あい て つよ</sup>強い。

悟空はグンツと<sup>ご ぐう き たか</sup>気を高める。

見るまに<sup>み きんいろ</sup>金色のオー<sup>ぜん しん</sup>が全身をおおい、黒<sup>くろ</sup>かった髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>も金髪<sup>きん ぱつ</sup>に変わり逆<sup>か</sup>立<sup>さか</sup>った。

悟空が<sup>ご ぐう スーパー</sup>超サイヤ人<sup>じん</sup>になった姿<sup>すがた</sup>だ。

「はあああああつ!!」

「ぬうううううつ!!!」

山頂<sup>さん ちよう</sup>から距離<sup>きょ り</sup>をつめてくるブロー<sup>ご ぐう</sup>リーに、悟空も地上<sup>ち じよう</sup>から一<sup>いっ</sup>気<sup>き</sup>につこむ!

クロスする一瞬<sup>いっ しゆん</sup>でたがいの攻撃<sup>こう げき</sup>が炸裂<sup>さく れつ</sup>する!

ズガアアアッ!!

ブロー<sup>ごう だん</sup>リーのはなった光弾<sup>ご ぐう</sup>を悟空は腕<sup>うで</sup>一本<sup>いっ ぽん</sup>ではじいた。そのいきおいで力<sup>ちから</sup>を乗<sup>の</sup>せたパンチ<sup>あ</sup>を浴<sup>あ</sup>びせる。けれどブロー<sup>ご ぐう</sup>リーは悟空<sup>ご ぐう</sup>の体<sup>からだ</sup>ごと両手<sup>りやう て</sup>ではじいた!

「だああああ!」

ブロー<sup>こう げき</sup>リーの攻撃<sup>こう げき</sup>!

振りかぶったブロー<sup>ふ</sup>リーは、高速移動<sup>こう そく い どう</sup>で消えた悟空<sup>き</sup>に動き<sup>ご ぐう</sup>を止<sup>と</sup>める。

見失<sup>み うしな</sup>った気配<sup>け はい</sup>を背後<sup>はい ご</sup>に感じて振りむけば、かめはめ波<sup>かん ふ</sup>のかまえてニヤリ<sup>は</sup>と笑<sup>わら</sup>う悟空<sup>ご ぐう</sup>の姿<sup>すがた</sup>が!

「はあああつ!」

けれどブロー<sup>いっ しゆん</sup>リーは一瞬<sup>こう そく い どう</sup>で高速移動<sup>こう げき</sup>をマスターし、攻撃<sup>こう げき</sup>をかわす。

一進<sup>いっ しん</sup>一退<sup>いっ たい</sup>の攻撃<sup>こう げき</sup>がしばらく続<sup>つづ</sup>き——そして、ブロー<sup>ご ぐう</sup>リーのパンチ<sup>かお</sup>が悟空<sup>はい</sup>の顔<sup>かお</sup>に入った!

「ぐわっ!」

大き<sup>おお</sup>くうしろに吹<sup>ふ</sup>っ飛<sup>と</sup>ばされた悟空<sup>ご ぐう</sup>へ、すかさずブロー<sup>こぶし</sup>リーの拳<sup>こぶし</sup>がせまる。それをかわして反撃<sup>はん げき</sup>に出<sup>で</sup>た悟空<sup>ご ぐう</sup>をよけて、ブロー<sup>こぶし</sup>リーはエネ<sup>こぶし</sup>ルギー<sup>ご ぐう</sup>をためた拳<sup>はら</sup>を悟空<sup>お</sup>の腹<sup>はら</sup>に押<sup>お</sup>しつける。

ドンッ!!!

「あああああああ!!!」

宙高<sup>ちゆう たか</sup>く悟空<sup>ご ぐう</sup>の体<sup>からだ</sup>が吹<sup>ふ</sup>っ飛<sup>と</sup>ばされた!

その背<sup>せ</sup>に超高速移動<sup>ちよう こう そく い どう</sup>したブロー<sup>りやう て</sup>リーの両手<sup>ふ</sup>が振りおろされて、悟空<sup>ご ぐう</sup>は地面<sup>じ めん</sup>にたたき落<sup>お</sup>とされる。

受け身<sup>う み</sup>で激突<sup>げき とつ</sup>に耐<sup>た</sup>えた悟空<sup>ご ぐう</sup>は、すかさず空<sup>そら</sup>から降<sup>ふ</sup>ってきたブロー<sup>け</sup>リーの蹴<sup>ぎゃく</sup>りを、逆<sup>さか</sup>に逆<sup>さか</sup>立ち<sup>だ</sup>で蹴<sup>け</sup>り飛<sup>と</sup>ばす!

「ありやああ!」

「ぬうあつ!!」

一瞬<sup>いっ しゆん</sup>の静寂<sup>せい じゃく</sup>。

二人<sup>ふた り</sup>はたがいに距離<sup>きょ り</sup>を取<sup>と</sup>り、するどい視線<sup>し せん</sup>でにらみあった。

「へへへ……」

いまはどちらかと言えば劣勢の悟空は、それでもどこか楽しくなってしまった。

気弾も高速移動も、悟空が手の内を見せたら、ブロリーはすぐに対応した。きつともっと強くなる。ピンチであるはずの状況が、悟空にはどうにも楽しくてしかたがなくなってしまう。

（これがサイヤ人の血ってやつだなあ……）

次にブロリーはどうくるだろうか。

出方を見すえる悟空の目が、ブロリーの足が地面を蹴る瞬間をとらえた。

「うおおおおっ!!!」

氷の煙をしたがえてつつこんでくるブロリーにむかいながら、悟空は冷静に全身の気を高める。悟空の髪が赤に変わった。取りこんだ神の気が、体の内に満ちたのだ。一度閉じたまぶたをフツとあげれば、悟空のひとみも赤くそまっていた。

スーパーサイヤ人ゴッドへの変化だ。

こうなれば、ふたたび悟空の強さがブロリーをあっというまに上まわる！

「うおおお！　ぐああああっ！」

がむしゃらに打ちおろされる拳を、悟空はスローモーションのような動きでいなす。

「おい、落ち着け！」

呼びかけた悟空へ、ブロリーは雄叫びをあげた。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

ビリビリと体をふるわせる大声は、まるで子供の泣き声のようでもある。

悟空はふたたびすごい迫力でせまってくるブロリーに、ためたオーラをドンッ！　とぶつけた。

「ぐうっ……!!　ぬっ！　ぐうううっ!!」

圧倒的なゴッドの気をはなつことで、ブロリーを一時的に金縛りにあわせたのだ。

「オラたちはここで……この地球で平和に暮らしている……」

「ぬうううっ」

「まあいろいろ、あったけどな……」

口角をあげる悟空の脳裏には、いままで出会ったたくさんの強敵との闘いが思い出されていた。



ピッコロ、ラディッツ、そしてベジータ——。

フリーザやセルもいた。魔人<sup>まじん</sup>ブウの強<sup>つよ</sup>さはすさまじかった。

「ぬあああつ！」

そしていま、目の前<sup>め まえ</sup>にいるのはブロリーだ。

とてつもない強敵<sup>きょうてき</sup>が、また悟空<sup>ごくう</sup>の前<sup>まえ</sup>にあらわれたのだ。

ブロリーは激<sup>はげ</sup>しく吠<sup>ほ</sup>え続<sup>つづ</sup>けている。

体<sup>からだ</sup>の自由<sup>じ ゆう</sup>をうばわれたことにいらだちを感じ<sup>かん</sup>ているようだ。

悟空<sup>ごくう</sup>は敵意<sup>てき い</sup>がないと示<sup>しめ</sup>すかのように、両手<sup>りょう て</sup>をひろげてみせた。

「とにかくおめえは悪いヤツじゃねえ……オラにはわかるんだ」

ニツと笑<sup>わら</sup>いかけられて、ブロリーの中<sup>なか</sup>でなにかが動<sup>うご</sup>いた。

「ぐ……ああ、あ……」

「こんなことはやめろ！ 悪いヤツらの言<sup>わる</sup>うことなんて聞<sup>き</sup>くこたあねえぞ！」

ブロリーは、一瞬<sup>いっ しゆん</sup>ハツとしたような表<sup>ひょうじよう</sup>情<sup>み</sup>を見せる。





「……ぐうう……」

けれど、おさえようのない<sup>げきじょう</sup>激情が<sup>なか</sup>ブロリーの<sup>あ</sup>中に吹き荒れた。

「くっ！」

気づいた<sup>き</sup>悟空が、<sup>ご</sup>オーラの<sup>ちから</sup>力を<sup>つよ</sup>強める。

それがかえって<sup>とう</sup>ブロリーの<sup>そう</sup>闘争心に<sup>ひ</sup>火をつけたようだった。

「……があああああああっ!!!」

<sup>お</sup>雄叫びを<sup>たけ</sup>あげ、<sup>ご</sup>悟空の<sup>こう</sup>オーラの<sup>そく</sup>拘束を<sup>と</sup>解く！

「はあっ！」

そして、今度は逆に<sup>こん</sup>悟空の<sup>ど</sup>足元を<sup>ぎゃく</sup>自分の<sup>ご</sup>オーラで<sup>あし</sup>捕らえた。<sup>もと</sup>

「むっ！」

さすがに<sup>おどろ</sup>驚く<sup>ご</sup>悟空の<sup>がん</sup>顔面に、<sup>めん</sup>ブロリーの<sup>こぶし</sup>拳が<sup>めり</sup>めりこむ。

それでもまだ<sup>ご</sup>悟空の<sup>ちから</sup>力が<sup>うえ</sup>上だ。

ブロリーの<sup>こぶし</sup>拳をそのまま<sup>ほお</sup>頬で<sup>お</sup>押しさえし、<sup>ひだり</sup>左手で<sup>みぎ</sup>ブロリーの<sup>みぎ</sup>右手をつかむ。そして一本<sup>いっ</sup>背負いの<sup>ほん</sup>要領で、<sup>ぜ</sup>悟空は<sup>ようりょう</sup>ブロリーを<sup>ご</sup>地面に<sup>じ</sup>たたきつけた！<sup>めん</sup>

<sup>だい</sup>大<sup>げき</sup>激突の<sup>とき</sup>いきおいで<sup>こおり</sup>氷の<sup>だい</sup>大地に<sup>ち</sup>巨大な<sup>きょだい</sup>ヒビが<sup>はい</sup>入る！



「うわわわわ！」

「まあ。あらあらあら」

<sup>じ</sup>地盤の<sup>ばん</sup>変動をもたらすほどの<sup>へん</sup>激しさに、<sup>と</sup>遠目で<sup>め</sup>様子を見ていた<sup>ようす</sup>ブルマが<sup>み</sup>ぐらつき、<sup>よこ</sup>とっさに<sup>ささ</sup>横で<sup>ささ</sup>ベジータが<sup>ささ</sup>支える。ウイスは、<sup>かれ</sup>彼らを楽しそうに<sup>たの</sup>み<sup>み</sup>ているだけだ。

「ひゃ、あああ……！<sup>さま</sup>フリーザ様！<sup>すこ</sup>少しはなれていいですかあ！」

<sup>う</sup>宇宙船の<sup>ちゅうせん</sup>外で<sup>そと</sup>見ていた<sup>み</sup>キコノは<sup>こえ</sup>フリーザに<sup>こえ</sup>声をかける。

「そのほうがよさそうですね」

ちらりとそちらを見た<sup>み</sup>フリーザは、<sup>ねん</sup>念力で<sup>りき</sup>ドラゴンボールを<sup>ねん</sup>キコノにわたした。

「ドラゴンボール、たしかにお預かりしました!!」

<sup>し</sup>ハッチが<sup>う</sup>閉まり、<sup>ちゅうせん</sup>宇宙船はその<sup>ば</sup>場をはなれた。

「さて。これで<sup>こころ</sup>心置きなく、<sup>お</sup>あなたの<sup>むすこ</sup>息子の<sup>かつ</sup>活躍が<sup>やく</sup>見れますね<sup>み</sup>」

<sup>ち</sup>地上にの<sup>じょう</sup>こされ<sup>ふ</sup>不安げな<sup>あん</sup>パラガスに、<sup>たの</sup>フリーザは<sup>い</sup>楽しそうに<sup>い</sup>言った。

チライは窓からプロリーを見てつぶやいた。

「あ、あそこまでスゴかったんだ、あいつ……」

「だが、ありゃ、まともじゃないぞ」

窓枠に手をつくチライの横で、レモは表情を曇らせる。

「ああ。あのオヤジのせいだよ……！」

チライは怒りに肩をふるわせた。

「おとなしいプロリーを強引に自分の思いどおりの戦士に育てた結果だよ……！」

食堂で見たおびえるプロリーと、リモコンを掲げてニヤリといやな笑いを浮かべるパラガスの姿を思い出せば、どういふ育てられ方をしてきたかなんて想像は簡単だ。

「それが、キレたのか……」

「なんてかわいそうなヤツだ……」

二人の見おろす窓の下で、プロリーの苦しげな雄叫びがひびきわたっていた。





「がああ！　ぐあああっ!!」

ブロリーは打ちつけられた体<sup>からだ</sup>を起こし、ふたたび悟空<sup>ごくう</sup>にむかってきた！

迎<sup>むか</sup>える悟空<sup>ごくう</sup>も一<sup>いっ</sup>気に間<sup>ま</sup>合いをつめ、二<sup>ふた</sup>人は急<sup>きゅう</sup>速<sup>そく</sup>に接<sup>せつ</sup>近<sup>きん</sup>した。

すれちがいざまに激<sup>げき</sup>突<sup>とつ</sup>し、地<sup>じ</sup>面<sup>めん</sup>が衝<sup>しょう</sup>撃<sup>げき</sup>に巻<sup>ま</sup>きあがる。

ブロリーのパンチ<sup>ひだりて</sup>を左<sup>う</sup>手<sup>て</sup>で受<sup>う</sup>けて、悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>はふところに入<sup>はい</sup>りこんだ。

「だだだだだっ!!」

「ぐうう！」

「だああ!!」

連<sup>れん</sup>打<sup>だ</sup>をみ<sup>み</sup>舞<sup>ま</sup>いすればブロリー<sup>かた</sup>の肩<sup>すこ</sup>が少<sup>すこ</sup>しうしろにさがる。

だが、ダメージはあまりないようだ。

お返<sup>かえ</sup>しとばかりに強<sup>きょう</sup>力<sup>りき</sup>なパンチ<sup>おそ</sup>に襲<sup>おそ</sup>われて、悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>の顔<sup>かお</sup>からゴッ<sup>ご</sup>ドのおだやかさがくずれはじめた。

ボグッ！

「うがあっ！」

悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>の顔<sup>かお</sup>にブロリー<sup>こぶし</sup>の拳<sup>はい</sup>がずしりと入<sup>はい</sup>る！

体<sup>からだ</sup>を折<sup>お</sup>り曲<sup>ま</sup>げる悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>の意<sup>い</sup>識<sup>しき</sup>が遠<sup>とお</sup>くなるほどの衝<sup>しょう</sup>撃<sup>げき</sup>だ。

ブロリーは攻<sup>こう</sup>撃<sup>げき</sup>の手<sup>て</sup>をゆるめることなく、悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>をつかむと空<sup>そら</sup>高<sup>たか</sup>く投<sup>な</sup>げ飛<sup>と</sup>ばした。

地<sup>じ</sup>面<sup>めん</sup>へ落<sup>らっ</sup>下<sup>か</sup>しうめく悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>を、振<sup>ふ</sup>りあ<sup>あ</sup>げた足<sup>あし</sup>で踏<sup>ふ</sup>み抜<sup>ぬ</sup>こうとする！



ころ 転がるようによけた ころ 悟空 お 追いかけて、ブロリーは なんと ふ 何度も 踏みつぶそうと 足 を 繰り返す。

かん いっ ぱつ 間一髪でよけた悟空は、手にためた 気 を ブロリーに 打ちこもうと つきだした。しかしブロリーは、それを 拳 ごとつかんでにぎりつぶしてしまった！

そしてすさまじいパワーにまかせて 悟空 の 足 を 引 つかむと、地面 に たたきつける。

「ぎゃあああ!!」

あまりの 衝撃 に、悟空 が 叫ぶ。

ブロリーは 足 を つかんだまま、何度も 何度も 悟空 を 地面 に 打ちつける。

「ぐわああ！」

はん げき 反撃するまも 与えずに、ブロリーは 今度は 悟空 の 頭 を つかみ、氷壁 に めりこませたまま 走りだした。





「がががががっ！」

抵抗ていこうもできない悟空ごくうを、あきたおもちゃのように放り投げた。

悟空ごくうはそのまま落下らっかし、ズシャリと地面じめんに激突げきとつする。

「ぐ、あ……がああ……があああああああ!!!」

ボロボロの姿すがたで倒れたまま動けない悟空ごくうの横よこで、雄叫おたけびをあげるブロリーひょうじょうの表情けものは、まるで獣のようだった。

咆哮ほうこうする息子むすこの姿すがたに、パラガスはブルブルと体からだをふるわせる。

「あああ……このままでは、私はブロリーわたしに殺ころされてしまう……」

頭あたまをかかえてひざをついたパラガスの脳裏のうりには、復讐ふくしゅうという文字もじが浮かぶ。

電気でんきでブロリーをコントロールしてきたが、いまはそのリモコンがない。

「あああ……終わりだ……」

フリーザは情けない声こえでふるえるパラガスをさげすむように見おろして、ブロリーへと視線しせんをもどした。そのそばには、いまだかつて見たこともないくらいボロボロの悟空ごくうがいる。

「おやおや。このフリーザ様さまの出番でばんがありませんねえ……」

雄叫おたけびをあげ続けるブロリーを、目を細めて見つめながら、フリーザは楽しそうに薄く笑ったのだった。





そのころ、氷の大<sup>こおり</sup>陸<sup>たいりく</sup>から遠<sup>とお</sup>くはなれた地<sup>ち</sup>で、ピッコロは異<sup>い</sup>変<sup>へん</sup>を察<sup>さつ</sup>していた。

強<sup>きやうだい</sup>大な気<sup>き</sup>がぶつかりあ<sup>みだ</sup>い、乱<sup>みだ</sup>れている。

おだやかな山<sup>やま</sup>の自然<sup>しぜん</sup>をゆるがすような気配<sup>けはい</sup>のゆくえを探<sup>さぐ</sup>っていたピッコロは、そこに悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>の気<sup>き</sup>を見<sup>み</sup>つけた。

『……ん、——孫<sup>そん</sup>!!』

悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>の意<sup>い</sup>識<sup>しき</sup>へと呼<sup>よ</sup>びかけろ。

「!？」

頭<sup>あたま</sup>のなかに直<sup>ちよく</sup>接<sup>せつ</sup>ひびいたピッコロの声<sup>こえ</sup>で、悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>は意<sup>い</sup>識<sup>しき</sup>をと<sup>り</sup>もどした。

『なにがあ<sup>き</sup>ったんだ。この気<sup>き</sup>はフリーザじゃないな……』

『……あ、ああ、まあな』

『と<sup>と</sup>りこみ中<sup>ちゆう</sup>のようだな』

息<sup>いき</sup>も絶<sup>た</sup>え絶<sup>だ</sup>えな悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>の声<sup>こえ</sup>に、ピッコロはごくりと息<sup>いき</sup>をのんだ。

『そういう、こと』

テレパシーで会<sup>かい</sup>話<sup>わ</sup>をしな<sup>が</sup>ら、悟<sup>ご</sup>空<sup>くう</sup>は体<sup>からだ</sup>をどうにか起<sup>お</sup>きあ<sup>が</sup>らせる。

『と<sup>き</sup>んでもない気<sup>き</sup>だ。……俺<sup>おれ</sup>が行<sup>い</sup>ってもかえ<sup>かえ</sup>って邪<sup>じゃ</sup>魔<sup>ま</sup>か……』

敵<sup>てき</sup>の力<sup>りきりよう</sup>量<sup>せいかく</sup>を正<sup>お</sup>確<sup>かく</sup>に推<sup>お</sup>しはかり、ピッコロがくやしそうにうめく。



こ ぐ かんが かた  
悟空はなにかを考えるように、語りかけた。

『そのまま待機しててくれ——やばくなったらそっちに瞬間移動する』

お たけ つづ ご ぐ き うご と  
雄叫びをあげ続けていたブロリーが、悟空に気づき動きを止める。

『おまえがそんなことを言うなんて、そうとうな相手だな』

『へへへ……じゃあな！』

ピッコロとの会話を切りあげ、悟空はボロボロの道着を破り捨てた。

こん ど さい こう たたか こころ  
今度は最高のパワーで闘うと心にきめる。

「ぬうううう、あああああああああ!!!!」

ちから こ いっ き かい ほう ご ぐ からだ し だい あか ふ  
力を込めて、一気にパワーを解放した悟空の体から、次第に赤いオーラが噴きだしはじめた。

「ぬううりゃあああああああ!!!!」

きょうだい ご ぐ ぜん しん ふん しゅつ こおり と  
強大なオーラが悟空の全身から噴出し、あたりの氷を溶かしていく。

「うおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

き りょく さけ ご ぐ  
気力をふりしぼり、叫ぶ悟空！

きょくげん き たか ご ぐ あか がみ さか だ じょ じょ あお  
極限まで気を高めた悟空の赤髪が逆立ち、徐々に青くいろどられはじめた。

スーパー じん かみ スーパー じん こ スーパー じん スーパー じん  
超サイヤ人の神ともいえる超サイヤ人ゴッド、——そしてついに、それを超えた超サイヤ人ゴッド超サイヤ人になったのだ！



「……」

見つめていたブローリーの顔に、喜びの表情が浮かぶ。

「ふうう……」

いままでにない神らしい憤怒の表情となった悟空が、ダンッと地面を蹴った！

あっという間に距離をつめたブローリーと組みあうと、たがいのほとばしる気合いで地面に亀裂が入る。





こ　く　て　　こぶし　　ふ  
悟空の手をはねのけたブローリーが拳をいきおいよく振りおろす！

それをなんとかよけて、悟空はブローリーにむかって巨大なエネルギー波をはなつ！

ちよくげき　　う　　そら　　ふ　　と  
直撃を受けたブローリーは空へと吹っ飛ばされた。

けれどやられたままでは終わらない。

こん　ど　　そら　　む　　すう　　は　　と  
今度はブローリーが空から無数のエネルギー波を飛ばしてくる！

「だりゃあ———！」

ばく　ふう　　と　　こ　く　　こぶし　　しょうげき　　ばく　ふう  
爆風をものともせずには飛びだしていく悟空とブローリーの拳がふたたびかさなりあえば、その衝撃がさらなる爆風をまきおこす。

ガッ！　ドドドドッ！　ガキィッ！

はげ　　こう　ぼう　　く　　ふた　り　　ち　　じょう  
激しい攻防を繰り返しながら、二人は地上につっこんでいく。

しょうげき　　だい　　ち　　わ　　ち　　てい　　ふ　　あ　　よう　　がん　　ち　　たい　　すす  
衝撃で大地が割れ、地底マグマが吹き荒れる溶岩地帯にまで進む。

まとうオーラがマグマをよせつけないほどに、激しい殴りあい続ける悟空とブローリー。

ふたたび氷河の山をつき破り地上に飛びだしてくると、上空高くでブローリーは手のひらにエネルギーのかたまりを集めはじめた。

「があああああ！」

みどり　　だま　　げん　　き　　だま　　きよ　　だい  
緑のエネルギー玉は、まるで元気玉のようにどんどん巨大になっていく。

み　　がま　　こ　　く　　ぜん　　りよく　　ほう　　な  
身構える悟空めがけて、ブローリーが全力でそれを放り投げる！

こ　く　　う　　と　　きよ　　だい　　だま　　しゅう　　へん　　だい　　ち　　は　　かい　　だい　　ばく　　はつ　　しょうげき　　は  
悟空は受け止めるが、巨大な玉はいきおいをそのままに周辺の大地を破壊して、大爆発の衝撃波がいつせいにひろがった。

く　だけた　　こおり　　だい　　ち　　ふ　　しゃく　　ねつ　　いろ  
くだけた氷の大地からマグマが噴きだし、あたりを灼熱色にそめる。

「ぬぬ……があああッ！」

そのすさまじい風圧に耐えられなかったのは、はなれて見ていたパラガスだった。

すず　　かお　　よこ　　ふ　　と　　い　　わ　　げき　　とつ  
涼しい顔でバリアをはったフリーザの横から、いきおいよく吹っ飛ばされて、つきでた岩に激突する。

「ぐうっ……、も、もしかしたら、ベジータ王が言ったことは正しかったのか……」

　　の　　う　　り　　にく　　　おう　　こと　　ば　　かれ　　せい　　じょう　　せい　　しん　　じょう　　たい　　う　　ちゅう  
パラガスの脳裏に、憎いベジータ王の言葉がよみがえる。彼は、ブローリーはいずれ正常な精神状態をたもてなくなり、宇宙を危機にさらすと不吉な予言をしていた。目の前にいる息子は、その言葉どおり、すべてを破壊しようとしているようにパラガスには見えたのだった。

　　こ　　く　　　う　　わ　　まわ  
だが、ブルーの悟空のパワーはブローリーを上回りつつあった。

　　はげ　　こう　　ぼう　　く　　ふた　り　　こ　　く　　かい　　すう　　ふ  
ふたたび激しい攻防を繰り返していた二人だが、悟空のパンチがきまる回数が増えている。バランスをくずしたブローリーの腹に、悟空はすかさず気を打ちこんだ。

ブロリーは吹き飛び、岩壁へとたたきつけられる。

倒れこんでいるパラガスへ、フリーザがちらりと視線をむけた。

「今度こそ、これ以上はないのですか？」

「は、はい……」

その言葉に、フリーザがニヤリと笑った。

「なるほど」

フリーザの頭に、残忍な可能性が浮かんだのだ。

あのいまましい孫悟空が、初めて超サイヤ人となったときのことを思い出せば、やってみたいことがある。

悟空の覚醒は、あることがきっかけだった。

それはクリリンの——親しい人間の死、だ。

フリーザがクリリンを爆散させたことをきっかけに、悟空は怒りで我を忘れた。

それが引き金となって、悟空の戦闘力はふくれあがり、超サイヤ人へと進化したのだ。

仲間の死などどうでもいいはずのサイヤ人が、そんなことで強くなることもある。

だとすればブロリーも、きっかけさえあればもっと強くなるのでは、と。

「……ためてみましょうか」

フリーザは、パラガスをちらりと見た。

すぐそこでおびえてうずくまっている男はまるで役に立たないが、ブロリーの覚醒の起爆剤くらいにはなるかもしれない。

残忍な薄ら笑いを浮かべた顔で振りかえったフリーザは、人差し指をちょいとあげる。

「？ な、あああ……！」

顔をあげたパラガスは、サツと青ざめた。フリーザの指先が、自分をねらっていたからだ。

「ふむ」

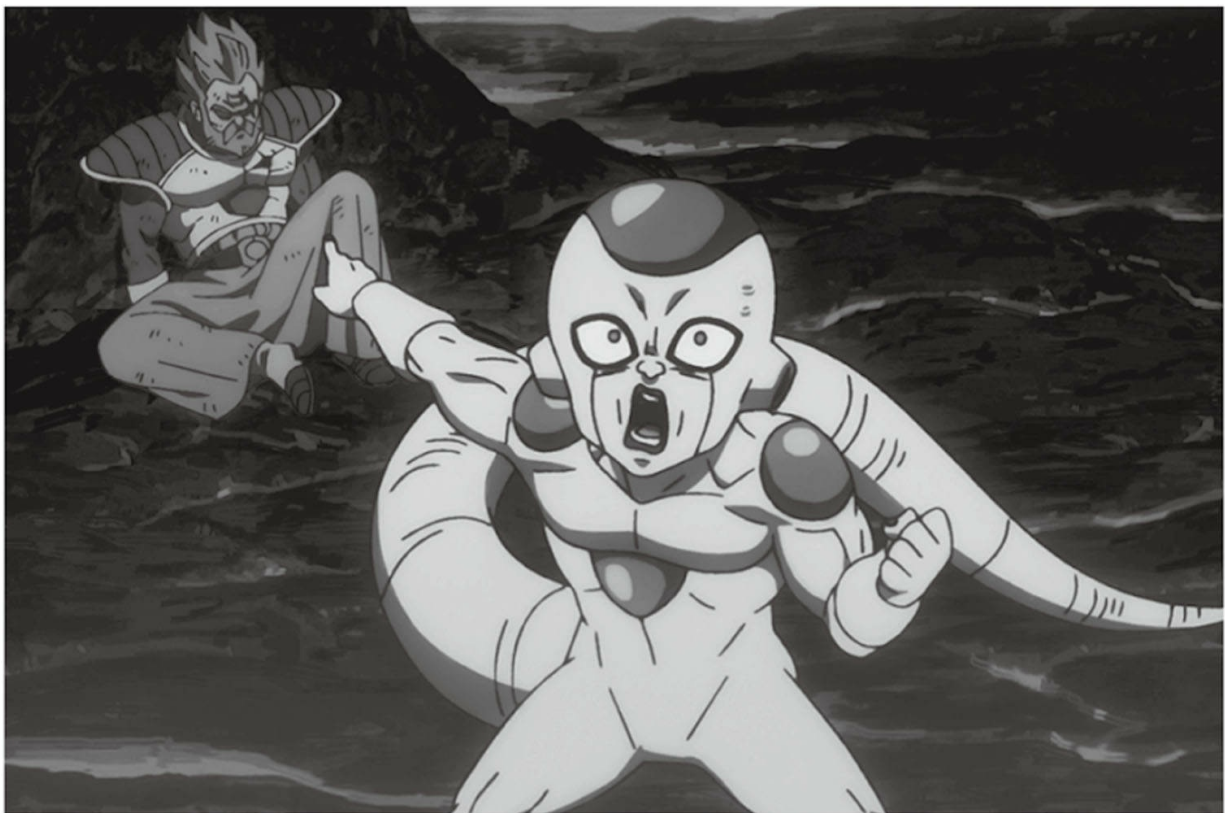
恐怖におびえるパラガスへ、フリーザはなんのためらいもなく指先からビームを発射した。

光線は一直線に胸をつらぬき、パラガスはあっけなくその場に倒れる。

その体を満足そうに見おろして、フリーザはコホン、とせきばらいをひとつ。

わざとらしい演技でブロリーを呼ぶ。

「ブロリーさん！ これを見なさい!! ブロリーさん!! お父様が殺されてしまいました!!」



悟<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>とバトルを<sup>つづ</sup>続けていたブローリーは、声<sup>こえ</sup>のしたほうに顔<sup>かお</sup>をむけて、ハッ<sup>め</sup>と目<sup>み</sup>を見開<sup>ひら</sup>いた。

「!? があ……っ」

ブローリーの体<sup>からだ</sup>がわなわなとふるえだした。

殺<sup>ころ</sup>された——死<sup>し</sup>んだ？ パラガスが——父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>が死<sup>し</sup>んだ。

ブローリーの中に、さまざまな感情<sup>かんじょう</sup>が噴<sup>ふ</sup>きだしてくる。

悲<sup>かな</sup>しみ、苦<sup>くる</sup>しみ、安<sup>あん</sup>堵<sup>ど</sup>、焦<sup>しょう</sup>燥<sup>そう</sup>……

感<sup>かん</sup>情<sup>じょう</sup>がたくさんありすぎてよくわからない。

よい父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>なのか悪い父<sup>わる</sup>親<sup>ちち</sup>なのか、それすらブローリーには判<sup>はん</sup>断<sup>だん</sup>がつけられない。そもそも物<sup>もの</sup>心<sup>ごころ</sup>ついたときにはパラガスしかいなかったのだ。くらべようがない。

けれど、パラガスの死<sup>し</sup>は、ブローリーに確<sup>かく</sup>実<sup>じつ</sup>に衝<sup>しょう</sup>撃<sup>げき</sup>を与<sup>あた</sup>えた。

不<sup>ふ</sup>安<sup>あん</sup>定<sup>てい</sup>な気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちがつもりにつもって、イライラと怒<sup>いか</sup>りの感<sup>かん</sup>情<sup>じょう</sup>を連<sup>つ</sup>れてくる。

「ああああああああ!!」

頭<sup>あたま</sup>をかきむしりながら、ブローリーは天<sup>てん</sup>高<sup>たか</sup>く叫<sup>さけ</sup>んだ。

体<sup>からだ</sup>の内<sup>うち</sup>側<sup>がわ</sup>から力<sup>ちから</sup>のかたまりを爆<sup>ばく</sup>発<sup>はつ</sup>させて、強<sup>きょう</sup>力<sup>りき</sup>な緑<sup>みどり</sup>のオーラがブローリーを包<sup>つつ</sup>む。



「がああああっ!!!」

ふたたび前進ぜんしんを始めたブローリーはじのひとみからは人間らしい光にんげん ひかりが消え、まるで理性りせいを失った獣けもののようだ。

超サイヤ人スーパーじんのように逆立つ髪さかだかみは金色きんいろで、すさまじいオーラがまるで柱はしらのようにあがっている。





「やった！ 成功しましたよ!!」

スーパー じん たんじょう こども こえ  
超サイヤ人ブロリーの誕生に、フリーザは子供のようにはしゃいだ声をだした。



「ぐうあああああああ!!!」

じ めん はげ ほう こう ぎょうしゆく みどり ひかり たま む すう ふ  
地面をふるわせるような激しい咆哮とともに、ブロリーから凝縮された緑の光の玉が、無数に降りそぐ。

ちやくだん ひかり たま ばく はつ し たい け と  
そこらじゅうに着弾した光の玉は爆発し、パラガスの死体さえ消し飛ばした。

め はい  
だがブロリーの目にはもうなにも入っていないようだ。

はっ みどり きょ だい か おお だま  
ブロリーの発する緑のオーラが巨大化し、ひとつの大きなエネルギー玉となる。

「——くっ」

じ めん たま ご ぐう しょうくう と  
地面をけずりながらせまってくる玉を、悟空は上空に飛んでよけた。

き お  
気づいたブロリーはすかさずあとを追ってくる。

「なにをぐだぐだやっている！ バカめ！」

じょうきょう ごう に  
その状況に業を煮やしたのはベジータだ。

と ご ぐう ぐう ちゅう  
いてもたってもいられずに飛びだして、悟空に空中でならぶ。

いっ たい いち ば あい  
「一対一にこだわっている場合じゃないだろう！」

「くやしいが……そうらしいな」

み いっ き へん しん  
ものすごいスピードでせまりくるブロリーを見ながら、ベジータも一気にブルーに変身した。

「ハッ！」

ふた り いっ ちよくせん と  
それから二人は一直線にブロリーにむかって飛びだした。

ご ぐう どう じ さく くれつ  
悟空のパンチ、ベジータのキックが同時に炸裂する！

だがブロリーにはダメージはないようだ。

ガガガッ！ バシッ！ ガキッ！

ご ぐう つぎ つぎ こう げき れん けい く み き  
悟空とベジータは次々に攻撃を連係して繰り返すが、すべて見切られている。

こう げき てん ふた り む すう き ほう  
すぐに攻撃に転じられ、ブロリーは二人に無数の気砲をはなってきた。

「やるぞ、ベジータ！」

追撃つい げきから逃のがれながら、悟空ご くうが声こえをかける。

「チッ！ くそつたれが……！」

地面じ めんギリギリを飛とんで逃にげながら、二人は背ふた り中せ なかをあわせてふりかえた。

そして一瞬いっ しゆんのすきについて――

「ギャリック砲ほう!!」

「かめはめ波は!!」



どう じ ふた り わざ  
同時に二人の技がはなれた！

ところがブロリーはひるむ様子もない。両手に気弾を作ると、合体してむかってくる悟空たちの波動にぶつけ、吹き飛ばしてしまう。

お 追いつめられていく悟空とベジータを見ながら、フリーザはうっとりとはほえんだ。

「いいですねえ。そんな顔を待ってましたよ……」

そうだ、もっとだ。もっとやってしまいなさい。

フリーザは高みの見物とばかりに闘いを見ている。と、ブロリーの攻撃をギリギリでよけながら飛んでいた二人がとつぜんフリーザのほうに方向を変えた。

「!？」

そしてフリーザの目の前で、二手にわかれる。

つぎ しゅん かん 次の瞬間、ブロリーがフリーザの目の前にいた。

「おっ、お待ちなさい！ わたしはフリーザですよ!!」

おどろ おも あと 驚き、思わず後ずさるフリーザに、ブロリーは咆哮をあげ襲いかかる！

「がああああ！」

「ぎゃああああっ!!」

だれであろうと、いまのブロリーにはまったく関係がないようだ。目の前にいれば、全員敵だ。



「がっ！ ああ！ ああああ!!」

光弾と激しい連打を打ちこまれて、フリーザはなす術もなく吹っ飛ばされる。

「ベジータ、いまだ！ こっちに！」

攻撃対象がうつっているいがチャンスだ。

「な、なんだ？」

ベジータの手をつかんだ悟空は、素早い動きで額に指をあて、瞬間移動する！

シュンツ！

「ぐ……はあはあはあ！」

「！」

とつぜん自分の背後にあらわれた悟空とベジータに、ピッコロは驚いて振りかえった。

二人とも想像以上にボロボロの姿で、地面にひざをつき、荒い息をしている。

こちらに着いたとたんに、二人のオーラも散ってしまった。

「おいっ！ いったいなにが起こっているんだ！」

「いそぐんだ、話はあとで。ピッコロ、仙豆持ってねえか？」

ピッコロの問いかけに、悟空は荒く息をついたままと言う。

しかしピッコロはむずかしい顔で首を横に振った。

「いや、持っていない」

「えっ」

ここにきたのは、仙豆を求めてのことだったらしい。ピッコロの眉間にしわがよる。

悪くはない案だった。仙豆があれば、ダメージはすべて回復できた。

けれど、ないものはない。

悟空は少し考えて、思いついたように顔をあげた。

「……………おい、ベジータ。フュージョンって技、知ってっか？」

「フュージョン？ ああ、そういえばトランクスから聞いたことはある……」

うなずいて、ベジータはハッと目をむいた。

悟空の言いたいことに気づいたのだ。

「くだらない動きをして合体する技か!？」

「ああ！ フュージョンするぞ！」

「ふざけるな！ キサマと合体なんてするか！」

おかしい動きで合体するなど、ベジータのプライドが許さない。

けれど悟空は言い聞かせるように、前に出た。

「三十分間だけだ！ 前にも界王神様のポタラで合体したじゃねえか！ ポタラはここにねえし、フュージョンするしかあいつに勝てねえぞ！」

「……くっ。合体はやむをえんとして……」

状況が状況だ。ブロリーの強さを実感している者として、ベジータにだってわかっている。

だが！

「こんな、こんな、こんなっ！」

トランクスが何度も見せてくれたせいで、覚えてしまった奇っ怪な動きをいきおいでしながら、ベジータは怒りと恥ずかしさで体がふるえた。

「こんな動きをオレにしろって言うのか!?!」

「これじゃねえと勝てねえ！ 地球がなくなっちゃうかもしれねえんだぞ」

悟空もフュージョンに必要な最後のポーズをきめながら言う。

かさなりそうになった指先をはなして、腕を組み、ベジータは「ふん」とうしろをむいた。

「だったらそれも運命だ」

悟空の説得も、ベジータには関係がない。

そもそも母星である惑星ベジータだっけとつくの昔に滅んでいるのだ。

そんなことくらいで感傷的になるサイヤ人などいるものか。

「愛するブルマが死んじゃってもいいのか？」

だが悟空がはなった一言に、ベジータはぐっと言葉をのみこんだ。

「はっ、恥ずかしいことを言うな！ ……チイツ」

愛だの恋だのという感情が一番だとは思わない。強くなるには関係のないくだらない感情だと思っている。

だからこれは——そうだ。

単にいまよりもっと強くなって、ブロリーを倒すために必要なだけだ。

ベジータは、意を決して振りかえた。

「わ、わかった！ さっさと教えろ!!」

やけくそ気味に叫ぶベジータに、悟空はニッと笑ってうなずいた。



やるときまったからには、まずは動作をしっかりとマスターしなければならない。

「「フュ——————ジョン!!」」

まずは悟<sup>こ</sup>空<sup>くう</sup>とピッコロで、フュージョンポーズを<sup>み</sup>して見せる。

腕<sup>うで</sup>を<sup>おお</sup>大きく<sup>うえ</sup>上にまわして、同時<sup>どうじ</sup>に足<sup>あし</sup>を<sup>うご</sup>ちょこちょこ動かし<sup>さ</sup>左右<sup>いう</sup>に移動<sup>どう</sup>。

次<sup>つぎ</sup>に、伸<sup>の</sup>ばした腕<sup>うで</sup>を<sup>おも</sup>思いきり外側<sup>そと</sup>に引<sup>がわ</sup>いて、片足<sup>ひ</sup>を<sup>かた</sup>あげて<sup>あし</sup>ピタリ<sup>と</sup>と止まる。

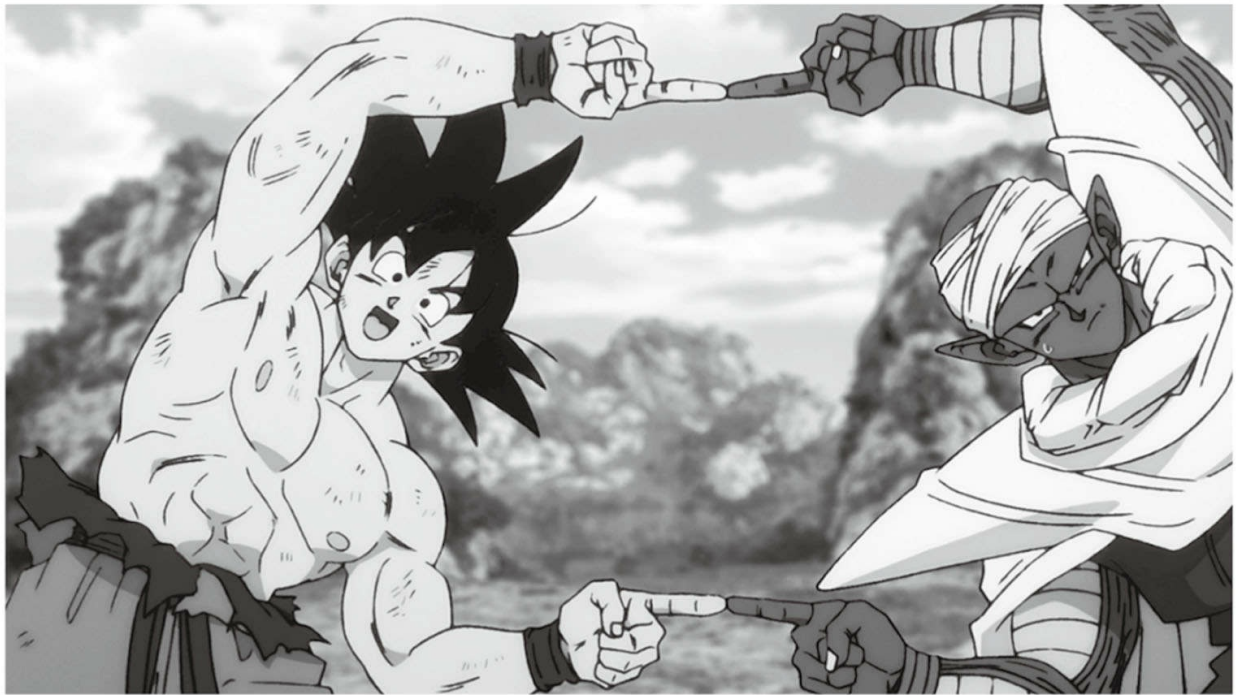
このおかしなポーズをきめたまま、今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>は二人<sup>ふたり</sup>で大きく腰<sup>お</sup>をひねり<sup>こし</sup>——

「「はっ!!」」

わき<sup>の</sup>を伸<sup>うえ</sup>ばして上<sup>ゆび</sup>にあげた指先<sup>さき</sup>を、相手<sup>あい</sup>の指先<sup>て</sup>に<sup>ゆび</sup>チョンツとあわせる！

これでフュージョンポーズの<sup>かん</sup>完成<sup>せい</sup>だ。





「な、なんという恥<sup>は</sup>ずかしいポーズだ……」

ひとまず見ていろと言われて凝視<sup>ぎょうし</sup>していたベジータは、想像<sup>そうぞう</sup>以上の恥<sup>は</sup>ずかしい動きに、わなわなと体<sup>からだ</sup>をふるわせた。

屈辱<sup>くつじよく</sup>だ。こんなポーズをしなければならないとは。

それもこれもブルマを守る<sup>まも</sup>——いや、あのいまましいブローリーを倒<sup>たお</sup>すために必要<sup>ひつよう</sup>なのだ。

「これがフュージョンだ！ 時間<sup>じかん</sup>がないんだ。さあ、練習<sup>れんしゅう</sup>してみっぞ！」

それでも、できることならやりたくない。

「どうしたベジータ」

「くっ……死<sup>し</sup>んだほうがマシだ……」

屈辱<sup>くつじよく</sup>に、目の奥<sup>めおく</sup>が熱<sup>あつ</sup>くなってくる。

そこをぐっと我慢<sup>がまん</sup>して、ベジータは悟空<sup>ごくう</sup>にあわせて足<sup>あし</sup>をちょこちょこ動かした。

「「フュ————……」」

左右<sup>さゆう</sup>にわかれて動きながら腕<sup>うで</sup>を伸ばし、ポーズをきめ、腰<sup>こし</sup>をひねる。

「「ジョン！ はっ!!」」

つきだした指<sup>ゆび</sup>と指<sup>ゆび</sup>がチョンツとくっついて——

「むっ——」

しかしその指先<sup>ゆびさき</sup>が微妙<sup>びみょう</sup>にずれているのをピッコロは見た。

フュージョンポーズの完成<sup>かんせい</sup>で、光<sup>ひかり</sup>の中に溶<sup>なか</sup>けていく二人<sup>ふたり</sup>が徐々<sup>じょじょ</sup>に姿<sup>すがた</sup>を変<sup>へん</sup>化<sup>か</sup>させ——

中<sup>なか</sup>からあらわれたのは、ものすごく太<sup>ふと</sup>った悟空<sup>ごくう</sup>とベジータの合体<sup>がったい</sup>した姿<sup>すがた</sup>——でぶベクウだった。



「へへっ！　これで最強さいきょうだな！」

どうだとばかりに拳こぶしをにぎったでぶベクウの腹はらがぽよんとはずむ。

まったく強そうには見えない姿すがたに、ピッコロが怒鳴どなった。

「だめだ！　指ゆびがあってない！　三十分さんじゅうぶん後ごにもう一度いちどだ！」

「「いい!?」」

言いわれて初はじめて自じ分の姿ぶんに気すがたづいたでぶベクウの口きから、情くちけない悲鳴なさがあがったのだった。

「ぐっああああ!!」

悟こ空くうとベジータがフュージョンに失しっ敗ぱいし、三十分さんじゅうぶんはもどれないことなど知らないフリーザは、ゴールデンフリーザに変へん身しんしても  
なお、プロリーによって殴なぐられまくっていた。

「がががががっ！　ぎゃああああ！」

空くう中ちゅうに放ほうり投なげられては連打れんだを浴あび、まさじょうたいにサンドバッグ状態だ。

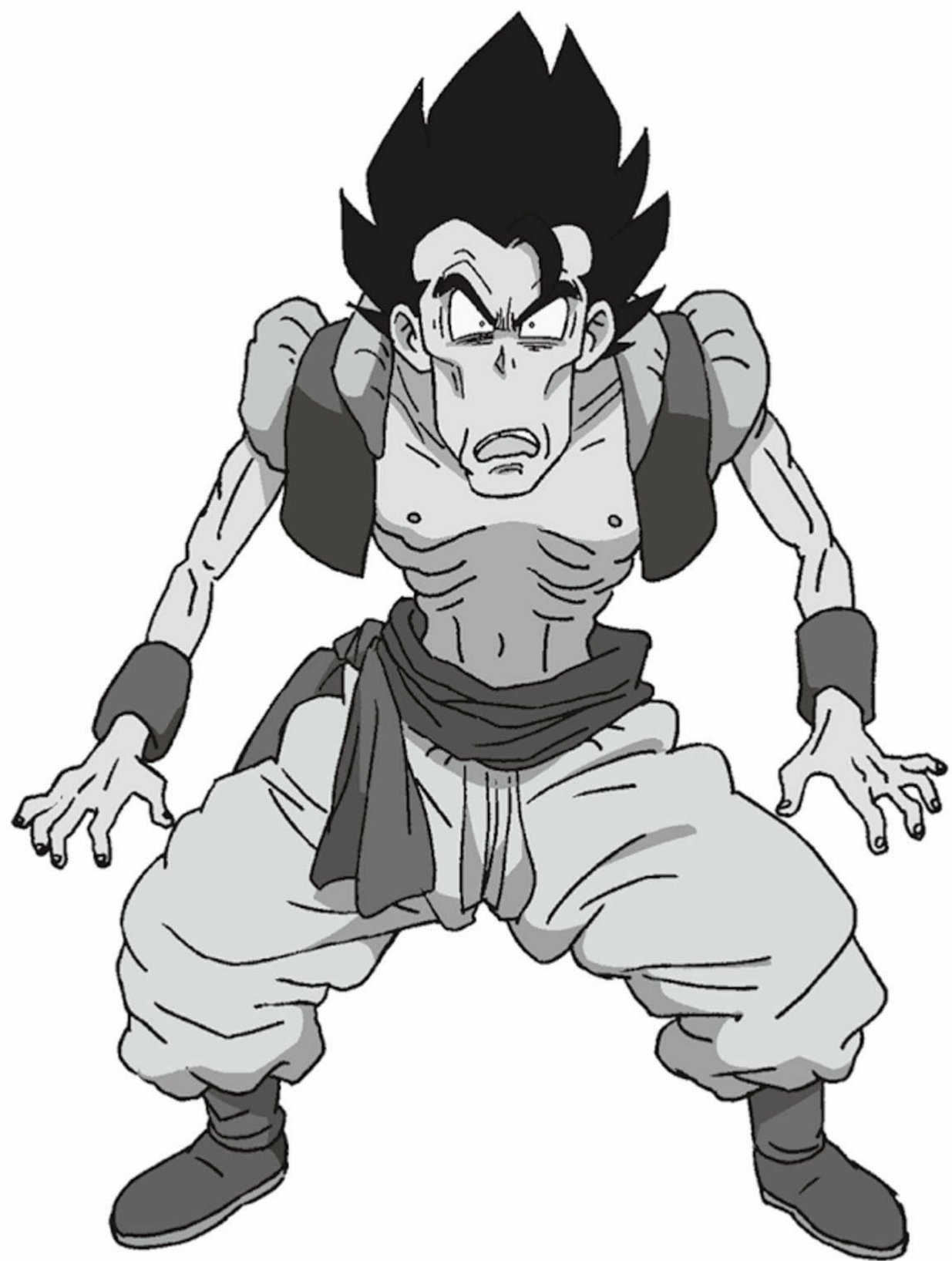
「「フュ————ジョン！　はっ!!」」

フリーザの犠ぎ牲せいを尻しり目に、本日ほんじつ二度目のフュージョンでは、指先ゆびさきはチョンツとかさなった。

「むむっ！」

しからだかし体かくどの角すこ度どが、ほんの少しちがったのだ。

フュージョンの光ひかりの中なかからあらわれたのは、さっきとは真逆まぎやくの、げっそりやせたガリガリベクウだ。



「「うわっ！」」

<sup>とう しょう</sup>登場するなり、<sup>ひん じゃく</sup>あまりの貧弱さに、<sup>じ ぶん</sup>自分の体重を<sup>ささ</sup>支えきれずに<sup>じ めん</sup>がくんと地面にひざをつく。

「<sup>ぜん ぜん</sup>全然だめだな。<sup>ふた り</sup>二人の<sup>かく ど</sup>角度が<sup>び みょう</sup>微妙にちがった。<sup>さん じゅう ぶん ご</sup>また三十分後だ」

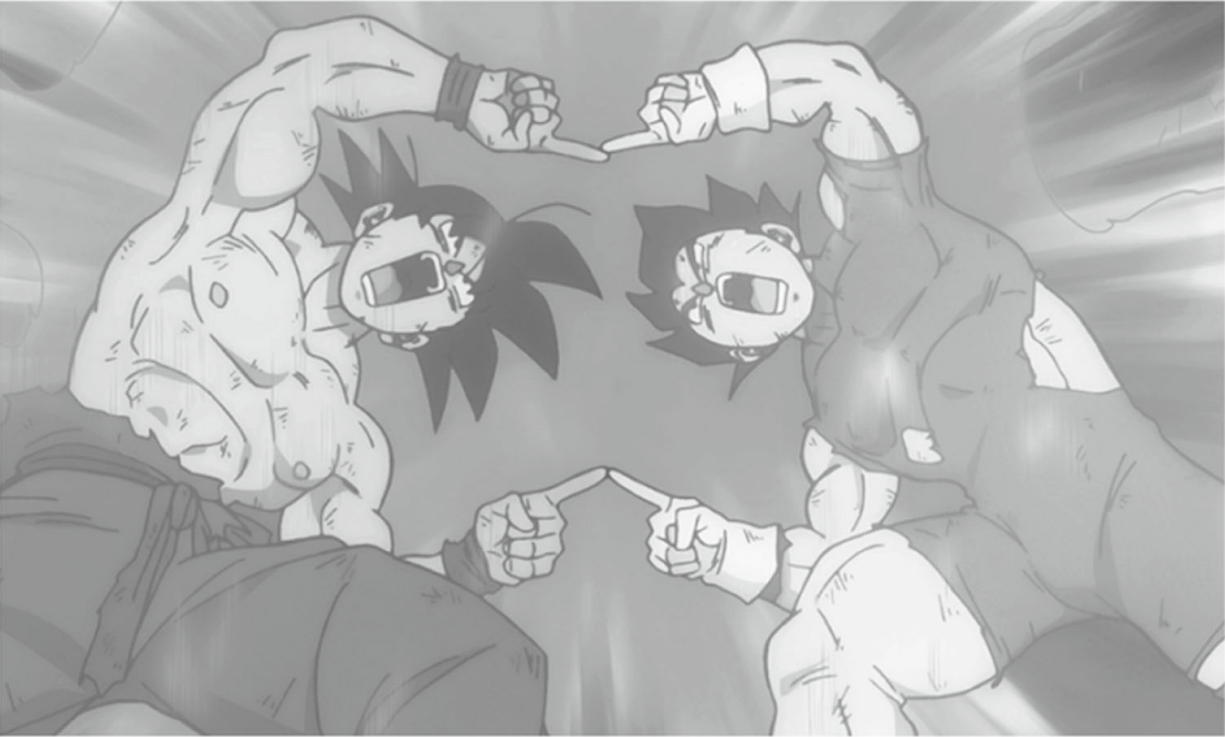
<sup>かた</sup>肩で<sup>い き</sup>ゼエハアと息をする<sup>れい せい</sup>ガリガリベクウに、<sup>つた</sup>ピッコロは冷静に伝える。

それはつまり、<sup>にん</sup>三人の<sup>し</sup>あずかり知らぬところで、<sup>えん ちょう</sup>ゴールデンフリーザのサンドバッグタイムが<sup>い み</sup>延長されたことを意味していた。

そして、<sup>さん じゅう ぶん ご</sup>その三十分後——

「「フュ————ジョン！ はっ!!」」

<sup>ど め</sup>三度目の<sup>しょう じき</sup>正直とばかりに<sup>い どう</sup>ちょこちょこ<sup>うで うご</sup>移動し、<sup>ふた り</sup>腕を動かした二人は、<sup>き あ</sup>気合いで<sup>ゆび</sup>指をつきだした。<sup>ゆび さき</sup>その指先がピタリとくっつく！



「ヌツ！」

けわしい表情で細かい角度まで見ていたピッコロが、目を見開いた。

ピカッとあたりが光に包まれ、二人のシルエットが中に吸いこまれるようにして溶けていく。

大きくかがやく光が収縮するとともに衝撃波があたりにひろがった。

「うっ!!」

ピッコロは、中からあふれてくる大きな気を肌で感じ、フュージョンの成功を確信した。

今度こそ光の中からあらわれたのは、きたえあげられた筋肉に、余裕の表情を浮かべる二人の合体した姿——！

「よし！ さっさと行って倒してこい！ ええと……なんて呼べばいい？」

ニヤリと口角をあげて聞いたピッコロに、男は一瞬「「え」といった顔をして、それからむずかしそうに首をひねる。

「「ポタラのときはベジットだっけ……じゃあ、えっと……」」

「もういい、早く行け！」

自分で聞きはしたものの、なければないで別にいいのだ。

そんなことよりいまは倒さなければいけない敵がいる。

ピッコロにそうながされても、男はむずかしそうな顔をしたまま、首を横に振った。

「「そうはいかない……たしかに名前があったほうがかっこいいかも……今度はえっと……」」

そんなに重要なことじゃないだろうが！

ピッコロの言葉が喉元まで出かかったところで、男は意気揚々と顔をあげた。

「「ゴジータだ！」」





がっ たい ふた り なか な まえ  
合体した二人の中で、ほどよい名前をきめたらしい。

い ひたい ゆび しゅん かん い どう  
言うなり、額に指をあて、ゴジータはふたたび瞬間移動でブロリーのもとへもどっていった。



其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

九<sup>きゅう</sup>

時<sup>じ</sup>空<sup>くう</sup>を<sup>を</sup>超<sup>こ</sup>えた<sup>た</sup>闘<sup>たか</sup>い



いっ ぽう      こおり    たい りく  
一方そのころ氷の大陸では――

ブロリーの攻撃によってできた岩壁のクレーターにめりこみながら、ゴールデンフリーザは奇妙な笑みを浮かべていた。

「ぐう……ふふふ、すばらしい……なんというすばらしい戦闘力！」



見たこともないくらいボコボコにやられているというのに、まだブローリーを使うつもりでいるようだ。

けれどもブローリーのほうは、動けなくなったフリーザに興味を失ったらしい。

雄叫びをあげながら、ウイスにむかって飛び去ってしまう。

ゆくえを追って視線をむけたフリーザの前に、とつぜん見たこともない男があらわれた。

「な……！　なんですか、あなた……！」

どこかで見たことがあるようなないような、奇妙な既視感を覚える顔だ。

男がゆっくりと振りかえる。

「ふん。オレはゴジータ。悟空とベジータが合体したんだよ」

「……合体？」

「おまえは長いこと死んでたから知らないだけだ。二人の強さを足しただけじゃないぞ、さらに大幅アップだ！」

自信たっぷりに拳をにぎって見せたゴジータからは、尋常じゃない強さを感じる。

合体だなんて、そんな裏ワザは聞いていない。

もしかすると、ゴールデンフリーザに成長した自分よりも強いんじゃないのか……

フリーザはクレーターからふらふらと体を起きあがらせて、思わず叫んだ。

「ひ、卑怯な!!」

「おまえ、よくそんなことが言えるな……」

卑怯はフリーザの専売特許のようなものだろうに。

ゴジータは呆れ顔でフリーザを見て、遠くでウイスに攻撃を始めるブローリーに視線をもどした。

額に指をあて、そちらへ瞬間移動する！

シュンツ！

「ほいっと。こっちですよー」

ブローリーの重たいパンチも素早い蹴りも、ウイスはなんなくかわしていた。

地面についた杖を支点に、うしろにとんで着地する様子は、むしろ優雅にさえ見える。

「がああああ!!」

「ほい、ほいっと」

いらいちまかせに襲いかかるブローリーの攻撃をよけ、ひょいっとさがったウイスの前に、ゴジータが瞬間移動でやってきた。

「あら？」

「ウイスさん！　あとはオレにまかせてくれ！」

ゴジータの登場で、ブローリーの動きが止まった。

警戒するようにうなりながら、こちらを見ている。

「あなたたち、合体なんてできるんですね」

「あー！ フュージョンってやつか！」

はなれた岩<sup>いわ</sup>かげで、かくれて<sup>み</sup>見ていたブルマも<sup>き</sup>気づいた。

まさかあのベジータ<sup>ご ぐう がっ たい</sup>が悟空と合体してあらわれるとは思<sup>おも</sup>わなかったが、これで鬼<sup>おに</sup>に金棒<sup>かな ぼう</sup>だ。

形勢<sup>けい せい</sup>逆転<sup>ぎゃく てん</sup>も夢<sup>ゆめ</sup>じゃない。

「ぐううう……」

うなるブロリーに、ゴジータはかまえたまま<sup>あい ず おく</sup>合図を送った。

「「こい！」」

「があああ!!」

こたえるようにブロリーが<sup>と</sup>飛びだす！





ものすごいスピードで二人は一氣に上昇した。

「があああああ!!!」

一瞬早く上空に抜けたゴジータに、追うブロリーが無数の光弾を打ってくる。

華麗によけたゴジータは、ブロリーのほうへと向きなおった！



「「へへっ。いっちょ行くぜえ！　ぬう——おおおお!!」

き　あ　　ごえ　　ちから　かい　ほう　　かみ　　きん　いろ  
気合いのかけ声とともに力を解放したゴジータの髪が、金色にそまった。

スーパー　　じん　　かん　せい  
超サイヤ人ゴジータの完成だ！

スーパー　　じん　　くう　ちゆう　　げき　とつ  
超サイヤ人ブロリーと、空中でそのまま激突する。

ドガッ！　ゴッ！　バキッ！

かお　　う　　なく  
顔にパンチを受けたゴジータが、すかさずブロリーを殴りかえす。

「「ぐう！」」

どん、とブロリーが吹っ飛ばされる！

くび　かる　ふ　　たい　せい　　たい　じ　　なが  
首を軽く振って体勢をととのえと、ふたたび対峙し、殴りあいにもどってくる。

はら  
こんどは腹にゴジータのヒジがつきささった。



「ぐおっ！」

からだ ま がんめん け おそ じ めん  
体を曲げたブローリーの顔面を蹴りが襲い、地面へとたたきつけられる。

ゴジータはすぐさまそこに、こう だん ふ そそ  
光弾をシャワーのように降り注がせた。くらったブローリーはもんどりをうつ！ けれどすぐにオーラを  
からだ つく  
体にまとわせてバリアを作り、むかってきた！

「「でやあっ！」」

「があああっ！」

ゴジータはどこか、そんなやりとりを楽しんでいるように見えた。

ふた り き こう そく い どう げき とつ こう ぼう く  
二人は消えたりあらわれたり的高速移動をしながら、激突しては、攻防するを繰り返す。

「「だだだだ!!」」

「おおおお!!」

ふた り きょ り と どう じ ちょう は う  
そうして、二人は距離を取り、同時に超エネルギー波を撃ちはなった！

ズガアアアアッ!!!!

こう かんしやう いっ き  
高エネルギーが干渉して、一気にはじける！

じ ぐう ふた り わ じ げん かべ なか はげ  
そのいきおいで時空がゆがみ、二人は割れた次元の壁の中で、さらに激しくぶつかりあう。

かつてないパワーとパワーのぶつかりあいだ。

「「はあああっ！」」

「があああっ！」

お ぎ み じ さけ  
ほんのわずかに押され気味のブローリーが、焦れて叫ぶ。

「うおおおおおおっ！」

き ほうしゅつ からだ へん か  
ためた気を放出すれば、ブローリーの体に変化があらわれはじめた。

きん にく も さか だ かみ みどり か  
筋肉が盛りあがり、逆立つ髪は緑に変わる！

おどろ め み ひら  
ゴジータが驚きに目を見開いた。

スーパー じん  
超サイヤ人ブローリーのフルパワーだ！

ほうしゅつ じ げん こわ  
放出されるあまりのオーラに、次元がさらに壊れはじめる。

「「はああっ！」」

スーパー じん なぐ  
超サイヤ人ゴジータが殴りかかる！ だがヒットしたはずのパンチが、まるで効いていない。

「がああっ！」

「「ぐっ!？」」

ぎゃく スーパー じん かべ ふ と  
逆にきまったフルパワーの超サイヤ人ブローリーのパンチで、ゴジータは壁に吹っ飛ばされてしまった。

いき  
ガハッと息をついたゴジータに、ブローリーがすかさずひじ打ちを加える。

「「くっ……！」」

ふ り さと き ね  
このままでは不利だと悟ったゴジータも、さらに気を練りあげて、パワーをためる。

「「はあああああつ!!」」

<sup>きん</sup> <sup>いろ</sup> 金色だったゴジータの<sup>かみ</sup> <sup>いろ</sup> 髪色が、<sup>かみ</sup> <sup>あお</sup> 神の青へと<sup>か</sup> 変わってゆく。

パワーアップしたゴジータが<sup>スーパー</sup> 超サイヤ人<sup>じん</sup> ゴッド<sup>スーパー</sup> 超サイヤ人<sup>じん</sup>になったのだ！





「「ありやりやりやあ!!」」

その力は圧倒的だ。

ブローリーを追いかけ、殴って殴って、打ちつける。

すきをつき起きあがったブローリーが、口からエネルギー波をはなって逃げるも、超サイヤ人ブルーのゴジータは、あっというまに追いついて、正面からガシツと組みあう。

その衝撃で空間がさけ、二人は氷の大地に舞いもどる！

「「うおおおっ！」」

「があああっ！」

激しく雄叫びをあげるブローリーは、好戦的であるとい視線をむけながら、ゴジータにむかって飛びだしていく。



「このまじや、ブローリーはやられるぞ！」

キコノに預けられたドラゴンボールをかかえた、レモが言った。

チライにだって、そんなことはわかっている。

チライは宇宙船内のどこかにむかっていきおいよく駆けだした。

「あいつは父親のせいで、ただの戦闘マシンにされたんだ。闘いたくて闘ってるんじゃない！ ブローリーは、ホントは純粋で心やさしいサイヤ人なんだ！」

あわててレモもそのあとを追う。

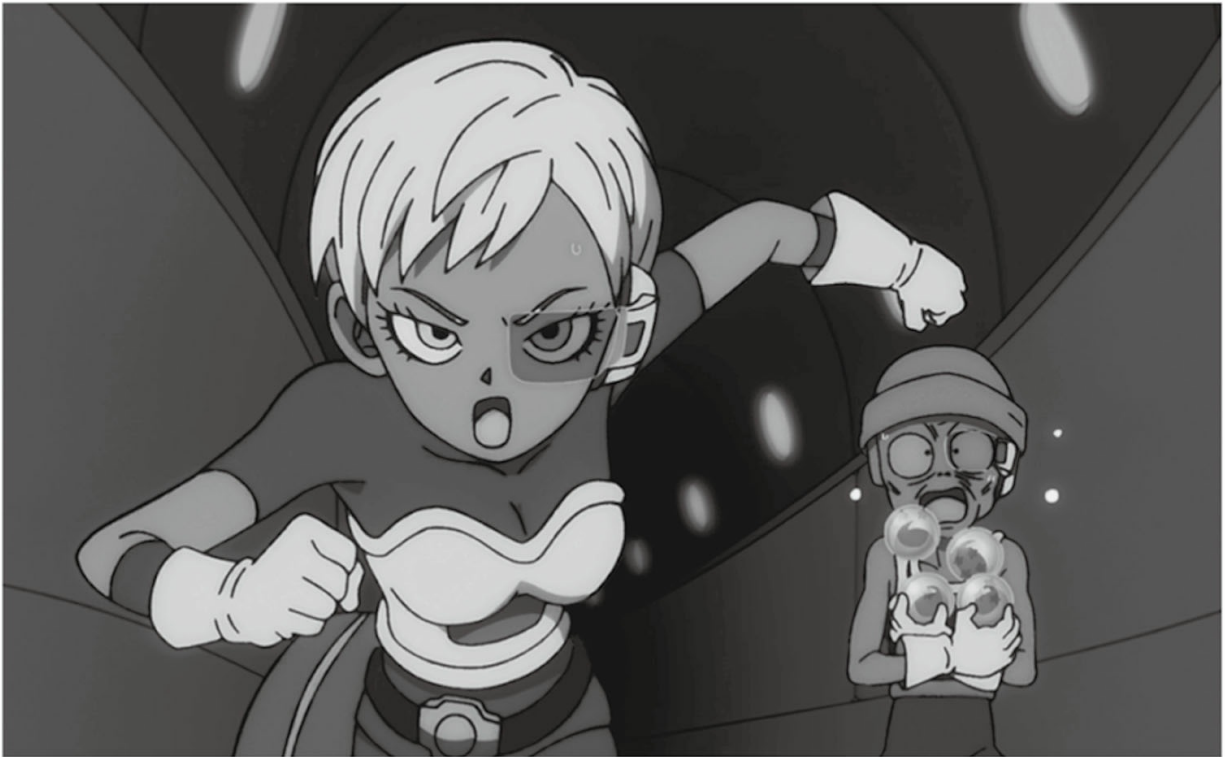
「死なすわけにはいかないよ!!」

廊下の奥へと駆けてゆくチライがしようとしていることを、レモは察した。

手に持っているのはドラゴンボール。

フリーザが願いをかなえるために集めたという不思議な玉だ。

これを使って、闘いを止めることができれば——！





ゴジータとブロリーの闘いは、少しずつ力の差が見えてきていた。

「うおおおおおお！」

超高速でつっこんできたブロリーが、ゴジータにエネルギー弾をはなつ！

「はああつ!!」

だが、気合いとともに腕を振り、光弾の膜を発生させたゴジータによって、エネルギー弾はすべてブロリーにはねかえされた。



「ぐああああっ」

ブロリーの顔面が ん め んにクリーンヒットする！

激痛げ き つうに叫ぶさけブロリーへ——

ズガッ!!

ゴジータの蹴りけが容赦よう しゃなく炸裂さく れつした！

「ぬぐうあーっ!!」

よろめきさがるブロリーに、ゴジータは光弾こう だんを連射れん しゃする！

「「ありやりやりやりやりやつ!!」」

「ぐああああああっ！」

大量たいりょうの光弾こう だんが次つぎから次つぎへと着弾ちゃくだんして、炎ほのおの中のブロリーがひどくもがきだす。



たたか こう ふん  
闘いの興奮にいろどられたゴジータが、さらに光弾をはなとうとかまえたそのとき。

——あたりの空が、とつぜん墨をはいたように黒くそまった。

「「……？」」

うご と そら み  
動きを止めたゴジータが空を見あげる。

すこ ちゆうせん ちか み おほ こう こう ち じょう そら  
少しはなれたところにあるフリーザの宇宙船の近くで、見覚えのある神々しいかがやきが、地上から空へとあがっていた。

「「……っ」

へん か い み き  
フリーザも、その変化がもたらす意味に気づいたようだ。

のぼ ぎん  
昇っていくまばゆい銀のかがやきを、ギッとにらみあげていた。



う ちゆうせん  
宇宙船のすぐそばでは——

ち じょう お さん ぜん こ くも そら シェン ロン すがた う  
地上に置かれた七つのドラゴンボールは燦然とかがやきをはなちながら、濃い雲におおわれた空に神龍の姿を浮かびあがらせた。

みどり きょ だい りゅう は み おお くち ひら  
緑のウロコにおおわれた巨大な龍が、するどくとがった歯を見せて、大きな口をがぱりと開く。

ねが  
『どんな願いもひとつだけかなえてやろう……』

こわ ね シェン ロン つ  
おごそかな声音で、神龍が告げる。

ねが  
どんな、願いも。

シェン ロン よ ちようほん にん そら シェン ロン み  
神龍を呼びだした張本人であるチライは、じっと空にただよう神龍を見つめた。

けい かく  
チライの計画はこうだ。

さき ねが  
ドラゴンボールをうばい、先に願いをかなえる。

たん じゅん めい かい ねが ねが かた  
単純にして明快だ。願いはある。けれど願いのかなえ方がわからない。

じゅう シェン ロン よ  
だからチライは、キコノを銃でおどして、神龍を呼びだしたのだ。

「で？ どうすりゃいいんだよ」

「ぐう……」

はや い  
「早く言えよ！」

せ なか じゅう お  
背中にきつつけた銃でぐりぐりと押すが、キコノはくやしそうにうなるだけだ。

じ かん いっ こう くち わ こえ あら  
時間かせぎのつもりなのか、一向に口を割ろうとしないキコノに、チライは声を荒らげた。

う  
「もういい！ 撃つ！」

い  
「わ、わかった！ 言う！」

チライのおどしを本<sup>ほん</sup>気<sup>き</sup>と<sup>み</sup>見て、キコノはあわててメモ<sup>と</sup>を取りだした。

シエン<sup>シエン</sup> 龍<sup>ロン</sup>の呼<sup>よ</sup>びだし方<sup>かた</sup>、それに願<sup>ねが</sup>いのかなえ方<sup>かた</sup>の手<sup>て</sup>順<sup>じゆん</sup>を、フリーザに命<sup>めい</sup>じられて調<sup>しら</sup>べたとき<sup>か</sup>に書<sup>か</sup>いたメモだ。





「そ、そのまま願いを……言え……」

「なんだ……それだけかよ」

チライは少し拍子抜けした。

けれど、それだけなら簡単だ。

「あたしの願いは！」

チライは、ぐっと神龍を見あげ、はっきりと願いを口にする。

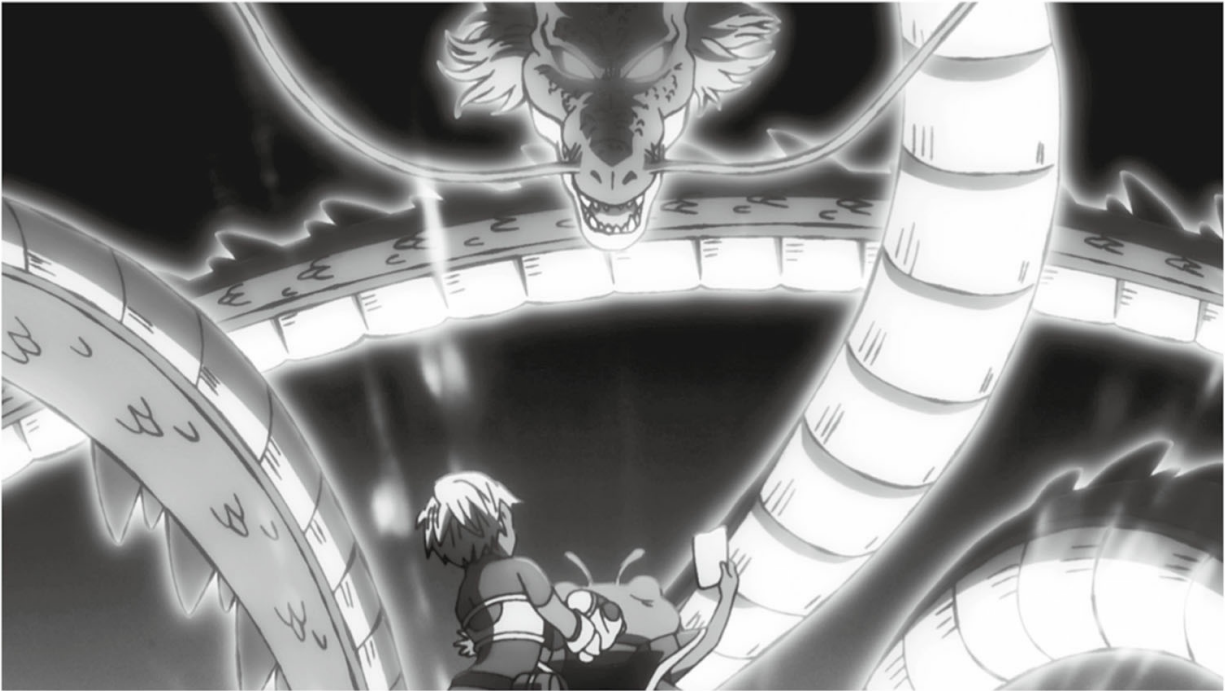
「ブロリーを!!」

ブロリーは本当はやさしいヤツだ。

残酷な闘いが好きなわけじゃ決してない。

彼が楽しそうに話していたのは、あの毛皮のバアという生き物との交流だったし、サンキューも言えるようになった。

純粋で、すごくいいヤツだ。だから。





動きの止まったゴジータと対峙するブロリーは、空の変化などどうでもよかった。

それよりも、くやしさをブロリーはぎりりと奥歯をかみしめる。

どうやってもいまだゴジータに敵わない。もどかしさでどうにかになってしまいそうだ。

「ぐうあああああああ!!」

叫び、ブルーゴジータへと飛ぶようにつかむ！



空を見あげていたはずのゴジータは、ジャンプでよけると、その足でブロリーを蹴り飛ばす！

「うがああああっ！」

「「はああっ！」」

ゴジータの追い打ちの蹴りがぶちこまれ、さらにうしろに吹っ飛ばされる。

「ぐっ、があっ、はあはあはあっ」

なんとか体勢を立てなおしたブロリーも、ゴジータへと拳をむける。

その拳から発射された拡散ビームはまっすぐゴジータにつっこむが、姿勢を低くしてかわしたゴジータが、ブロリーへと飛びあがるようにジャンプ！ 顔面パンチをきめる！

吹っ飛ばされたブロリーが地面に激突するやいなや、ゴジータの拳がまたきまる！

「がっ！ ああ！ あっ、ぐあっ、がっ!!」

ブロリーにはなす術がなかった。

ゴジータの圧倒的なパワーとスピードを乗せた攻撃は次々ときまり、ブロリーの体が後退していく。

「「はああああああっ!!!」」

フルパワーの一発がともにブロリーの腹に突き刺さった。

さらに一発！ そしてもう一発!!

悶絶するブロリーを宙に飛ばしたゴジータは、ブルーのオーラでその場に釘づけにする。

逃れられない拘束の強さに、ブロリーがもがく。

「があああああっ！」

「「はああああああああああっ！」」

周囲にすさまじい衝撃波をもたらしながら、オーラを最高潮に高めたゴジータが、ゆっくりと両手をあわせる。



そうして腰に引き、エネルギーをかまえた手のひらに集中させて――

「か――め――は――め――.....」

「あ.....う、く.....」

衝撃波にあおられていたブローリーのひとみに、正気もどる。だが――

「波ああああああっ!!!」

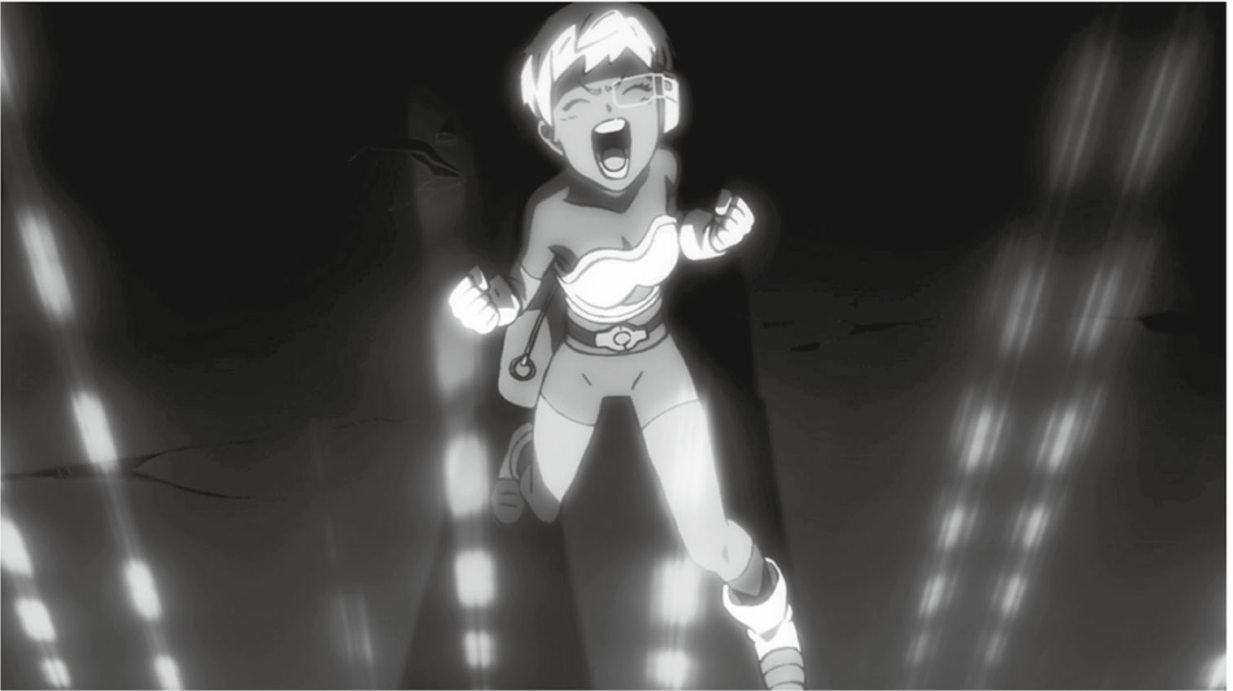




きょ だい    ねつりょう    も                    は                    すす  
巨大な熱量を持ったかめはめ波が、プロリーへとつき進み——！



「ブローリーを元<sup>もと</sup>いた星<sup>ほし</sup>に帰<sup>かえ</sup>してやってくれ——!!!」



き あ い さけ ねが ちょうとく だい は ふ と  
気合を入れて叫んだチライの願いは、いままさにゴジータからはなれた超特大かめはめ波によって吹き飛ばされんとしていたブロリーを、タッチの差で消し去った。

たお てき は う ちゅうくう かん すす めい めつ み  
倒すべき敵のいなくなったかめはめ波は、そのまま宇宙空間へとつき進み、明滅しながら、見えなくなった。

ねが  
『願いはかなえられた……さらばだ』

シェン ロン つ ぜん しん ぎん いろ ひかり つつ ち じょう たま なか  
神龍はおごそかにそう告げると、全身が銀色の光で包まれて、地上の玉の中にもどっていく。

そら たか  
そしてドラゴンボールは空高くのぼり、

ヒュンツ、ヒュンツ、ヒュン——ツ

せ かい と ち そら あか  
世界に飛び散ると、ふたたび空には明るさがもどる。

き お み ひょうじょう  
とつぜん消えたブロリーのゆくえを追うように見あげていたゴジータは、フツと表情をゆるめた。

「……」

「……」

せいじゃく お  
あたりに静寂が落ちる。

ぼう ぜん よう す あか と そら き み おく われ かえ  
チライとキコノはどこか呆然とした様子で、明るさを取りもどした空に消えたドラゴンボールを見送り、それからハッと我に返った。

「「ああ……！」」

うら ぎ もの ぐん  
キコノにとってチライはとんでもない裏切り者で、チライももうフリーザ軍にはいられない。

に まえ こ がた う ちゅうせん と  
ひとまず逃げだそうとしたチライの前に、小型宇宙船が飛びだしてきた。

そう じゅうせき さけ  
操縦席からレモが叫ぶ。

の  
「乗れ！ チライ！」

こえ き お こ がた せん まよ と の  
その声を聞き、チライは降りてきた小型船に迷わず飛び乗った。

「はっ！」

の かく にん し こ がた せん じょうしやう  
すべりこむように乗りこんだチライを確認し、レモがハッチを閉めつつ小型船を上昇させる。

よう す ち じょう み こ がた せん ひと さ ゆび  
その様子を地上から見ていたゴールデンフリーザは、小型船へと人差し指をむけた。

と うご しょうじゆん  
飛びさる動きにあわせて照準をさだめ——

「「おっと！」」

「……………」

う お ちよく ぜん さつ しゆんかん い どう て  
撃ち落とす直前、それを察し瞬間移動してきたゴジータに手をつかれる。

「「へへ」」

わら む ごん あつりよく  
笑ってはいるが、これは無言の圧力だ。

あつ どう てき ちから さ み てい こう かれ う お  
さきほどあれだけ圧倒的な力の差を見せつけられているフリーザに、いま抵抗してまで彼らを撃ち落とすメリットはない。

「ふん！」

ゆび さき しゅうちゅう だん け けいたい かい じょ て ふ  
指先に集中させていたエネルギー弾を消して、フリーザはゴールデンフリーザの形態を解除した。ゴジータの手を振りほどく。

「……またきますからね」

母船<sup>ぼ せん</sup>にむかって歩きながら、フリーザは振りむかず<sup>ある ふ</sup>にそれだけを告げた<sup>つ</sup>。

そのころ、遠くはなれた南<sup>と お</sup>の島<sup>みなみ しま</sup>では、サマーベッドに寝転んだビルスの腹<sup>ね ころ</sup>の上<sup>はら</sup>で、ブラが楽しそうに遊<sup>う え</sup>んでいた<sup>たの あそ</sup>。

「あ〜つぶ、あぶぶ……」

まわりにはビルスがあやすのに使<sup>つか</sup>った育児グッズ<sup>いく じ</sup>が散乱<sup>さん らん</sup>している。

くつろぎながら、ビルスはちらりと片目<sup>かた め</sup>をあけて、夕焼<sup>ゆう や</sup>けの空<sup>そら</sup>を見つめた<sup>み</sup>。

「うん……なんとなかったようだな」

衝突<sup>しょう とう</sup>していた大きな気配<sup>お お</sup>のゆくえを追<sup>け はい</sup>って、ビルスはふたたび眠<sup>お</sup>りについたのだった<sup>ねむ</sup>。



フリーザ軍<sup>ぐん</sup>から逃げだしたレモとチライは、そのまままっすぐ宇宙<sup>う ちゅう</sup>へと飛<sup>と</sup>びたっていた。

「悪<sup>わる</sup>かったね。あんたを巻<sup>ま</sup>きこんじゃったよ」

操縦席<sup>そう じゅう せき</sup>のレモへと、チライがうしろからのぞきこみながら言<sup>い</sup>う。

「気<sup>き</sup>にするな」

オートパイロットに切り替<sup>き</sup>えながら、レモが振<sup>か</sup>りかえる<sup>ふ</sup>。

「フリーザ軍<sup>ぐん</sup>に入<sup>はい</sup>って、いまのが一番<sup>いち ばん</sup>スリルがあつて楽しかつた<sup>たの</sup>」

悪<sup>わる</sup>だくみが成功<sup>せい こう</sup>したような言<sup>い</sup>い方に、チライは思<sup>おも</sup>わず笑<sup>え</sup>顔<sup>がお</sup>になった。

ふた<sup>ふ た</sup>り宇宙船<sup>う ちゅう せん</sup>の窓<sup>まど</sup>から外<sup>そと</sup>を見つめる<sup>み</sup>。

小<sup>ちい</sup>さな星<sup>ほし</sup>々の連<sup>つら</sup>なる小惑星帯<sup>しょう わく せい たい</sup>を抜<sup>ぬ</sup>けて進<sup>すす</sup>む宇宙船<sup>う ちゅう せん</sup>は、いつまでこうしていられるだろう。

窓<sup>まど</sup>の外<sup>そと</sup>を見ながら、チライはぼつりとつぶやいた<sup>み</sup>。

「……追<sup>お</sup>ってくるかな」

「さあな……で、チライはどこに行<sup>い</sup>くつもりだ？」

「プロリーの星<sup>ほし</sup>だよ」

「バンパか……」

だいたい察<sup>さつ</sup>してはいたのだろう。

とくに驚<sup>おどろ</sup>いた様子<sup>よう す</sup>もなく惑星名<sup>わく せい めい</sup>を口<sup>くち</sup>にしたレモに、チライはうなずく。

それからレモに聞<sup>き</sup>いた。

「レモはどこ<sup>ほし</sup>の星<sup>お</sup>で降りる？」

かいしょう  
コンビもここで解消だ。

フリーザ<sup>ぐん</sup>軍にはもどれないおたずね者<sup>もの どう し</sup>同士、これから<sup>べつ べつ</sup>は別々の道<sup>みち い</sup>を行くのだ。

おも　くび　ふ  
そう思っていたチライに、レモは「いや」と首を振った。

こう こう よ わく せい い さき  
航行プログラムのコンソールを呼びだして、惑星バンパに行き先をあわせる。

「俺もつきあうよ。どこにいても危険なのは同じだしな」

め まる よう す み そう じゅう かん  
目を丸くしているチライの様子をチラリと見て、レモは操縦桿をぐいっとにぎった。

「うわっと！」

「強いブローリーの近くにいたほうが、まだ安心だろう」

スピードをあげた船内で、よろけたチライに、にやりと笑う。

レモの言葉で、チライの顔にも笑みが浮<sup>か</sup>んだ。

「じゃあ途中で、食料とかいろいろ買っていかなきゃな！」

まだこれから<sup>なか ま</sup>もいっしょの仲間だ。

レモとチライと、そして――



「やはりあのふたりは、ブロリーといっしょのようですね」

ち きゅう たたか みっ か ご  
地球での闘いから三日後。

銀河団の宇宙地図がのったタブレットで、バンパの位置を確認しながら、キコノはフリーザに報告していた。

バンパを示す記号の位置に、点滅する光がふたつある。

ぐん こ がた う ちゅうせん めす と い ち はんのう  
フリーザ軍から小型宇宙船を盗んで飛び出した、レモとチライのスカウターの位置に反応しているものだ。

フリーザの命令さえあれば、二人を殺しに行くことはたやすい。

し　じ　ま　　　　　　　し　せん　う　　　　　　　かんが　　　　　め  
指示を待つキコノとベリブルの視線を受けたフリーザは、考えるように目をつむった。

「しばらくそのまま泳がせておきましょう」

だ し じ すこ おどろ  
 そうして出された指示に、キコノは少し驚いた。

だが、ベリブルはにやりと笑っている。

「あの二人に、ブローリーの精神コントロールをまかせ、我を失うことなく、あのとてつもないリパーが出せるようになれば、それこそ最強の戦闘員になります」



し れい せき すわ い き げん  
指令席に座るフリーザはそう言いながら、シッポをユラユラとご機嫌にゆらした。

「……うまくいくでしょうか……」

そんなフリーザを見あげるキコノは、ベリブルとちがい、少し不安そうだ。

フリーザはキコノをちらりと見おろし、窓の外にひろがる宇宙へと目をむけた。

「そうであってほしいですねえ。いくらわたしががんばって戦闘力をあげても……、敵は孫悟空とベジータの二人」

いまもほかの惑星では、フリーザ軍の戦闘員が侵略し、勢力を拡大し続けている。

けれど、それだけでは足りないのだ。

にく ふく しゅう あい て そん ご ぐう おな め  
憎い復讐の相手、孫悟空。同じく目ざわりなベジータ。

こん かい たたか し まつ か のう せい  
今回の闘いで、ヤツらを始末できる可能性があらわれた。

「こっちだって、もうひとりくらいほしいですよ。ふふふふ……」

かれ すがた そう かい み  
彼らがボコボコにされている姿は、なんと爽快に見えたことか。

おも だ ざん にん え う  
思い出しながら、フリーザは残忍な笑みを浮かべたのだった。



其<sup>そ</sup>之<sup>の</sup>

十<sup>じゅう</sup>

カカロットの願<sup>ね</sup>い<sup>が</sup>



ブローリーのあとを追って小惑星バンパに到着したレモとチライは、合流したブローリーに案内された洞窟の中にいた。もともとブローリーが暮らしていた場所らしい。

いったん洞窟の外に出て、もどってきた彼の手には、巨大ななにかの脚のようなものがあった。

「う……」

ボキリと折ってさしだされたその中身を確認して、チライは顔をしかめた。

どろりとした気味の悪い液体がたぷりと見える。

「ウソだろ……こんなのを食べてたのか……」

ブローリーが厚意から二人に食事を取ってきてくれたらしいことはわかったが、これを食べるには勇気が必要だ。

チライはおそろおそろ中の液体を指につけて、なめてみる。

「ぐっ……ま、まあ、にがいけど、飢え死ぬよりマシ……って感じだな……」

それ以外に言いようのない味だ。

チライの感想に、となりのレモも指を出して液体をすくう。

「げえ！ だ、だめだ、俺は……！」

しかし、口に入れたとたんに吐きだしてしまった。

「贅沢言うんじゃないよ。買ってきた食料だけじゃ五十日ももたないんだからね」

レモにはかわいそうだが、それが現実だ。

バンパに到着するまでに、当面の食料やブローリーの傷の手当て用の薬などを買いこんできたが、それがなくなればあとは自分たちで調達するしかないのだ。

レモが顔をしかめていると、不意にブローリーが洞窟の入り口を振りかえった。

「だれかきた」

「えっ？」

スカウターをつけていないブローリーがなぜわかったのかは知らないが、ウソをつくような男ではない。とすれば、まさかフリーザ軍が追ってきたのか。

かまえるブローリーのうしろで、レモとチライも警戒に身をかたくする。

「おーい、入っていいかア？」

洞窟の入り口からどこかのんびりとした声が聞こえた。そして足音が近づいてくる。

「あれ、だれだ？ おめえたち」

警戒する三人の前にひょっこりとあらわれたのは、悟空だった。

意外な登場人物に、チライが驚いた声を出す。

「お、おまえ！ 地球のサイヤ人……！」

悟空はきょとんとした顔でレモとチライを見て、「あ、そうか！」と指をさした。

「ドラゴンボールを使ってたフリーザ軍の！」



「なにしにきた!!」

腰<sup>こし</sup>のポシェットからとりあえずトンカチ<sup>と</sup>を取りだして叫<sup>さけ</sup>ぶレモにかまわず、悟空<sup>ごくう</sup>はニコニコと笑<sup>わら</sup>いながらブロリーの前<sup>まえ</sup>までやってくる。

「ブロリーの仲間<sup>なか ま</sup>だったのかー」

「なにしにきたって聞<sup>き</sup>いてるんだ！」

「まあ、そうカリカリすんなよ。闘<sup>たたか</sup>いにきたわけじゃねえんだからさ」

笑顔<sup>え がお</sup>のまま、ブロリーに「よっ」と手<sup>て</sup>をあげる。

警戒<sup>けい かい</sup>しながら、レモとチライは、けげんそうに顔<sup>かお</sup>を見あわせた。

「……じゃあなんだ」

チライが下<sup>した</sup>から悟空<sup>ごくう</sup>をすどく<sup>ごくう</sup>にらみつける。

けれど悟空<sup>ごくう</sup>はまったく気<sup>き</sup>にせず、持<sup>も</sup>っていた荷物<sup>にもつ</sup>をかか<sup>み</sup>がけて見せた。

「ひどい星<sup>ほし</sup>だって聞<sup>き</sup>いたからさ、いろいろ持<sup>も</sup>ってきてやったんだ」

「よけいなお世話<sup>せ わ</sup>だ。帰<sup>かえ</sup>んな。だまされないからね！」

「ははは！ これ、ブルマってヤツにたの<sup>な</sup>んでもらってきたんだ」

強<sup>つよ</sup>気に前<sup>まえ</sup>へ出てきたチライにかまわずに、悟空<sup>ごくう</sup>は荷物<sup>にもつ</sup>の中<sup>なか</sup>からホイホイカプセル<sup>と</sup>のケースを取りだす。

「ちょっとそこどいて、ほいっ」

ポウン！

投げたカプセル<sup>な</sup>が着地<sup>ちやく ち</sup>すると同時に、ドーム型<sup>どう じ</sup>のカプセルハウス<sup>がた</sup>があらわれる。

「「えっ!?!」」

初<sup>はじ</sup>めて見る光景<sup>み</sup>に、三人<sup>こう けい</sup>は驚<sup>にん</sup>きをかくせなかった。

「家<sup>いえ</sup>の中<sup>なか</sup>に水<sup>みず</sup>とか食料<sup>しょくりょう</sup>とか、いろいろいっぱい入<sup>はい</sup>ってっから」

「「おおお～！」」

ハウスに駆けよったレモとチライは、中<sup>なか</sup>を見<sup>み</sup>て思<sup>おも</sup>わず歓声<sup>かん せい</sup>をあげた。

部屋<sup>へ や</sup>はひろく、快適<sup>かいてき</sup>だ。

「あとこれ、仙豆<sup>せん ず</sup>ってんだけど……」

そんな二人<sup>ふた り</sup>に、悟空<sup>ごくう</sup>は荷物<sup>にもつ</sup>の中<sup>なか</sup>から仙豆<sup>せん ず</sup>を二粒<sup>ふた つぶ と</sup>取りだしてわたす。

「二粒<sup>ふた つぶ</sup>やる。やべえ死ぬ<sup>し</sup>ってときに食<sup>く</sup>うといい。病<sup>びよう</sup>気<sup>き</sup>は無理<sup>む り</sup>だけど、ケガ<sup>な</sup>とかならずっかり治<sup>なお</sup>って、体<sup>たい</sup>力<sup>りよく</sup>も満<sup>まん</sup>タンになるぞ」

ニカツと笑<sup>わら</sup>う悟空<sup>ごくう</sup>に、チライは疑<sup>うたが</sup>いの視線<sup>し せん</sup>をむける。

そんなにいいものを、あれだけの死闘<sup>し どう</sup>を繰<sup>く</sup>りひろげた相手<sup>あいて</sup>にわたすなんて、裏<sup>うら</sup>がある<sup>おも</sup>としか思えない。

「……なにをたくらんでるんだ？」

だが悟空<sup>ごくう</sup>は「えっ」と目<sup>め</sup>を丸<sup>まる</sup>くした。疑<sup>うたが</sup>われたことに驚<sup>おどろ</sup>いたようだ。

「そんなじゃねえさ。元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>に生きてろっただけだ」

「はあ？」

三人<sup>にん</sup>のやり取り<sup>と</sup>をきょんとした顔<sup>かお</sup>で見ていたブローリーにむきなると、悟空<sup>ごくう</sup>はパツと明るく笑<sup>あか</sup>う。

「オう、強い<sup>つよ</sup>のには自信<sup>じしん</sup>があつたのに、もっとずっと強い<sup>つよ</sup>ブローリーがあらわれてさ。しかもおんなじサイヤ<sup>じん</sup>人<sup>じん</sup>だ。たぶんビルス様<sup>さま</sup>より強いぞ！ あ、ビルス様<sup>さま</sup>ってのは神様<sup>かみさま</sup>なんだけどさあ——」

悟空<sup>ごくう</sup>が興奮<sup>こうふん</sup>氣味<sup>ぎみ</sup>に話<sup>はな</sup>す内容<sup>ないよう</sup>は、三人<sup>にん</sup>にはさっぱりわけがわからない。

強い<sup>つよ</sup>自分<sup>じぶん</sup>に自信<sup>じしん</sup>があつて、なのにもっと強い<sup>つよ</sup>敵<sup>てき</sup>があらわれたら、ふつうはいやなものじゃないのか。

それにビルス<sup>かみさま</sup>ってだれだ。神様<sup>いみ</sup>？ 意味<sup>いみ</sup>がわからない。

「とにかく！ そんなすごいヤツ<sup>し</sup>に死<sup>し</sup>なれちゃ、もったいねえだろ」

うれしそうにそう言<sup>い</sup>って、悟空<sup>ごくう</sup>はブローリーに視線<sup>しせん</sup>をあわせる。

ブローリーは、そこでやっ<sup>じぶん</sup>と自分<sup>い</sup>のことを言<sup>い</sup>っているのだとわかつた。

悪い<sup>わる</sup>氣<sup>き</sup>はしない。それどころか、認め<sup>みと</sup>られたよう<sup>よう</sup>でなんだかちょっとうれ<sup>き</sup>しい氣<sup>も</sup>持<sup>も</sup>ちだ。

自然<sup>しぜん</sup>と小<sup>ちい</sup>さな笑<sup>え</sup>みを浮<sup>う</sup>かべたブローリーに、悟空<sup>ごくう</sup>は満<sup>まん</sup>足<sup>ぞく</sup>して踵<sup>きびす</sup>を返<sup>かえ</sup>す。

「まあいいや。とりあえず元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>でな！」

なんとなく洞窟<sup>どうくつ</sup>の外<sup>そと</sup>までいっしょに出<sup>で</sup>たレモとチライは、「じゃ」と手<sup>て</sup>をあげて挨拶<sup>あいさつ</sup>をする悟空<sup>ごくう</sup>のまわりをきょろきょろと見<sup>み</sup>まわした。

「え、宇宙<sup>うちゅう</sup>船<sup>せん</sup>がない？」

悟空<sup>ごくう</sup>の乗<sup>の</sup>ってきたはずの宇宙<sup>うちゅう</sup>船<sup>せん</sup>は見<sup>み</sup>あたらない。

嵐<sup>あらし</sup>のない日<sup>にっ</sup>中<sup>ちゅう</sup>のバンパの、ただただ雄大<sup>ゆうだい</sup>な風景<sup>ふうけい</sup>がひろがっているだけだ。

「おまえ、どうやってきたんだ？」

「瞬間<sup>しゅんかん</sup>移動<sup>いどう</sup>できるんだ。ブローリーの氣<sup>き</sup>を探<sup>さが</sup>してさ」

立ち止<sup>た</sup>まった悟空<sup>ごくう</sup>はうしろを振りかえり、笑<sup>え</sup>顔<sup>が</sup>で指<sup>ゆび</sup>を軽<sup>かる</sup>く額<sup>ひたい</sup>にあてる。

チライは眉<sup>まゆ</sup>をひそめて悟空<sup>ごくう</sup>を見<sup>み</sup>あげた。

「あんたの言<sup>い</sup>ってること、やっぱ全然<sup>ぜんぜん</sup>わかんないね」

「またきていいか？」

チライはぎろりと目<sup>め</sup>をつりあげる。

「言<sup>い</sup>っとくけど、あたしたちはあんたの敵<sup>てき</sup>だからね。フリーザ<sup>ぐん</sup>軍<sup>ぐん</sup>はクビかもしれないけど、あんたの仲間<sup>なか</sup>になんてならないよ」





「そんなことはどっちでもいいさ」

悟空は肩をすくめて、それからブローリーに好戦的な笑顔をむけた。

「オラは、たまにブローリーと闘わせてほしいだけだ」

強いヤツと闘えるのはワクワクする。それはおそらくサイヤ人の本能だ。

ブローリーは強い。力の使い方を覚えれば、もっともっと強くなれる。

「オラのほうから教えてやりてえことなんかもあるしな」

今度の闘いは、きっかけはあんなことだったけれど、ブローリーもおそらく本能では悟空との闘いを楽しんでいた。

その証拠に、また闘える可能性をひめた悟空の言葉で、ブローリーも笑っているようだ。

そんな二人を見あげたチライは、あきれたように息をついた。

「あんたそうとうイカれてるようだね」

「え？　なんでだ？」

あれだけやりあってまだ足りないなんて、ふつうの感覚ではわからない。

だけど、当面の食料を助けてくれたことは素直に感謝してもいい。

「まあ、とりあえず礼は言うよ」

チライは右手の親指と人差し指をつけて、オーケーサインを作って見せた。

「サンキュー」

「おう！　じゃあな。またくる」

「もうここにはいないかもしれんぞ」

レモがむすつとしながら茶々を入れる。

悟空は額に指をあてたまま、「だいじょうぶ」とレモに言った。

「そんなに遠くなきゃ探せる」

そのままふたたび背をむけた悟空に、チライが声をかける。

「あんた、名前は？」

「孫悟空。……それと」

悟空は肩越しに三人を振りかえり、

「カカロット」

地球に住むサイヤ人としての名前を告げ、瞬間移動で仲間のもとへとどったのだった。



お  
終わり

この本は、映画『ドラゴンボール超 フロリー』（二〇一八年十二月公開）をもとにアレンジしたものです。

## 作者紹介

原作・脚本・キャラクターデザイン

**鳥山 明** とりやま・あきら

漫画家。1978年に『週刊少年ジャンプ』にて読切作品『ワンダーアイランド』でデビュー。代表作『Dr.スランプ』、『ドラゴンボール』はTVアニメ化され、世界中で今なお人気を博している。

著

**小川 慧** おがわ・すい

北海道出身。小説家・コミック原作者。みらい文庫では、人気ドラマ『世にも奇妙な物語』や、映画『僕のヒーローアカデミア THE MOVIE〜2人の英雄〜』のノベライズを執筆している。

## 「みらい文庫」読者のみなさんへ

言葉を学ぶ、感性を磨く、創造力を育む……、読書は「人間力」を高めるために欠かせません。たった一枚のページをめくる向こう側に、未知の世界、ドキドキの未来が無限に広がっている。これこそが「本」だけが持っているパワーです。

学校の朝の読書に、休み時間に、放課後に……。いつでも、どこでも、すぐに続きを読みたくなるような、魅力に溢れる本をたくさん揃えていきたい。読書がくれる、心がきらきらしたり胸がきゅんとする瞬間を体験してほしい、楽しんでほしい。みらいの日本、そして世界を担うみなさんが、やがて大人になった時、「読書の魅力を初めて知った本」「自分のおこづかいで初めて買った一冊」と思い出してくれるような作品を一所懸命、大切に創っていききたい。

そんないっぱいのおもいを込めながら、作家の先生方と一緒に、私たちは素敵な本作りを続けていきます。「みらい文庫」は、無限の宇宙に浮かぶ星のように、夢をたたえ輝きながら、次々と新しく生まれ続けます。

本を持つ、その手の中に、ドキドキする未来——。

本の宇宙から、自分だけの健やかな空想力を育て、“みらいの星”をたくさん見つけてください。

そして、大切なこと、大切な人をきちんと守る、強くて、やさしい大人になってくれることを心から願っています。

2011年 春

集英社みらい文庫編集部

集英社eみらい文庫

ドラゴンボール超<sup>スーパー</sup> ブロリー

映画ノバライズ<sup>えい が</sup> みらい文庫版<sup>ふん こ ばん</sup>

原作・脚本・キャラクターデザイン<sup>とり やま あきら</sup> 鳥山 明

著<sup>お がわ すい</sup> 小川 慧

© Toriyama Akira Ogawa Sui 2019

© バードスタジオ／集英社

© 「2018 ドラゴンボール超」製作委員会

2019年5月31日発行

この電子書籍は、集英社みらい文庫「ドラゴンボール超 ブロリー 映画ノバライズ みらい文庫版」  
2019年4月16日発行の第5刷を底本としています。

北畠輝幸

株式会社 集英社

京都千代田区一ツ橋2丁目5番10号

101-8050

電話

03-3230-6080（読者係）

かり（パナナグローブスタジオ） 中島由佳理

ハッパングラフィックコミュニケーションズ

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。